心を受け取った女

2

島さち子

心を受け取った女　2

装画　　島　さち子

27　マリナの音楽葬

結城マリナの本葬は火事から三週間後、喪主、黒川信哉で、音楽葬として盛大に行なわれた。
マリナと交流のあった内外の音楽家や、黒川関係の経済人も多く、葬儀といっても何となく華やいだ空気が感じられた。正面、壁面一杯、赤い薔薇に囲まれて艶然と微笑む、巨大なマリナの肖像の下、オーケストラによるレクイエムが奏でられていた。やがて曲はジャズ調の軽快なテンポになった。
結城商事の社員達は一般の参列者と同じ扱いで、献花だけが許されていた。幸田ケイも三田則子も顔を出さない。北洋不動産の社員が取り仕切り、寺村達がかいがいしく立ち働いていた。多くの取引先が来ているから、雲野は喪主の近くに割り込んでいく。

「社長は如何なさいました？」言葉をかけられる度に、「はあ、実は、アメリカで交通事故にあいまして療養中です。社長の希望で今しばらく……」とオームのように繰返した。
妻の葬儀に夫が姿を見せない不自然さは、参列者から参列者に口々に囁かれ、葬儀を落着きなく揺さぶってしまう。
「海外にご滞在だとおっしゃる方と、国内だとおっしゃる方がいらっしゃいますのね？」
皮肉な言葉。　暗に、社長が夫人を焼死させた犯人で、既に警察で取り調べを受けているかのような噂が流れ出していた。
「黒川家でそんな噂を流しているんですかね」
雲野が小声で呟くと、佐々は喪服の四十近い女を指さした。女はすらりとした後姿を見せ、前に立っている男と一心に話し込んでいる。
「あの女ですよ。片っ端から、社長に会わなかったかと、聞いて回っているんです。自分の家に社長は元気だと、電話があったと言ってるんです。だから、社長がこの葬儀に来ていない筈がないと、捜し回っているんですよ」
いま、マリナの愛した、血のように赤い薔薇の花を手向ける参列者の列に、割り込んでいく喪服の女はそそとした風情で、果してそんなことを口走っているのだろうか？
「何者かな？　名前は聞きませんでしたか？」

雲野は警戒しながらいった。
「なんていったっけ、ああそう、白川とかいったかな？」
佐々が左右に首を振った。
「白川！」……ということは、いつか、夏木さやかが社長に尋ねられたと言っていた、白川さんと合致するな？
「心当りがありますか？　社長の身内にそんな人いましたかねえ？」
「知らないなあ。それにしても、社長が帰られたのなら、何故、会社に知らせもしないで、あの女に知らせたりしたのかな？」
雲野は混乱し、社長が生きていると錯覚しはじめる。
「かなりの美人ですね。直接当って聞いて見ましょうか？」
佐々は人々を掻き分け、女の方に歩きだした。いい女には目がないんだから……。
その時、黒い腕章をつけた男が二人、女の両側にぴたりと張り付いた。あっと思う間、女は宙吊りのまま会場の外に引き立てられて行く。
雲野は佐々を押し留め、女を追って会場を出た。出たところで喪服姿の女が道路にあられもなく這いつくばっているのが見えた。急いで駆け寄って助け起した。
「すみません。何て乱暴な人たちなんでしょう。わたしを放り出せと、黒川って男が命令したんです

よ！」
女は蒼白な顔で唇を噛み、脅えた目で周囲に警戒の視線を走らせた。
「お怪我ありませんでしたか？　遠くから見ていましたので、間に合わなくて……」
雲野は警戒心を解くように優しく言った。
「結城社長は体調が悪いというより、悪妻の葬儀に出席する気がなかったのでしょう」
「そうでしょうか？」
女は喪服の裾を払った。声は重く、抑揚もない。
「結城商事の雲野と言います。よろしかったら、僕の車でお送りします。どちらまでいらっしゃいます？」
雲野はさらりと言ってのけた。
「でも遠いんですよ。仙台ですから」
女は迷惑そうにいった。
「それなら、もしかしたら白川さんでいらっしゃいますか？　社長から何度かお噂を伺ったような気がしますが？」
出任せでもかまわないさ。とにかくこの女の正体を暴かなければ……。
「海人さんがそんなことを？　……ほんとうに？」

女はためらいがちに雲野を見た。
「仙台市だったら、あそこの病院に用があって、今日明日にも行かなければならなかったんです」
雲野は積極的に出た。
「病院って何病院ですの？」
女は気ぜわしげに眉を曇らせた。
「社長とはどんな？」
質問が聞こえたのか聞こえないのか、答えは返ってこない。そういえば、たった今、社長から噂を聞いていると言ったばかりだ。雲野が駐車場から車を回してくると、女は携帯電話をかけていた。
「……ええっ、どうして？　ああ、それなら、紺色のアウディだわ」
雲野の行動を誰かが探っているのでは？　疑心暗鬼になったところで、女は黙って車に乗り込んだ。
「どなたにお電話を？」
返事はない。
高速道路に入るとスピードを上げた。窓から外を見つめ続けていた女の横顔が動いた。唇から顎の線が小刻みに震えている。屈辱的な扱いを受けた口惜しさのせいだろうか？
これで一応、社長が仙台市にいた理由も、病院で老人達が見かけたという裏づけも取れたのかもしれない。三田則子は仙台に行って見るといっていたが、行く暇はなかったようだな。

いまさら、危険極まりない仙台市にいくことはないんじゃないか。そう思いながらも、相手が女であることに気を許して、そのまま仙台市に近づいて行った。

沈黙が続き、雲野は自分の方から言葉をかけるタイミングを外してしまっていた。

一時間も過ぎた頃、女が用心深そうにいった。

「結城さんの愛人だとおっしゃる方から、お電話いただきました。社長はとてもお元気だと……。秘書か何かの方に、お心当たりはございませんか？」

「……そう言われれば、現在、行方のわからない女性が一人おります。電話したのは恐らくその女だと思います。ちょうど社長夫人の亡くなられた後、姿を隠していますから。……声に特徴は？」

「普通のお声でした。なんとか、その方の行方を掴む方法はございませんか？」

「心配してるんですよ。社長夫人のようなことにならなければいいがと……」

「と、おっしゃいますと……結城海人が殺人犯だとでも？　あの方はそんなことの出来る人間ではありませんよ。わたし、幼い頃から見て来ました。海人さんは騙されても騙す人なんかじゃないんです。まして恨みを晴らすタイプではありませんわ」

なりふり構わず、社長の居場所を聞き出そうとしていた理由を聞きたかったが、女には雲野を拒んでいるような雰囲気があり、雲野も立ち入り過ぎる危険を感じて、ただ受け流していた。

漸く仙台の市街地に入りかけ、そろそろ女を降ろして引き返す方が無難なのでは、と思い始めた時、

突然、前方に少年の姿が現われた。少年はこの車に向かって一目散に走ってくる。パジャマ姿だ。躍り上がって手を振っている。

「マミー？」

目を閉じていた女が、弾かれたように車窓にとりついた。少年が車を交わしながら、車道を走って来る。

「危ない！　和馬！　どうしたのかしら、死んじまうわ。止めて！　停車して下さい！」

雲野は慌ててブレーキを踏んだ、車は少年の前を素通りしていく。後方で少年が道路に座り込んでいるのが見えた。

「結城のことが心配で、待ちきれなかったんですよ」

喪服の女は少年に向かって小走りで行く。

「和馬、駄目じゃないの。こんなことしちゃ！」女は少年を、走ってくる車から庇うように、しっかりと抱きとめた。

「小父さまに会えた？」

少年が叫んだ。

「結城商事の方よ。怖いことないから……」

女は雲野を振り返った。

「県立病院はすぐそこですよ」
車道の向こう、五階建の病院が緑の畑の中、陽光を白く照り返していた。
「海人さんをお連れして帰ると、約束したものですから」
女は素早く雲野側に、親鳥が外敵から雛を保護するように少年を抱え直した。
少年の顔に血の気は感じられない。自然にそそげ立っている眉、切れ長の目、しゃくれた顎、ややむくんだ顔に、駄々っ子じみた凶暴さがちらちらする。この顔は母親似、社長と似ているとはいい難い。……だからといって、その親子関係を全面否定することはできないが……。
地元の刑事に思い出されでもしたら、一巻の終わりだと分っていても、雲野は真相解明の好機を逸することも出来なかった。こうなっては、逃げ帰るわけにもいかないさ。
この親子こそ、社長の身の回りの物を奪い、社長に成り済ましているのかもしれない。外を駈け回れるとは、ニセ病かもしれないのだから……。
「結城の小父さまが犯人だなんて、嘘ですよね！　答えてください、小父さまは今何処？」
少年は雲野に向かって問いかける。女はハンカチをくしゃくしゃに握り緊めた。雲野は答えに窮していた。相手は十歳足らずの子供なんだ。出来たら嘘はつきたくない。だが……と思うだけで、ストレスが、胃までぴりぴりと痙攣させる。少年は車に乗っても激情にかられて手を振り回した。
「どうして黙ってるんだ！　結城海人、小父さまはどうしているかって、聞いているでしょう！」

行きがかりは恐ろしい。とうとう病室のベッドに少年を運び込み、寝かせるところまで付き合わされていた。屈強な男が待ち伏せしていなかっただけでも、儲けものにも思える。
女は病室から急ぎ足で出て行った。少年はベッドから両手をだらりと垂らし、目は半眼に開いている。枕もとには、小さな手鏡が投げ出されていた。
「寝ちゃったのか？」
雲野は遠慮勝ちに声をかけた。
「きみが小父さまと呼んでいるのは、きみの本当の伯父さん？」
「お父さま、パパだよ」
少年は二三秒の間をおいていった。
社長はこの少年を見舞った帰りに、行き倒れになった。それに違いないな。
病室を出ようとして振り返った。少年が小さな瓶を雲野に向かって突き出していた。
「これ、小父さまに返して下さい。携帯電話は小父さまを追いかけた時、雪の中で落としてしまったと、謝っていたと、伝えて下さい」
少年は掠れた声で言うと、力尽きたように目を閉じた。
「ああ」なんだ、薬のような気もするが……。社長の携帯電話はこの少年が雪の中で紛失させたのか？
他に拾得した人間がいて、携帯に出ても、すぐに切ってしまったのでは？　雲野は女が何者かをつれ

て来ない内に病室から出た。
病院からうまく抜け出すつもりだったのに、女は雲野を見つけて廊下をくる。戸惑っていると廊下の彼方で白衣の男が手招きしていた。
もし社長を解剖した医師だったりしたら……。雲野の足は硬直して不規則な音を立てた。
「どうかしたんですか？」
白川和馬の主治医が眉を寄せた。
「結城に何かあったんですね。 鮎子さんから聞きましたが、要領得なくて」
丸茂と名乗った医師は女が病室に入るのを見届けてからいった。
「ええ、ちょっと連絡がなかったので、心配していたんですが……、会社に先日出勤され、直ぐまた海外へという具合で、……体調を心配しているんですよ」
雲野はなんとか説明した。
「僕が結城に会ったのは、まるで、天変地異が起ったような物凄い雪の日でした、それも三月。裏日本でもない平場にあんな大雪が降るなんて珍しいことでしたから覚えていますよ。 結城は前から和馬君の病状を心配して、かなりしつっこくこの病院に尋ねて来ました。腎臓が悪くて透析しているものですから、出来るなら、自分のものを片方提供したいと言い出しまして……」丸茂は髪を何度もかきあげた。

「移植となるといろいろ合ってないと、不可能なんでしょう？」雲野が乏しい知識を総動員する。
「確かに……。　調べた結果、全く……いや、出来ないことが分りました」
「父親だったら提供できるのでは？」
「鑑定結果、結城と和馬くんには親子関係は成立しませんでした。これは口外できないことですが、誤解されては、後々結城も困ると思いましてね、内密にお話しました」
　社長の家に波風を立てていたのは、この親子だったのかもしれない。社長はショックを胸に……。
「あんなに大人しそうな顔をしていて、あの女、なかなかの曲者なんですよ！」丸茂は感情を剥き出しにした。
「結城は、おまけに精密検査の結果、心臓の悪いことまで判明してしまって、とても移植どころじゃなくなったんです。　彼、危ないところで命拾いをしたんですよ。……育ちのせいかな、彼は子供の頃から、頭はいいのに簡単に人に騙されたんです。それで彼のママがトランプのマジックを教えました。ところがそれが病みつきになり、魔術団の追っかけになって家出をしてしまったんです。しばらくして、アメリカでマジックショウに出ているのを見たという噂を耳にしました。それが彼の不幸の始まりでした、彼を捜しにいったご両親がアメリカで交通事故で亡くなられたんです。　結城貿易は暫くして廃業しました。彼、高校一年の時、また学校に戻ってきました。何事もなかったように。今度は確率論に、はまっていました。トランプのマジックをしていて興味を持ったのだそうです。もしかし

たら数学者になるのかなと僕は思ったんですよ。マリナさんに魅入られさえしなかったら、多分そうなっていたでしょう。彼は相変わらず、だまされ続けていました、和馬を自分の子供だと信じていたんです。そんな馬鹿な彼が、僕は好きなんですよ。彼、究極のマジックをどう使ったのか？……彼が連絡してきたら、身体だけは大切にしろと言っていたと伝えて下さい。発作はドカーンと来るんだから……。でも海外と聞いて安心しましたよ。あちらは心臓に関しては、日本より遥かに進んでいるから大丈夫だと思います」

幼稚園から高校まで、社長と一緒だったという丸茂医師は、雲野が腰を浮かしているのに気付いたのか、そこまで言うと白衣を翻して去っていった。

結城家の書斎に、少年の手品師がトランプを操る姿を描いた油絵があった。あれが社長だったとは……。別荘で社長が、楽しそうにトランプのマジックを披露した日の、あの笑顔が思い出される。

帰路、雲野が緊張で強張った顔をごしごし擦ると、油絵の中のしなやかな少年の姿が、千切れてはまた生き返って、笑い声をあげながら、アウデイの脇を猛スピードで駆け抜けていった。

28　砂トラで運ばれた、美女死体！！

「砂利トラで運ばれた女性死体！！」

二十六日午前、メモリアルビル建設現場で、基礎工事用の土砂の中に、女性死体があるのを、コンクリート会社の作業員が発見した。死因は砂による窒息及び頭蓋内出血で、死後一週間から二週間経過しているものと鑑定された。砂によって保護されていた為か、死体は腐敗も進まず、驚くほど良好な条件で保存されたものと推定される。砂の分析結果、近県の砂採取場から当日、ダンプカーで運び込まれた土砂の中に混入していた疑いがもたれている。先月末、神奈川県の砂採取場に近い山間に結城商事社長所有のポルシェが放置され、乗っていた中年女性が目撃されていた。警察では割り出しの結果、同社の女性社員を拘留、追及中である。尚、砂採取場の砂山に放置された所持品から、死体は同僚の結城商事社員幸田ケイさん、三十六歳と推定され、調査結果、同人と確認した。

ここ数日、社員達は仕事を中断して噂し合っていた。ケイの死体発見のニュースも三田則子拘留のニュースも、雲野大輔はもうずっと以前の出来事のように無感動に聞いた。

弁護士からの聴取によると、ケイのハンドバッグと社長のレーンコートが砂山の上から発見され、砂山の下には幾つもの空洞が現存し、ダンプカーを直接乗り込ませて、効率よく砂を積み込む作業が常習化していた疑いがもたれている。最近も落下事故があったが、ダンプの運転手に救われ一命をと

り止めた少女のあったことが噂されていた。ケイのバッグの中にあったメッセージカードと則子の持っていたメッセージカードが照合され、筆跡は社長の筆跡と類似してはいたが、鑑定の結果、筆圧が強く社長の筆跡の可能性は否定された。また、二枚のメッセージカードに書いてあった呼び出し時間に、一時間の間隔があり、犯行後、則子が現場に現われたように小細工した点、車の中に置き忘れた則子のハンカチ、持っていたポルシェのキーのついたキーホルダー、物的証拠にはこと欠かない。三田則子への疑いは動かし難いものになった。

白昼堂々、結城家に乗り込んで車を持ち出すには、車庫のキーも持っていなければならなかった。則子はそれも持っていたのだ。彼女は車の中に放置されていたキーホルダーを弄んでいるうちに、うっかり持ち帰ったのだと言い張っているらしい。車のハンドルからは、則子の一際鮮明な指紋とケイと社長の指紋が発見された。社長のレーンコートと帽子が、何故砂山に放置されたのか？　メッセージカードの筆跡も社長に似せた何者かのものであるとすれば、捜査本部としても社長の生死に疑いがあるとして、砂山の捜査を継続し三田則子を追及、何としても、自供に追い込むつもりだ。

当日、運良く雲野は招待ゴルフで、メンバーや、キャデーがアリバイを裏打ちしてくれた。際どいところでついているのかもしれない。

ケイは発見された時、スカートをつけておらず、警察の不手際から、あられもない肢体をかなり長時間、衆目に晒して置かれた結果、死体が魅惑的だったと、不謹慎な建設現場の作業員やマスコミ関

係者達の間で囁かれていた。
パブで飲んだ時など、ケイをセクシーだと思ったことがなかった訳ではないが、感情をむき出しにする日頃の彼女に接していた雲野にとって、この反応は面映ゆく哀しく、せめてもの仏への餞けのような気もした。
幸田ケイの遺体は司法解剖後、寡黙な老母と兄によって引取られた。身元不明で引取り手がないのではとの、雲野の心配も杞憂に終ったのだ。代々地方公務員の実直な家族は、ケイをマスコミからかばうように、挨拶もそこそこに帰って行った。この家族の中で、ケイの存在はどんな位置を占めていたのか空恐ろしい思いもあるが、犯罪とは無縁の世界に引取られ、安眠することに満足していた。
日協連の残党もいずれ警察に掴まるさ。雲野は徐々に自信と明るさを取り戻した。凶悪犯罪の多い世の中、僕の犯罪など取るに足りないもの。雲野はそう思うことに慣れていった。社長がいなくなっても、ケイがいなくなっても、見ろ！　誰がいなくなっても、こうして世の中は何事も無かったように連続していくのだ！
あのように強烈なケイの個性さえ、忘れ去られるのに時間はかからない。すべて消えゆくのみ、それだけが真実であってみれば、真面目に生きることもないのかも知れない。
今一番したいことをやるんだ！　誰にも遠慮はいらない、人間の一生など儚い！
雲野は手始めに、一階の喫茶室に夏木さやかを誘った。さやかは黙ってついて来る。もしかしたら、

彼女もそれを待っていたのでは？　雲野は思いを込めてさやかを見つめた、目が合うと、さやかは驚いたように首を傾けて会釈をした。誰にも挨拶一つしないと、ひんしゅくを買っていたのに……。なんと、けがれのない表情をしていることか！

面接でこの娘に出会った日の驚きが昨日のことのように思い出される。あの日雲野の目にさやかはこの世のものとも思えない存在に映ったのだ。どうしてそう見えたのか、今でも分からない。それにしても、ケイも則子も、どうしてああも執拗にさやかをクビにしたがったのだろう？　嫉妬か？

「雲野さんの考えていらっしゃること、当てましょうか？」さやかの目が悪戯っぽく動く。

「さあね、きみにわかるかな？」しびれていた。こんな気持は初恋以来だな！

「お子様のこと！」雲野はドキッとする。何も知らないくせに、ただ世間の物差しで僕くらいの男には妻子があるものと踏んだに違いない。

「きみはまだ、首が繋がってると思ってるの？」甘い期待をはぐらかされて、雲野は心の中とは反対のことを口にしていた。駄目じゃないか！　どこかで大きな舌打ちが聞こえる。

「万一、決定的な理由があったとしても、解雇するにはするで予告が必要なんです。あの人たちほんとに無智なんだから」さやかは肩を竦めて見せる。この前は何も知らなかった癖に？　おかしな娘だ。

「上司をあの人たちなんて呼んではいけないな、不幸に見舞われているんだから」

あの人たちの中に自分が入っていないらしいのが、特典でも与えられたように嬉しかった。店の中

には、今週のヒットチャートNOが流れていた。さやかはリズムに合わせて、次第に体を揺すりはじめた。雲野の体も揺れ始める。揺れる度にさやかの長い髪が、雲野の唇を微かに掠める。いい臭いがした。身体が萎えていくような、この開放感！

ふっと、我に返ると、佐々が監視するように雲野の傍に立っていた。

「ああ、副社長！　例の件ですが、あれ、社長宛に送金しておきましたから。事後承託で悪いが」それだけ言うと、佐々はそそくさと引き返した。雲野がロスの支社からの調査結果を心待ちにしているのを知っていながら……。佐々は副社長を無視して社長に従ったと言うわけだ、しかも正体不明の社長に！　大金をみすみす奪われてしまうのか？　金額が気になったが、佐々は副社長である僕に報告する気はないらしい。舐められてるな！　佐々だけではないさ、使いものになりそうもない老女の首一つ、僕は切れないでいるんだから。始めに掲げた理想とは裏腹に、能力外の社員が幸福そうに居座っていた。それなのに、この娘にだけ、ケイに押し切られ心にもなく強気にでたのだ。可哀想なことをしたな！

「状況が変わったから、クビを撤回してもいいんだが……」夏木さやかは満足想に口をすぼめる。

「そうか、そうか、そんなに嬉しいか！」雲野は笑いながら咳き込んでいるのか、咳き込みながら泣いているのか分らなくなった。「ずーと気になっていたんだ、そう、そうしてやってもいいんだよ！」雲野は柔らかい産毛の密生した、さやかの耳に唇を寄せた。

「勘違いしていらっしゃいます！」さやかはすかさず反論にでた。なんてややっこしい娘だろう。
「辞めなくていい、そう言ってるんだよ」雲野は罪滅ぼしの気分で、辛抱強くなる。
「お勤めは続けています」この娘にとっては、そうなんだろうが？「社長はどうしていらっしゃるのかしら？」この駄々っ子のような執拗さ。
「戻られたら、今度こそ、社長にクビにされるかもしれないな！」雲野は機嫌をそこねていった。
「社長がわたしをクビに？　あり得ないわ！」さやかが立ち上った。
あり得ないだろうか、そうかもしれない。社長は死んでいるのだから……。雲野が社長のことで固執すれば、疑いは雲野自身に回って来る。多少のことは目をつぶっていなければならないのだ。この娘は社長を見たといった。不思議だったのに聞く機会もなかった、今日なら聞き出せるかもしれない。
社長が行方不明だなどと社員が話していても、雲野にはもはや口を塞ぐ手立てはない。その上またもこの事件だ、僕と女達の関係も、口さがなく話題にされているに違いない。
「きみ、確か、社長と会ったことがあると言ったよね。社長室から出て来たところで、ガチーンと鉢合わせしたとかってさ！」雲野は怖がらせないように冗談めかしていった。
「あ、れ、れ、あれ？」さやかは頭に手をやる。
「そう、あれ。あれはきみの勘違いなんじゃないかな。社長など本当は見なかった！」雲野は単刀直入に出る。

「見なかったって？　そうかしら？　でも、あの方達の事件のこと、雲野さんお気になりません？」さやかは矛先をかわして雲野を見つめる。
雲野は目を反らした。これでは、いいようにこの娘にあしらわれてしまいそうだ……。
「がっかりなさることないと思います。あなただって、わたしだって、いずれ、そうなるんですもの。悲しむだけ損ですよ！」あなたと、わたしと、この娘は言った。とうとう、肩を並べてくれたな！その音色やアクセントを雲野は好ましいと思う。女性幹部を二人一緒に失ったようなものだが、彼女達との間に残るものがあるとすれば、それは薄汚れていく不快感。空しさを埋めるのに、この娘が役立ちそうな気がする。
「何を考えていらっしゃるか、今度こそ、当たりですよ！」さやかは穏やかに微笑んでいた。
「髭を剃り忘れたかな……」雲野は笑いながら頬を撫でた。気持が通じて欲しいな。幸福の予感、甘い陶酔の気分が、ゆっくりと全身に広がっていく。
「お家で待ってらっしゃる、奥様のこと！」
雲野は隙を突かれて、臆病な鼠に戻った。
「きみは誰？」顔色を変えてはいけない。この娘は僕の反応を見ているのか？　何故だ！　雲野はさやかに向き直った。
「そうか、きみは、こんな風に僕と話したかったんだな！」手を伸ばし、手をとろうとすると、さや

かはくるりと背を向けて呼んだ。
「あ、社長さーん！」
顔が蒼白になっていくのがわかる。入り口近くのテーブルでコーヒーを飲んでいた佐々が驚いて駆け寄って来る。
「あっち！」雲野はさやかの指さす方向をにらんで、あからさまに不快そうな顔にかえった。
そこには若葉が佇んでいた。雲野が気付いたのを知ると近づいてくる。
「雲野さんの坊や、お元気？」さやかが若葉に向かって問いかけた。
「坊や？」佐々が驚いて雲野をみた。
「わたしが近所の坊やを預かっていたとき、この方とお会いしたんですよ」
若葉が機転をきかせる。若葉と才気がこの娘と顔見知りだったとは……。
「なあんだ、あなた、兄の会社の方でしたの」若葉は快活に言った。
「坊やお利口でしたけど、なんてお名前でしたっけ。ああ、才気ちゃんでしたわね」
若葉はさやかの言葉を受け流した。
「お仕事のお話？　お邪魔かしら？」
「わたし、手当なんか請求してたんです。決まったものも支払えないなんて、呆れた会社なんですよ」
二人の女の間で、唖然としていた雲野は漸く現実に返った。この娘の前で才気はパパの名を雲野大

輔といったのかもしれない……。
「わかった、わかったよ。　支払ってあげよう！　金がなくて困っているんだろうから……。とりあえず、まあ、これを使ったらいい」雲野はポケットマネーをさやかの前に差し出していた。「困るなら、佐々課長とよく話し合ってくれたまえ。悪いようにはしないから……」
「本当に出すつもりですか？」佐々は雲野の差し出した紙幣を、横合いから奪うと、抜け目なく数えてから、不服想な声を上げた。
「わたし、明日、月給や手当など現金でいただきに来ます」さやかは悪びれたりしない。
「あなた、兄の近所に住んでいらっしゃるのね」若葉は愛想よく言った。
近所だって？　雲野は戸惑ってしまう。
さやかはにっこり笑って、佐々から取り戻した紙幣をポッケトに突っ込むと、派手に手を振りながら店から出て行った。
佐々も若葉に気を使ったのか、エレベーターに向かって急いでいく。雲野は妹さえいなければ、さやかの後を追ったに違いないと思う。
「若葉の馬鹿！　何だってお前は、僕の恋路の邪魔をするんだ！」
「ふふ,ふ、お兄さん好みの小娘ね。わたしが気を利かせたからよかったけど……、危険よ、家のまわりをうろつくなんて……」まさか、あんな呑気な娘が……、危険である筈がないさ。

「悪党の癖に、相変わらず間抜けているんだから。お兄さんたら！」
「お兄さんなんていうな、今度は大変なんだから。新聞見て知ってるだろう？」
「妹ですもの、別に後ろめたいことなんてないでしょう！　彼が重役として入社したら、いずれ紹介されるんですもの」
「なんだと！　お前まで、兄を手玉に取るつもりか？　おまえ先に出ろ、後から僕も行く。ほら、何時か行った店、サンデーに鞍替えだ！」
雲野は妹が出ていってから、数分計って店を出た。道端に禿頭の陽気な占い師が坐っていた。
「人生、籤運のようなものです！」
占い師がいった。一生に一度、占って貰おうと雲野が思った時、若葉が人ごみの向こうで振り返った。雲野は大急ぎで街角を曲がる。冗談じゃない、そんな得体の知れない男を会社に入れるなんて出来るもんか……。
雲野は群集の流れに乗って歩いた。若者の発する熱気に不安を忘れ、足取りも浮き浮きした。尾行されている気配はない。それは、ケイや則子の片がついたということか？　うまくいけばこのまま時が過ぎ、若い魅惑的な女との新しい人生が開けるのだ！
女の子達が覗き込んでいるショーウインドーのきらめき、そうだ、明日、夏木さやかが会計に手当を受取りに来る筈だが……。雲野は魅せられたように、光を跳ね返している宝石に見入った。

「こんなことじゃないかと思って、待ち伏せしていたのよ」
若葉が照明に白い歯を輝かせて立っていた。
「すっぽかすつもりだったんでしょう！　そんなこと、お見通しなんだから……。お兄さんを尾行している刑事はいないようね。でも、たった今、勇気を見たわ。外国旅行をしてきたみたいなキャリーバッグを引き摺ってた。こちらには気づかなかったようだけど。随分立派な洗練されたスーツ姿で、それこそ昔の面影なんてなかったわ」
「どこにいたって！　教えてくれれば力づくでも子供を引き取らせたのに……」雲野は残念そうに辺りを見回した。
「勇気がよれよれだなんて、お兄さんも何を見てるんだか？　でも、金に困っていないってことは朗報ね。勇気はそっとして置くのが無難だわ。それはそれとして、彼のこと、就職させたいのよ。お兄さんの会社でそれ相応の地位につけてもらえないかしら」
若葉は言い終わると、ほっとしたように息をついた。
「待てよ、今どんな危険な立場に僕たちがいるか、おまえにだって分らない訳ないだろう？　ケイが亡くなって大金が転がり込もうってときに！」雲野は焦っていた。
「そういうことなの！　ああ、言い忘れるところだったわ。お兄さん、あの女の子に惹かれては駄目よ。女には女を見る目があるんだから。お兄さんとは、タイプが違いすぎるのよ。危険だわ！」

さやかに対しては、ケイも則子も同じような態度をとった。綺麗だから同性に敵視されるんだな。
「勇気がいて危険だから、今日のところは、彼のこと頼むだけで帰るわ。考えておいて！」
若葉は踵を返すと、雑踏の中に足早に消えて行った。
若葉は、相手がケイでも則子でも、同じことを言って反対したに違いないさ。

29　二人目の雲野大輔

寝過ごして、ホテルから朝食もとらずに出勤ときめこんだ。白昼、雲野の後をつけて来る者がいる。悪事が露顕しかかっているのだろうか？　胃が糸のように絞り上げられ、尾行を振り切ろうとすると、急速に体が萎えてしまう。もう一歩で会社にたどり着こうとした時、後の足音が走り出し、あっという間に雲野の前に回り込んだ。
「どうした、なんか、びくついてるようだな。才気は無事なんだろうね？」
南原勇気が心配そうに迫ってくる。

「ここ、忙しくてね、ホテル暮らしなんだよ。ところで、才気がそんなに心配なら、早く連れ戻ってくれよ！」雲野はここをチャンスと催促した。
「ああ，才気は連れて帰る。家にはいなかったが、何処にいるんだ？」
「急ぐのか？　じゃあ、待っててくれないか。この近くに頼んであるんだから」
願ったり叶ったりだ。勇気が子供を引き取ってくれるとは……。雲野は飛び立つ思いだった。
「一緒に行くよ。才気を受け取ったら直ぐ帰るから……」
雲野は急いでタクシーを拾った。運転手がいるから、さすがの勇気も差し支えある話はしない。何故か勇気の雰囲気が以前と違ったような気がする。何か、こう、妙に高いところから見下ろされているような？　落着かない気分だ。若葉の言っていたスーツ姿でもないのにな？
ベビーホテルで才気を引取ると、勇気はしっかりと抱き締めた。立ち上がっても才気は勇気の腕に齧りついている。まるでコアラだな！　子供に父親の名を海野大輔と教えたのは何故か、問いただそうと思っていたのに、差し控えた。ここまで来ては、質問しない方が面倒がない。
駅前でタクシーから降りると、勇気は茶色の封筒を雲野に向かって差し出した。
「これを読んで、納得しておいてもらいたいんだ！」
雲野は笑いながら頷いた。才気を引き取ってくれただけでも嬉しかったのだ。しかし、待てよ。雲野は勇気の背に向かって毒づいた。

「読めって言うなら読ませてもらうが、納得するとは限らないぞ！」
予定表を見る、すっかり予定が崩れていた。一分たりとも無駄に出来ない。北洋不動産が別荘販売やネット販売に、殴り込みをかけて来たのだ。先鋒は寺村達だ。こっちは度重なる事件で、計画など崩れっぱなしだと言うのに……。
またも交通渋滞に巻き込まれ、運転手が空かさずカーラジオのスイッチを入れた。
雲野は封筒の封を千切った。

名無しの権兵衛様
『前略、私は、戸籍の抹殺されている間、氏名を「雲野大輔」と名乗らせていただきます。
雲野大輔の住民票は、既に私の住所に移しました。就職、結婚、養子縁組等のすべてを、私は雲野大輔の名に於いて行ないます。貴殿が私の戸籍を抹殺するという愚挙に出られた以上、こちらとしても貴殿に無戸籍者の悲哀を味わっていただくことにしました。
混乱を回避する為、以上ご報告申し上げます。　　六月吉日　　雲野大輔
追伸、尚、浜田才気は雲野才気として、養子縁組が成立し、本日入籍手続を完了致しました』
してやられたのだ。雲野は呆然としていた。才気が雲野才気で、父親が雲野大輔で、既に辻は

合っていたのだ。

「作戦も考えろ、解雇するには、ルールも責任もあるんだからさ」

その調子！結城海人が笑いながらさやかの肩を叩いた。彼はこんなにごたごたしたことの為に、生きていたかったのだろうか？　こんなにも執拗に、人々にかかわっていく正体は何なのか、さやかは判断できかねていた。

「なんだ、その言葉使いは！」佐々が気色ばんだ。

「支払い過ぎだよ。副社長はえこひいきが過ぎる、幸田さんの対応の方が正しかったんだ」

佐々はぼやきながら、予告手当や給料を何度も数え直した。

「社長が不在だと、こんな扱いを受けるんですもの、びっくりだわ！　とにかく社長には逐一報告しますからね」さやかは、当然のように結城海人の権威を笠に着る。

「社長、社長って、あんた、誰が社長だと思ってんだよ？」佐々が揶揄するように言った。

「社長は、結城海人。わたしだなんて言っていません！」さやかはむきになる。

何を感じとったのか、佐々が、さやかを手で制した。

「社長はね、交通事故にあい、サンフランシスコで療養中です。現在はホテルから大学病院に通院している。ロス支店でも、現地社員がホテルに行って確認済だ。パスポートも本人のものだったと報告してきた。社長が不在だなんて、よそで吹聴しないこと！　いいね！」

「そんな筈ないわ！」

さやかは即座に否定した、此処にいるのに……。

「僕個人としてはな、あんたを社長に会わせたかったよ。いや、本当、こんなに社長、社長って慕ってくれるんだもんなあ！」

佐々は急に語調を変えて言った。

「副社長のポケットマネーは、差し引いてないよ。まあ、貰っておくんだな！」

そのつもりだった、遠慮などしない。

「佐々さーん！　この会社、どうなってるんです？　社長室に、若いのが座り込んで、今日から重役だ、なんて、ほら吹いてますよ！」男の社員がうろたえながら駆け込んできた。佐々が目をむいて社長室に走っていく。数人の社員が佐々の後から追い駆けていった。

結城商事は揺れ動いていた、さやかはゆっくりと外に出た。力がふーっと四散していく、微風がさやかの頬を撫でる。ここともお別れらしい……。

目にかかっていた前髪を払うと、明るくなった視野一杯に、タクシーが徐行して行くのが見えた。

海人がさやかを小突いた。なあに、なに？　雲野大輔、確かに雲野ともう一人、見知らぬ男が乗っている。自分の会社の前をタクシーで通過していくなんて……。

さやかは空車のタクシーに手を上げた。

「素行調査なんです」

運転手は何もかも心得たように、前の車から目をそらさない。渋滞から脱け出すと、弧を描いて駅ビルにタクシーを横付けにした。

雲野は男と子供を降ろし、何か叫んだ。何と言ったのか、さやかには聴き取れない。子供に手を振るでもなく、何の感情も示さずに、雲野はタクシーに乗ったまま引返して行った。

さやかはタクシーから降り立った二人の後をつけて行く。長身の男は新幹線の改札の前で、時刻表を見上げている。よれよれのジャケットにジーンズ、ややX型の長い足、持物はリュックサック一つ。男は子供の手をとった。

この子供には雲野の家の前で、たしか、逢ったことがある。一見お粗末な顔に見えるのに、よく見ると長い睫がカールし女の子みたいな優しい顔立ちをしていた。

「のぞみ！」男の子が声を張り上げ、得意そうに周囲を見回した。

「楽しそうね！　どちらへ？」改札前で待ち会わせているらしい、ホステス風の女が、クッキーを子供に持たせようとした。男は女の手を阻むと子供を引き寄せ、防壁をつくるようにリュックサックを

子供の背にかけた。さやかは自分が拒否された気分になる。
子供は別に重そうな様子もしないで立っている、見ると床にリュックサックの底がついていた。
「これから、ロッカーから荷物を出して、のぞみの乗車券と、ガムとキャンデーを買って来るからね、此処で待っているんだ。動いちゃ駄目だよ」
男は子供に何度も言い含めた。それでも尚心配なのか、ちゅうちょしている。
「どちらにいらっしゃるんですか？」さやかは、そっと声をかけた。
「九州へ……」男は口の中でぼそぼそといった。迷惑がっているのだ。
「まあ！　わたしも！」たぶん海人が行きたがっているのよ、さやかを越えて伸び上がっているのがわかる。彼は興味しんしんらしい。
「わたし、坊やのお相手していましょうか？」
さやかは男を見ずに、子供に向かって言った。子供は恥ずかしそうにさやかを見てから、小さな口をきゅっと引き閉めて男を見上げた。
「女好きなんですよ。男しか家にいないものですから……。では、ちょっと見ていて下さいますか。すみません。ああ、貴女、乗車券は？　よかったら買って来て上げますよ」
男はさやかを安全とみたのか、通路を振り返りもせず大股で歩いて行った。子供は落着きなくきょときょとしている。

「今あっちに行った人、あれがボクのパパなの？」
「うん、そうだよ！」子供は得意そうだ。
この前、子供の名前は雲野才気、父親は雲野大輔だった。これは何の冗談？
子供はさやかを記憶しているだろうか？　嬉しそうに、さやかの両手を引っ張り、さやかを軸にして回り始める。危ない、リュックサックがすっぽり下に落ちた。重荷を下ろして子供の速度が速くなる、目が回ってしまう、止めて！　もう立っていられない。
「助けて！　助けて下さい！」さやかが大袈裟に助けを請うと、子供は満足げに鉤のような手を放して、丸い口を開けた。そうだ、思い出したわ。この子はあの日も、ケイに爪を立てられ足を引き摺って歩いていたさやかを真似て、大げさに足を引き摺って歩いていた。
「こらあ、ちびの癖に、なかなかの悪餓鬼なんだから！」手を上げようとした時、間一髪、スーツケースと紙袋を下げて男が戻って来た。
「雲野大輔さんでいらっしゃいます？」男は唖然とし、持っていた紙袋を取り落としそうになった。
「どうして？　ご存じ？」男は驚きを呑み込んでからいった。
「超能力と言いたいところですけど、坊やが教えてくれたんですよ」
さやかは肩をすくめる。
「そう？　ところで、博多までですが、よかったのかな？」男は乗車券と釣銭を揃えて、さやかの掌

に乗せながら言った。
「故郷、あちらなんですか？　それともお勤めが？」
「いいえ、お勤めはクビになっちゃって、つまり、気侭なんです」
名前など数限りなくあるのに、同姓同名だなんて奇妙なこと。世襲の名というのもあるけど、どうみても副社長とこの男、親子とは考えられない。
子供の堅い手が、又も、さやかの手を引っ張るから、男に続いて改札を通った。
「坊や、何歳？」
「二歳、あ、三歳」
「そう、三歳になったばかりなのかな？　じゃあ、坊やのお名前は？」
「わかんない！」
男は発着ホームでさやかに背を向け、冷えているビール缶をリュックサックの中に突っ込んでいた。
「最近、よ、養子に、し、したばかりだから、新しい姓が理解できないんですよ」男は名前を言わないくらいで、どもりながら言い訳をした。
列車に乗り込むと、さやかはショルダーバッグを窓際にぶら下げる。男はじっとさやかの手元を見てから、隣の席にゆったりと腰掛け、子供を抱き上げた。子供は男の膝の上からさやかの膝の上に、頭から突っ込んでくる。次々と、よくもまあ、やってくれるじゃない！　さやかは子供をしっかりと

抱き止める。
男はわざとらしく、咳き込んでから伸ばしていた足を引っ込め、靴をゆっくりと履き直した。
「正直にいって下さい！　誰に頼まれたんです？」
男は開き直って言った。
「あなたは俺達の後をつけてきた。そうなんでしょう！」
詰問され、さやかは凛然とする。急ぎすぎたのかもしれない。大人の男に凄まれるのは怖い。振り向くと、海人がサインを送ってくる。
「これ、あの、社長命令なんです。うちの会社の副社長も雲野大輔ですけど、ご存じですか？」
「ええっ！　おれと同姓同名の奴がいるとしたら、そりゃあ、そっちがニセ者！　なんなら、住民票か、戸籍でもお見せしましょうか？　……あなた本当にクビになったんなら、会社ときっぱり縁がきれたんでしょう。クビになってもなお、命令にしたがっているなんて考えられない？」
「でも、仕事がなくなると、何をしていいかわからなくなるのよね」さやかは心もとなくなる。
「そりゃそうだろうが……、社長命令とは？」男は腕組みをして考え込んだ。
才気はさやかの脇に座り込み、自分で列車を揺すっている気で体を揺すっている。
「同じ名だと何か利益があるのかしら？」さやかが声を潜めると、男は侘しそうに背を丸めた。
子供は舌と歯でさんざ弄んだキャンデーを、口から出すと男の口に持っていった。男はそれを心こ

こにないように、うっとりと噛み砕いている。最近養子にしたばかりだなんて、とても見えない？
「おれのせいじゃないな」男はかすれた声を出した。言葉が喉にひっかかっている。
「あなたのせいだなんて言っていません。副社長の雲野さんがわたしをクビにしたから、こだわっているのかもしれないんです」
さやかは小さな声で言った。
「社長と親しいなら、社長にクビを撤回して貰えばいいじゃないですか」
男は揶揄するように言った。
「他にも、雲野に対して恨みがまだあるんですか？」
男が背を正し、座高が急に高くなった。
「そうかも？　ともすると、殺したいくらい！」
何故、飛躍するの？　男は才気の亜麻色で細い髪の毛を、大きな手で神経質にかきあげる。
「勘違いしないで下さいよ。おれが貴女を、クビにしたわけじゃないんだから！」
なかなか芝居がうまいのね。これではお互いの了解のもとに、一つの名前を使っていると考えられないこともない。　何のために……？　解らない話。影？　そんな存在？
中を覗かせてもらう気などないのに、才気はガムの入っている、ぬめぬめとしたピンク色の口の中を、さやかに見せる。

「パパに似て二枚舌かな？　あれれ、三枚かな、四枚かな。舌を引き抜いてみないとわからないぞ！」
才気は涎の付いたガムを男の手に付着させた。男は手を痺れたように振ってから才気の口をハンカチで拭いた。
「とすると、あちらの雲野大輔は、わたしたちの共通の敵？」
「さあ？」男は心を閉じるように目を閉じた。眠った振りで押し通す気らしい。
さやかは椅子に凭れた。さっきまで見ず知らずだった赤の他人と、恐怖心も抱かずに、こうして同行している自分が信じられない。
雲野大輔が二人いるということは、名前が一つに肉体が二つ。名前が一つ足りないということね。一つ名前がなくなって、一つの肉体が余った。肉体は名前を無くして戸惑っていた。そんなとき、名無しの肉体は、がむしゃらに生存証明としての名が欲しくなる。海人が頷いた。
「わたし考えてみたんです。わかってきたわ。ニセ者の雲野大輔は、わたしの彼と同じような立場にいるのではないかと？」男はまたかと不快な表情になる。
「彼、何時の間にか他人の名で葬られていたんですよ。勇気という名前でだったと思います。名前に特徴がありますでしょう」男は突然、顔を両手で被い、頬を叩きながら顔を上げた。この表情はともすると、そうだ、読めてきたわ。結城海人は社長だったんだし……、雲野は現在、実権を握っているんだし……雲野大輔は勇気に狙われることになる。この男の存在がそこにすっぽりハマリ込んでいく。

あの会社で、昔、雲野大輔が雲野大輔でなかったという話は耳にしなかったわ。おそらく……いや確実に……。結城海人の死体が、南原勇気になった時点では、あの会社の雲野大輔は雲野大輔だった。

とすると、男は南原勇気！

「坊や、才気ちゃんでしたよね。なら、勇気、勇気って人知ってる？」

「わかんない」子供は不意に男の方に顔を向けた。

「冗談いっちゃいけないな！」男はパシッと言ってのけた。

「貴女はこのおれを、その勇気とかいう人物にしたがって、勝手に人の心の中に踏み込んで来る。本当に迷惑です！」男はふてくされたように足をたわめて横向きになった。

「なんなら、大阪の市役所に住民票があるから、電話して聞いてみたらいい！　こっちには何のヤマしいところもないよ。……ところで、貴女は、その勇気とかいう人物が、そういう立場にあることをどうして知ったんです？」

わたしが東京のホテルに落ち着いてから、仙台の警察署に、行倒れ人について問い合わせの電話を掛けた時には、行倒れ死体は南原勇気として引き取られた後だったのだ。勇気の名を出してはいけなかったのかもしれない。こんなことを軽々しく口走っては、改めて死体が誰であるかが問題になってしまう。危ない！　海人の命が危険！

「あなたは、誰の死体が、勇気の名で葬られたと聞いたんです？」男は頭をきっと上げると、ひたと

さやかを見据えた。
「さあ、それは……」足裏のたわみのなかで笑いに耐えながら、さやかは唇をつまんでいる。
「貴女は一体、誰？　……その話、相当多くの人が知っているとでも？」
「いいえ、この間亡くなった幸田ケイって人が教えてくれたんです」……こんな出まかせを言って大丈夫なのか、さやかは心細くなる。
「その人、何者？」
「ご存じないですか？　マスコミが騒いでいたけど、ダンプで運ばれた女死体のはなし」
「ああ、砂利トラで運ばれたと言う結城商事の女？」
「あの人会社ではアヒルみたいな声を出していたけど、七色の声をあやつる詐欺師だったんですよ！」
通路を行き来していた才気が童話でも始まると勘違いしたのか、ぴょこんと席に戻った。
「推理して下さいます？　実の犯人は勇気さんの奥さんではないのかしら。だって、ご主人の遺体ではないと知っていて引き取り、お墓に入れたんでしょう。何か目論見があったと思いません？」
男の喉のあたりに痙攣が走った。
「目論見？　なんだろう。夫はすでに逃げて、何の邪魔にもならない存在なんだから。死んだからって、一文の……」
何かに突き当たったのか考え込んでいる。

「そのニセ雲野は会社の副社長だといったね。しがない営業マンにしか見えないが？」
「知ってらしたんじゃない！　何故？　彼はこのどさくさで、会社の実権を握りつつあるって、知っていらっしゃるんでしょう？」
「貴女は何者だ？　何故おれにそんなことを話す？」茶色の目がさやかの中に食い込んでくる。
「例えば保険金をとるために、夫を戸籍から消してしまった。ね、よくあるでしょう！　……とすると、勇気さんの奥さんと雲野の共犯ということも充分考えられるわ。あなたは腹が立たないんですか！」一気にいってしまう。
　男は戸惑いを見せ、助けを求めるようにビールの入っているリュックサックを引き寄せた。
「貴女の正体は？」男はこだわっている。
「隠しても駄目。あなたは、雲野大輔ではなくて、南原勇気さん！」
　問い詰められそうになったら、一時も早く問い詰める側に回ること、それが勝ちだと聞いたことがある。
「わたし見たんですよ。貴方が駅まで、副社長の雲野大輔に送ってもらったのを」
　さやかは口をつぐんだ、喋りが過ぎたかもしれない。
　周りから音が掻き消えた。男は黙ったまま、何かを考えつづけている。さやかは息を詰め、次に起るものを待ち受ける。男は、突然、笑い出した。

「でも大丈夫！　今頃、奴は、真っ青になっている筈です」
男は内ポケットから折り畳んだ紙を取り出しながら言った。雲野に手渡したという手紙のコピーを、さやかは何度も何度も読み返した。
「名無しの権兵衛様かぁ！　やられっ放しではなかったんですね！」
さやかは涙が出るほど笑った。笑いが二人の間のぎこちなさを、見る間に取り除いてくれた。笑っている勇気は、どんな犯罪でも易々とやってのけそうに見えてくる。
「奴の綺麗な戸籍に、養子も女もぶち込むつもりだ！」勇気が珍しく感情を剥き出しにした。
「しかし、それだけでは、未完成だな！」海人がけしかける。
「勿論さ、ふたりの雲野大輔は一人になる。そして結城海人が生き返るんだ！」
勇気の言葉がさやかの心臓の鼓動を狂わせた。結城海人、確かにそう言ったのだ。
「わたし達、力を合わせたら……」
「ああ」
勇気は周囲に目を配り、突然、真実にぶち当たったみたいに真面目な顔に戻った。
「ああは見えても、あちらの雲野さんは手強いと思うわ」
「かもしれないな。今頃、おれを殺したいと手ぐすね引いている頃だろうから……。二度殺されるってのも、芸がないなあ。でも、彼が連続殺人事件の渦中にいるとはねえ！」

勇気は考え深そうに首を傾けた。さやかは上気し、体温が何度か上昇したような気がした。暫くはこの人についていきたい。

終点に着くと、何もかも忘れ果てたように、南原勇気は才気の手を引き、エスカレーターにも乗らず、一段毎に足を揃えて駅の階段を降りていった。顔を見られるのを警戒しているのだろうか？

さやかはその後から棄てられた女の気分でのろのろ歩く。何故、わたしを見ない？

この男は、総てを冗談として括ってしまう気かも知れない。普通の大人なら何時までも頭のおかしな女の子の相手などしている暇はないのだ。

「飛びっきりのお祭りなら、協力できると思うよ。でも実行するのは貴女がいい。女の方が成功率が高いからね！」

勇気は振り返るとさらりと言ってのけた。

どういう男なのか、ぎらつく夕日を浴びては、ますます人が良いのか悪いのか分らない、とりとめのない人相になった。

「急がなければならないってこともないんだが、夜陰に乗じて、見納めに母に会ってくるよ。手渡したいものもあるしね……。後でホテルに連絡するかもしれない」

駅前で、勇気は才気の手を取り、彼についていこうと決心したばかりのさやかを残して、何事もなかったように立ち去っていった。

他人に一生分くらい話した気がする。でも、海人が話したのか、さやか自身が話したのか判断できない。言いそこね、いいそびれてしまった言葉が、まだ喉元に大きな吹き溜まりをつくっていた。

「本当にお祭りを？」

何が気に入らないのか、海人の返事はない。さっきから彼はさやかを軽率過ぎると非難していた。わたし、色目をつかったりなんか、していない！

さやかは愕然とする。海人は、自分の命は自分で守るとでもいうのだろうか？　さやかを無視し、勇気らを追って、暮れかけた街に飛び出していった。

出遅れて、今度こそ独りぼっちだ。これから、どうしたらいいのか？

海人がいなくなると、明るかった視野が一気に暗転し、体が冷えていくのが分かる。考えてみれば、本物のわたしには、希望など無かったのだ。そう、死のほかには……。海人が脱け出して空っぽになってしまった、わたしには、もはや何一つ考えつかない。わたしが死を強く望めば、彼も死ぬ。そうだろうか？

さやかはぐるりと回転し、ふらふらと歩き出した。舗道には南国らしい棕櫚の並木が続いていた。

30　過去のお化け！！

案内してくれたホテルのボーイが出て行くと、ドアがカチッと大きな音を立てた。もう二度とドアが開くことはないような、そんな気がした。

結城海人といた時の自信や昂揚感は喪失していた。わたしが心を乱すことなど、これっぽっちもない筈よ。心を乱すも、乱さないも、結城海人の描く魔法の輪。海人は自分の命を守ることなど出来っこないのに、わたしを置いてけぼりにして平気なのだ。何よりも、それがショック！

見知らぬ町のホテルの一室で、さやかは犯人であるかのように……海人の命を無視して、お喋りし過ぎた犯人が小さくなっていた。カーテンを引き、息を潜めて……。

何が善で、何が悪かなんて、公式はないわ。一度それが崩れ去ってしまえば、自由に、多彩に生きることが出来る。わたしを殺人犯にしたがったのは、貴方達よ。

それなのに、一人になると、この姿勢に馴染んだ過去みたいに、とても無力だ。海人が不在で、心のなかに影が浮ぶ。黄ばんだ絨毯、いくつもの足の裏。互いに焦点の合うことのない友人達。わたしは絶望していたのだ。あの日々に、どんな未来が描けたというの？

顔を探ってみる、滑らかな肌、張りのある頬のふくらみ、ニキビ一つ、引き締まった唇、丸みのあ

る顎のカーブ、夏木さやか、十九歳。マンションに入居する時運転免許証が身分を証明してくれた。
地方新聞の記者だったわたしの父は死に、兄弟姉妹はない。胸の空洞を影が満たし、頭痛がくる。
「違うわ。違うってば！」
ギーという音。上体を折って頭を抱えると、赤いドアがグイと目の前に迫り、ドアが開く。何度でも。衝撃がきて車体ごと持上げられ、車の向こうをバイクが天を行くように駆け上がった。
『わたしじゃない。わたしはただ、車から降りようとしただけよ。だって、一生、車に乗っているわけには、いかないじゃないの！』
それまで父にすがっていた母が振り向いて叫んだ。
『この娘です。この娘は気が狂ったんです。この娘が夫を殺したんです！』
わたしは途方に暮れ、父親殺しの罪から必死に逃げようとした。
『ドアを、ドアを開けただけなのに……』そんなに簡単に人を殺せるというの？
『この娘は気が狂ったんです。お父さんが来ると分っていて、車のドアを開けたんです。わたしの大切な人を奪ったんです。この娘を私の目の届かないところへ連れて行って下さい！　恐ろしいわ、恐ろしい娘よ！』母は半狂乱で泣き叫び続けた。
『車は停めてあったのか？　……何故、前後も見極めないで、右側のドアを開けたんだ？　交通規則を知らないのか』刑事が眉間に深い縦皺を寄せて詰問した。

『交通ルールは知っています。左だって、右だって、ドアを開ける時には注意しています。でも、故意じゃない、わたしは何もしていない。そうよ、わたしがドアを開けたんじゃない、ドアは一人で開いたのよ。殺したのはドアです！』

『なんてことを！　お父さんは貴女の車だと近づいて行ったのに、分っていて貴女はいきなりドアを開けた』母はわたしを揺さぶり続けた。刑事がその手を押さえるまで。

『貴女はお父さんを嫌っていた、憎んでいたわ』

『うそ！　お父さんは大好きだった。ホントよ！』

あれから一年も入院していた。退院しても帰るところが無かったから……。

『お母さんあの時、気が転倒していた。悪いことをしたのかも知れないと今では思っているわ。でも、わたしは未だに、貴女にどんな顔をすればいいのか分らないのよ。正直いって、貴女を扱い兼ねているのね。いくら私の可愛い娘だといっても、夫を殺した娘にどんな顔をしたらいいの？　貴女分るなら教えてよ！　貴女今でも、あの罪に泣くことがあって？』母は病院に面会に来て言ったものだ。

『ドアを開けたくらいのことで、誰が罪だと思うのかしら。わたしを押し潰したのはあなたの悲鳴よ。わたしはお父さんが大好きだった。子供の頃、お父さんの膝の上に乗って、お風呂に入ったわ。沈むとお湯がざんぶ、ざんぶ流れ出して、ああいうのが好きだった。それに地震の時なんか、お父さんは疾風のように飛んで来て、わたしを抱きしめ、いつも安全な机の下に運んでくれた。お母さんは捜さ

なかったのよ。一番はいつもわたしだった。あなたは妬いていたのね』
『わたしは見ていたのよ。あの日、貴女は大学生の彼と待ち合わせをしていて、ガレージから車を出すと家の前に停めていた、お父さんは取材が忙しくて、貴女の車と分っていながら、全く無視して速度を落さなかった、貴女はそれに腹を立てたのよ。誰をごまかしても、私はごまかせないわ。貴女はドアを開ける、たったそれだけのことで父親を殺した。貴女はそのタイミングを狙っていたのね』
『何故そこまで言うの？　あの二三日前、お母さんが外泊した日、お父さんはわたしの肩を抱いて言ったわ。(お前がいなかったら……)って、後は飲み込んでしまったけど、何を言ったのか、わたしにはわかったわ。お母さんこそ、心が痛まないの！』
『お前がいなかったら……。お父さんがそう言ったのなら、それは額面通りよ。お父さんは貴女の死を願っていたのね』
『違うってば！　お父さんはわたしがいなかったら、離婚したかったんだ。どうしてお母さんは何もかもこんがらがるの？』
　あの日、母の手がわたしに伸び、しきりに何かを探っていた。正気を失っていたのは母なのに、誰もそれを分ってくれない。母が探ったのはわたしの頚動脈よ、わたしは必死でその手に噛み付いた。それなのに、母の悲鳴に挑発された人々が、わたしをがんじがらめにして……、強制入院させてしまった。

あのあと、自分がまともなことを、わたしは必死で訴えようとしたわ。焦れば焦るほど、わたしは荒れ狂ってしまい、医師や看護師に押さえ込まれる日々が続き、精も根も尽き果てて、脱出する気力さえ失ってしまった。

海人がいなくなると、あんなに強固に鍵の掛かっていたわたしの過去、みじめなわたしが戻って来る。もう嫌！　視界が暗い、頭痛がする。ギーッという音。カチッという音。何故ドアは静かにしないのだろう。

お父さん！　わたし、お父さんを殺すほどの人間ですもの、あと、何者だって殺すことが出来るのね。お父さんの自慢の娘は、あの日お父さんと一緒に死んでしまった。

退院した日、恋人だった男はわたしを見るなり、恐怖の様相で、それはもう一目散に逃げていった。あれは狂人を見る目ね。その母親は息子を庇い、わたしの前で両手を広げて通せんぼをしたの。『わたしの目の黒いうちは、息子を、お前なんかに、二度と会わせたりはしない！　まして父親殺しの女と、将来だって結婚などさせてたまるか！』『そんなことは世間の常識、恨むなんてお門違いだ！』とも。あのデートの日、あなたの息子が約束の時間を守っていたら……。

街中がわたしを馬鹿にして嘲笑し、噂し合っていたわ。

あの狂ったような大雪の日、わたしはあの町からの脱出を試みて外に出たの。そして結城海人に出会った。海人が生き続けるから、わたしも生きてきたわ。でも彼は勇気を追って出て行った侭、何故

か戻ってはこない。戻って来ないということは、どういうことなのか？　お父さん！　お父さん！　知っているなら教えて欲しい。こんなわたしが、何時までも自分を守らなければならない理由なんてないのでは？

ドアがカチッと音を立てた、何度でも。強制入院させられた日、ドアは決して開かなかったのだ。わたしは必死で父に助けを求めつづけた。

唸り声をあげ、思いっきり、壁にぶつかっていく。何度でも。何故か衝撃音は体に吸収され、息が出来なくなる。どうしたら息ができるものだったのか？　その仕組みが解からない。

もう嫌といっても、これでもか、これでもかと、執拗に舞い戻る恥の記憶。思い出したくない、些細な恥が、何故何時までも居座り続けるのか？　恥とは何？　恥は本当に恥なの？　わたしには、もはや、どんな意志も力も残ってはいない。お父さん！　おとうさーん！　おとうさーんてばー！　何故、助けに来てくれないの？

わたしの単純で怠惰で空恐ろしい一生が終る。網膜が泣いた為に、生き生きと青く張り詰め、暗闇の中で最後の世界を見ようとして、張裂けそうなほど大きく見開かれる。

罪人として貼りつけにされるわたしは、十字架を背負い、何故か自分自身の体に釘を打ちつける。大工のように手際よく、口に釘を咥えたりして、釘の頭を次々金槌で叩き続けた。

「ない、審判に不服などありません」

その時、救いのように、あの男、南原勇気の姿が浮び上がった。ドアが開いていた。
「どうした？　ドアに鍵も掛けないで、危ないじゃないか？　迎えに来たよ！　おねえちゃん、おねえちゃんって、才気が、うるさいんでね」南原勇気が照れくさそうに立っていた。
さやかは窓のカーテンに武者ぶりつく。南国の昼の光が差込み、影は見る間に追い込まれていった。日焼けしているこの男なら、ダイナマイトを見たことがあるかもしれないな。海人が耳もとで囁いた。海人は勇気と一緒に帰ってきたのだ。
さやかは海人に促されて、大きく窓を開けた。新しい風にほつれ毛が眉をかすめる。
南原勇気は仕立てのいいグレーのスーツに身を包んでいた。　素敵ね！　うっとりしちゃう、まるで別人みたい！
「三年振りだが、お袋ときたら、呆けてしまってね、息子をすっかり忘れ果てていた。前より髪が長くなったし、痩せたから、見間違えた、なんていうんじゃないんだよ。全く聞こえないというのでもないのに、『勇気？　勇気でしたら、葬式を出しました。あの子は親不孝な子で、幽霊になって、出てくるような気の利いた真似をしてくれる子ではありません。どなた様か存じませんが、勇気がなんぞ借金でも残したのでしょうか？　それでしたら、あの世に参りましたら、お返しするように伝えましょう！』なんてね、参ったよ」勇気は目尻に深々と襞を畳んでさやかを見た。勇気は自分が死んだという事実を、一晩で確めたらしい。さやかが背を向けると、勇気は前に回って両手を広げた。さやか

は反射的に身構える。
「おれの身代りに葬られたって男は、結城海人か？」
「心配いらない、あなたの代りに死んだ人は生きているのよ！」勇気の太い指が、さやかの涙を掬い取った。
「結城海人は、結城商事の社長だ」駅前ホテルに落ち着くと勇気は思い出したように言った。ずーと考えつづけていたくらい、さやかには分っている。
「海人は生死を超越しているんです。彼はね、みんな生きているのに、自分だけが死ぬことが、どうしても、我慢ならなかった……」
さやかは憑かれたように話し続けた。もう誰も止めることなど出来ない。
「そういうことか！」勇気は長い沈黙のあとでいった。顔色が蒼ざめ、こめかみが時々チック症状のように痙攣した。
「そうなると、結城海人が犯人に違いはないが……。きみが犯人でないとは……」勇気は絶句している。
「いや、自分だけ善人ぶるつもりはないよ。しかし、彼はきみに、もっと違う人生を生きて欲しかったのではないのかな！　おれだったらそう思う！　きみの読み違いでは？」勇気は両手で髪を掻き揚げると、残念そうに言った。

「いや、きみを責めている訳ではないが……。仮に間違いがなかったとしても、おれが結城海人だったとしたら、黒川信哉こそ殺したかったな」
「黒川信哉を！　そうですか？　ううん、思いがけなくて、わたしには、考えも及ばなかったわ」
「何もしょげ返ることはないさ。男の復讐など、所詮、若い女には身に余ることなんだ」勇気はさやかの長い髪に沿って手を滑らせた。
「こんなに可愛いい顔をして？」わたしはその後を聞く気はない。
「彼はこれから命令するつもりなのかもしれない。なら、美味しいものは一番後で食べる、海人はきっと、そういう種類の人間なんだわ！」さやかはむきになる。
「ところで、おれにも、言いそびれていたこと、言っておかなければならないことがあったんだ。あなたは結城海人と一緒だというが、理解できるかな？　俺自身、結城海人なんだよ！　雲野大輔は仮の名。どうだ、社長に似てはいないか？　先日まで、俺はアメリカで結城海人を生きて来たんだ！」
　勇気は労わるように、さやかの唇にキスをした。
「その証拠にパスポートだって持っているよ。ほら、これを見てご覧！　雲野の机の中にあったんだ。これを見つけた時、俺は、何もかも分かった気がした」
　雲野大輔を振り払ったら、空席は一つしか残っていないもの、南原勇気にも見当はついていたのかもしれない。

勇気の長い腕がさやかを包み込み、あやすように頬ずりした。隣の部屋では、才気がすやすやと寝息をたてていた。

「わたしが警察に狙われる羽目になったら、あなたに結城海人をバトンタッチします」

「なるほど、なるほど、筋が通ったことを言ってくれるなあ！」

苦渋の表情をしていた勇気が、人が違ったように、なんとも言えない幸福そうな声で言った。

南原勇気にも結城海人が取り憑きはじめたらしい。

31　弁天のジョージ

雲野大輔はハイジャックされた。箱物である雲野大輔に、さまざまなものが投げ込まれる。ざまあみろ！　南原勇気の高笑いが聞こえて来る。

こんな手紙を突きつけて、してやったと思っているんだろうが、そう都合よく事が運ぶものか！　地震、戦争、テロ、為替相場、欠陥商品、火災、横領、盗難……、予定外の事件が起き、歯車が狂う時

代に、勇気如きの思惑が罷り通る筈がない。
サインも印鑑も、この顔も、僕のものだと力んでみても、現に自分の養子になってしまった才気を、籍から引き抜く方法となると……、雲野は頭を抱えこんでしまう。
戸籍上の両親になっていた才気の祖父母に証人になってもらえば、裁判所に、戸籍不実記載取消しの訴えを起こすことが出来るだろうか？
誰が何の為にそんなことをしたのか、そこで、南原勇気の名前が出たら、行き倒れで死亡したことが判明し、本人が生きているとなれば、火葬にして、保険金を詐取した事実が暴かれる。
まさに自殺行為だな。才気の祖父母だって養子にしたのは、間違いなくお前だったじゃないか、などと言い張らないとも限らないのだ。
金をちらつかせでもしたら、かえって希望を膨らませ、才気に丸ごと相続させたいと願うだろう。保険金詐取の時効は何年なのか？　他人の死体を詐取した時効はどうなる？　時効さえ過ぎればなんとかなる、何とかなる時が必ずくるさ。
そのうち勇気の怒りも解けるかもしれない。そう思って生きるしか方法はないな？　なるようになるさ、今までだって、計画的に生きて来たわけではないんだから、面倒なことはほっとけ！
雲野は商談の途中で席を脱け出し、ふらふらと洗面所に走った。所構わず体を絞るような吐き気に襲われるのだ。こんなざまでは営業マンも副社長も失格、ベンチャー企業の発掘どころか、墓穴を掘

っているのかもしれない。何時だって僕は気付くのが遅すぎるんだよ！

雲野が気落ちし外出先から帰宅する旨、電話を入れると、慌てふためいた佐々の声が入って来た。

「副社長、どうなさったんです？　ご帰宅などと、と、とんでもない！　こっちには、『近いうちにこの重役になるんだ』と大法螺吹いてる、若い男がいるんですよ。お宅の弟さんだといっています。とにかく、早く帰ってきて下さいよ！」

まさか勇気が……？　いや、勇気は若いという程の年ではない。　若葉の新しい結婚相手か？　結婚したら義弟ということになるのかもしれないが……。

「さあ、見当もつかない？　総会屋崩れかなんかでしょう。なるべく早く戻るが、明日また出直していただけないかと、鄭重に頼んでみて下さい」

「こっちは泡を食ってるんですよ！」佐々がにがにがしげにいった。これでまた縺れるのか！　雲野の胸底で、出所を失った溜息が疼いていた。

変な男とは会いたくない、会いたくないと思いながら、一方では早く自分だけで何とか取り繕わなければと焦ってもいた。

商談を終え、漸く一息ついた雲野の胸で、恐れおののいている鼠がおろおろし始める。いうべき言葉を考えてから対面しようと思っていたのに、何故か、気付いた時には、社長の椅子に腰掛け、土足の侭机の上に、足を高々と組んでいる若い男と向き合っていた。何だこの態度は！　業界のことも知

らずに、いきなり重役だなんて、手軽にものを考えられては、たまったもんじゃないな。僕だって、すんなり副社長になったわけではないさ。社長の信頼と営業ナンバーワンの長い間の実績があってこそだ。複雑にことが絡み合って雲野の頭は混乱していた。

黒の上下、時々ひらひらさせる上着の赤い裏地には、弁天像が鮮やかだ。ギョッとさせるなあ！　これは一体、何者なんだ？　新興宗教か？　ヤクザか？　胸のバッジに見覚えがあるような気がしたが、何処で見たのか思い出せない。

「雲野大輔さんですか、僕、城、寺、優と書いてジョウジマサルといいます。ジョージと呼んで下さい。僕、若葉さんと婚約しました。副社長のことは彼女からいろいろ伺っています」

若い男は口を尖らせ、立ち上がると仁義を切るように背を低くした。

「妹がお世話になっているんですか？　婚約したなどとは、聞いていませんが……」

雲野は言葉が平均台を踏み外さないように、恐る恐るいった。

「いやあ、結婚式にご出席のお願いも兼ねて、ご挨拶に伺うようにと、彼女が申しますもので、遅くなりましたが参上致しました」若い男は劇画もどきで切れがいい。

「それはどうも、しかし……」

「いや、彼女が、重役にして貰える筈だというものですから……」

ジョージはまだ若い艶のいい頬を上気させ、飢えた狼のように、頬骨を突き上げる。なにを職業にし

ているのか気になったが、爆発物のような危険な感じで切り込みそこね、雲野は薄皮の剥けている上下の唇を擦り合わせた。
「驚きました。妹の夫、南原勇気が亡くなって半年も経っていないと言うのに、若葉は、何を血迷っているんでしょう？」
「僕は死んだ男のことを話す気はありませんよ。その方がお兄さんとしても、ご都合がいいんでしょう？」
雲野の血液が音を立てて下降していく。若葉の奴、何もかも話してしまったのだ。
「と、といっても、い、妹からお聞きなら、ご存じでしょうが、この会社は社員持ち株制で、社員みんながこの会社の株主でして、副社長と申しましても、一存では何一つ出来ないありさまで……」
ドアが細めに開いている。雲野は佐々に顎をしゃくってみせる。覗いていた社員が、雲野の言葉に満足想に頷き合い佐々に促されて散っていった。
「お兄さんは、僕たちの結婚を祝福できないとおっしゃるんですか？」
人間、自分の感情を剥き出しにし始めたら怖い。
「お兄さんはくそ真面目なんですね、僕との話、誰かに盗み聞きされると困るのかな？　でしたら小声で話すが、どう、このくらい？」男は外に向かって大声を上げた。
まだドアのあたりで耳を澄ましていた社員が、驚いて逃げ出していった。

「僕たち、邪魔の入らないうちに、急いで結婚式を挙げることにしたんです。前の夫の保険金受取に疑惑を抱いて、誰かが動いているふしがあるといって、若葉は街に出るのを嫌がっています。それで、僕が初出社してみたってわけです」

若葉は東京に居座るつもりだったのか。こんな男と何時から付き合っていたんだ？　結婚式を挙げるにしても、稚内の叔母のところだとばかり思っていたのに……。妹がこんな男と結婚するなんて、想像を絶する。勇気で失敗して、男を見る目が出来たなどと言っていたのに、こんなヤクザにひっかかるとは、これなら南原勇気の方がずっとましだ、人間の格が違う。その上、何もかも話したとは……。こんな野郎にお兄さんなどと呼ばれたくはない。

舌が何か言いたくて縺れている。雲野はゆっくり、飴を溶かすように舌の縺れを解いていった。あわてるな、落ち着け！　追い出す口実を探すんだ……。

「なんとも、妹の気持がわかりかねます。そうだ、ここでは落ち着かない、私的な話ですから、お食事でもとりながら、外で話しましょうか！」早くそう言うべきだった。雲野がせかすと、ジョージはやおら社長の椅子から立ち上がった。

「煮え切らない人だなあ、全く！　お兄さん、一旦なってしまえば、副社長の地位があれば、社内の誰にも遠慮などいらないでしょう！　社長は行方不明ときている。要求通りにして下さい。簡単なことじゃないか。お兄さんにとっては、この侭、僕がおとなしく引き下がる方が、遥かに怖いんじゃな

いのかな！」ジョージは遂に言った。脅迫に間違いない。彼が肩を振り脇腹を揺する度に、赤い弁天像が踊る。知っていることを曝け出したくて、うずうずしているのだ。今日のところは、一時も早くお引取り願おう。でないと社内を、まとめきれない。

「わかったよ。それでは履歴書を提出して貰いましょう。取締役会にかけてから、株主総会で決議することになる。登記簿にも載る」

彼は、履歴書などを持ってきてはいない。時々現われるだろうが、毎日出勤できるような玉ではないさ。

「きみ何歳？」

「彼女、年の差を恥ずかしがっていまして……、二十五歳です」

呆れたもんだな。こんな若い男が何故若葉に近付いたんだ？　変じゃないか。ともすると、この男が一連の事件を？　社長が死んだのはこの男とばったり出会って、何事かあったせいかもしれないのだ。この男が、社長の金目のものや、利用出来そうなものを剥ぎ取った。　神出鬼没、人のいないのを見澄まして、社長室に入って決済する。身軽にアメリカに飛んで、会社から金をふんだくる。いかにも、いたずら好きの若者がやりそうなことだな。

我家の机の引き出しに入れておいた、社長のパスポートが何時の間にかなくなっていた。若葉が持ち出したのに違いない。この男は、利用したら、いずれ若葉も殺す気だ！　でも、法律上の結婚をし

ないうちは殺さないさ。順序としては僕が先だろう、あわてる事はない、彼が保険金を独り占めする条件が整うまでには、まだ時間はある。

「いずれ、重役になりたいというなら、叶えてやってもいい。約束するよ。若葉は僕にとって、たった一人の身内だからね、心配なんだ。きみとも協力してやっていけたら、どんなに心強いかしれない……」

ジョージは得意満面で帰っていった。雲野は心にもないことを口にした自分に腹を立てていた。この手であいつを殺さなければならないのだろうか？　うまくいけば、一連の殺人事件として処理できるかもしれない。南原勇気に弁天のジョージ、これでは殺さなければならない人間が殖えていくばかりだ。

三田則子は殺人で取り調べ中、幸田ケイの手帳を盗んだ別件逮捕で拘留されていたが、どんな追及の仕方をされたのか、殺人を自白し、近いうちに送検されるだろうと弁護士から連絡がはいった。

雲野は正直なところ、何としても生き延びたかった。僕にはまだ生きたと言う実感が無い、警察は誰でもいい、一人の手頃な犯人がいればそれでいいのかも知れないのだ。

最も疑わしいのは、社長、結城海人そのものだが、死んでいることだけは確かなのだから始末が悪い。あちらのニセ者と、こちらのニセ者、一緒なのか別なのか、どんな結末が待っているのか見当もつかない。夏木さやかにしかニセ者は姿を見せていないのだ。新入りは顔を知らないから、ばれな

いと、たかを括っているのか。或いは彼女がニセ者の手先なのか？
夏木さやか！　雲野は社内を必死で捜し回った。もはや、どこにもその姿はなかった。二度と会えないのか？　そう思うと、寂しさが身に応えた。何故もっと早く、唾をつけて置かなかったのだろう。
雲野が天を仰ぐと、佐々が後ろから、遠慮がちに肩を叩いた。
「大変でしたな。とにかく帰ってくれて安心しましたよ。ああ、それからもう一人、副社長のお気に入りの彼女。昼前、貰うものを貰うと、出て行きましたよ」
佐々に見透かされたようで、雲野は年甲斐もなく赤くなった。
「おかしな娘でしたよねえ、あの娘！」佐々が煙たそうな目つきで言った。

32　真実を叫べ！！

「どうして今日まで、来て下さらなかったの？」恨みが涙と一緒に堰を切った。
それが困るんだよ、勘違いされるのが……。僕はきみに何の関心も持っていない。今日来たのはそ

このところを、はっきりさせ、則子に自分自身を守るようにと言う為なんだ。
「あの時は酔っ払っていたから、あんなことを言ってしまったが、きみが殺したとは、僕にはとても信じられない！　どうして自白などしたんだ？」雲野は三田則子の化粧していないために、十歳は老けた顔から目も反らさずにいる。
　透明なボードを挟んで対面しているが、光線の具合で則子の顔の中央を幾つもの黒い穴が穿った。
「どうしてって、八時間も九時間も、同じ事を繰り返し繰り返し問い詰められているうちに、答えるのが面倒になってしまって、口をつぐんで俯いたんです。瞬間、頷いたことにされ、自白したことになってしまった！　一旦そうなると、もう、わたしの力ではどうすることも出来ない。向こうの筋書き通りにことが運んでしまったんです。反論のきっかけは全く掴めなかった……」則子は痩せこけ、眼の下に隈が出来ていた。最期の望みをかけるように、彼女は二人の間のボードに掌を密着させた。
「弁護士と話してみるが……」
「それだけ？」則子はいらだって言った。雲野は恐る恐る彼女の掌に自分の掌を重ね、ボードをそっと叩いた。
「元気をだせよ！」その時、則子の唇がさっと雲野の掌に動いた。咄嗟に雲野は手を引っ込める。見張りの看守がいるじゃないか。
「僕、気にかかることがあるんだ。犯人は社長になり代わっているような気がする」気まずさを、振

り切るように雲野は言った。
「そんなことを言って、貴方じゃなかったの？　わたし、貴方の家でぶたれたとき、確信したのよ。あの錯乱振りは尋常じゃなかった。常に冷静な雲野さんが、とにかく、助かりたがっていた。眼は異様で何かに取り付かれていたわ。貴方だと信じたから助けようと、事情聴取のとき、意識して作為的になってしまったのね。それが命取りになったみたい」
「僕が幸田ケイや社長夫人や、小西を殺して何の得がある。僕は事件とは、何のかかわりもないよ。従って、きみから恩恵を受ける筋合いもないな。だから、きみは本当のことを言ったらいい！　第一、僕達はそんな仲じゃないじゃないか！　僕はそれを言いに……」
　則子の顔ががくんと下に落ちた。雲野は口を押えた。
「わざわざ、そんなことをおっしゃる為にいらっしゃったの？　貴方は社長になりたかった！　社長が邪魔だったし、ケイや社長夫人は口封じのため、小西には脅されていた！」則子の声が引っくり返った。
「社長は外国で交通事故を起こしてね、相手は怪我をしたが生きているそうだ。社長は回復するまで見届けることで、示談が成立したという、佐々に連絡があったんだよ。まあ冷静に自分の立場を考えることだな。僕はね、社長なんかになりたくはない、本当だよ。その証拠に、副社長になっただけで、もうよれよれだ！　もともと、僕は、そんな、ましなものになれるなどとは、思っても見なかった人

間なんだからね」
「本当なの？　なら、わたしは何のために此処にいるの！　……貴方に会えれば、真意をわかってもらえる……ずっとそう思って待っていたのに。……もう、覆すことなど出来ない！」則子はすすり泣き、体を大きくぐらつかせた。
「だからって、それ、僕のせいなのかあ？」
看守がきて、素早く則子の身体を支えた。
「でも裁判は公正だ。希望を棄てるな！　大丈夫さ！　本当のことを言うんだ！　真実を叫ぶんだ！　」雲野は則子の後姿に向って怒鳴った。

自分のしていることが分らなくなって、雲野はその足で弁護士事務所に立寄った。
「犯人は社長のニセ者でしょうか？」
「でしょうか？　とは、どういうことです？」弁護士の市村は興味を持って雲野に接してきた。
「則子は社長の愛人ではないんですよ。それは、あこがれくらいは持っていたかもしれませんが。警察は見当はずれです。ケイと則子のメッセージカードに、一時間の時間差があるようですが、三田則

子の行く以前に幸田ケイは殺されていたというような、推定死亡時刻が出てきそうなものじゃないですか？」

「二週間も経ってから、砂の中から死体が発見されたんですよ。そのために腐敗をまぬがれはしたんですが、それは、どうも？　ポルシェの中にいた三田則子の方は、何人もに、ばっちり観察されていました。それは楽しそうに、ハンドルを握っていたそうですよ。ただ目撃者の時間がどうもあやふやでしてね。砂山で二人が争っている姿を見たという証言に辻褄を合わせ、警察の三田則子犯人説に協力してしまったようです。それに、幸田さんの靴、則子のハンカチ、車のキイ、則子の靴に付着していた砂。社長のコート。砂山の捜索では、社長は発見されていません。ケイのスカートは出てきましたが……。物的証拠には事欠かないということです。しかし、三田則子が電車かバスで目撃されていれば、あの車を運転して行ったことにはならないし、あのキイも別人が車のなかに投げ出して置いたことになります。沿線の駅にビラを貼って協力を求めているんですが、まだ……。あまり目立たない女ですから……。何よりもすべて隠さず話してくれるといいんですが、どうも矛盾するところがあって、困っているんですよ。何故ですかねえ、貴方を庇っているのでは、と思っていたんですが……、社長のニセ者とは何です？　彼は社長夫人の死後、渡米し、シスコのホテルに滞在していましたが、最近、日本に帰国しました。それはホテルと税関で確認済みです。それが社長を真似ている者の行為となれば話が違ってきますよ。単なる幸田ケイ殺しではない。もっと大きな事件ですね。まあ、もう

少し待っていて下さい。貴方も秘密主義をとらないで協力してくださいよ。ニセ者の心当たりはあるんですか？」弁護士は笑いながらいった。この笑いが曲者、社長の死体を盗んだことまで推定していないとも限らないな。でなくて、どうしてこんな話をして笑えるのだろう？　まさか、弁天のジョージと会ったのでは……。

「今度殺されるのは、僕の番なんじゃないでしょうか？」雲野は心細そうに言った。

「なるほど……。ふむ、次の事件が起れば、少なくとも三田則子の犯行でないことは、明らかになりますよ！」弁護士は悪戯っぽい表情になった。

「僕が殺されれば、三田則子が助かるということですか？」

「彼女のためには、命がけですな！」くそ！　弁護士は楽しんでいる。僕としては今日だけだって、則子に充分すぎる配慮をしてあげているんだ。それは、彼女が味方になってくれたのが嬉しくて、僕と結婚できるような希望を、彼女に持たせる言葉をべらべら喋ってしまったのかもしれないが……。

雲野は本心では、彼女が犯人として納まり、すべてが沈静化してくれること望んでいた。その気持が強すぎると、反動として今日のような異常行動に掻き立てられる。

「ご心配ですか？　小西、社長夫人、幸田ケイ、みんな一連の殺人事件とすれば、この手口、腕力はない、女かもしれませんね。女に気を許さないこと。はは、は、は、は」

弁護士は雲野をからかうように、どんと、背中を叩いた。

雲野の蒼ざめた顔に玉の汗が浮んでいた。電話をして来た勇気の本心が掴めない。才気のこともある、またも、勇気が何をやらかすのか見当もつかない。

「夏木さやかに、お前、気があったんだろう！　それなのにクビにしたのか？　馬鹿なやつだな。あの娘におれの尾行をさせたつもりだろうが、すぐ気付いたさ。あの娘も吐いたよ、観念するんだな！　それに、お前が、おれを殺して保険金を詐取した事実がわかったよ、断じて許さないから！」

あの娘が吐いた？　雲野は頭が混乱して推理能力がなくなっていた。何で、夏木さやかが勇気を尾行したのか？　保険金のことをあの娘が喋った？　何故そんなことをあの娘が……。

「保険金をとったのは、お前の妻、若葉だろう。お前が倒産前に加入した保険だそうじゃないか。何の不思議があるんだ。お前、知っているのか？　若葉は暴力団まがいの男と結婚するそうだ。結婚して僕の家に住むといって、勝手に業者を入れて増改築工事をさせ、新婚家具迄送り込んだ。まるで、自分達の家だ。僕を追い出す積りなんじゃないかな？　とんでもないよ、僕はどんなことがあっても、この結婚を阻止したい。お前が出てくるなら、大歓迎だよ！」倒産劇で、散々暴力団に脅され続けた勇気だ、軽々しく近づけないだろう。雲野は一石二鳥を狙って言った。

「出て行ったところで、このおれを名実ともに消し去る気か？　しかしもう間に合わない。今に腰を抜かすな！」勇気は脅しをかけてくる。
「お前が気にしている保険金は保険会社に返そう。それくらいの金は、今の僕にとっては端下金さ。急いで若葉にそのことを話して結論を出す。だから、お前にとやかく言われることはないんだ。死人はもともと見分けにくいものなんだよ。お前だと思っただけさ。似ていたからな、よくあることだ。保険金は死んだと診断されれば、支払われる仕組みになっているんだから、こうなったんだろう。才気を僕の籍に入れるなんて、子供だましの復讐なんて、もうよせよ。な、金がいるなら、出来るだけのことはするから……」雲野は平静を装っていった。
「子供だましだと！　何もわかっていないな。まあ、いい、いずれ分るさ。今だからいうが、お前の自慢の妹は、おれの倒産を暴力団と組んで画策したんだ。結婚するのはその中の一人、弁天のジョージだろう。今こそ分ってきたぞ、すべてが仕組まれていたってわけだな！」
　夏木さやかに、何故こんなに過剰反応するのか、自分でも分からなかった。
　副社長になった時には、充実した毎日が自分に貫禄をつけてくれると信じていたのに、日毎に会社の中で浮き上がっていくばかりだ。何一つ弁解の許されない世界で生きて行くには……。
　雲野は会社から脱け出していた。営業マンはセールスに専念してこそ気が休まる。たとえ何があっても商談を逃す手はないさ、とってなんぼだ！　頑張っていこう！

ことが落着すれば、社長になる日も近くなる。もう一歩じゃないか、こんなことばかり続いては社員の士気にも影響する。さあ、何事もなかったように……。
「身内の不幸を理由にサボってはならないよ。雲野君一体何を考えているのかね？」
気付くと取引先の社長が雲野の顔を覗き込んでいた。

さやかの携帯が鳴った。メロデーの終ったところで電話をとる。
「よお！　依頼されたもの、都合できたよ。日時、場所が決定したら、教えてくれないか。何が起るかわからないからね、前もって現場を見ておく。例のものは持って行ってあげよう、危険だからね。あとは打ち合わせの通りにするんだ。……ああ、土木工事の現場から、大丈夫だよ。アシはつかない」南原勇気の声だ。
「大喜びしてる！　海人は花火が大好きだから？」さやかの体のなかで、心臓が増殖し、鼓動が鼓動を呼んで、前夜祭のように賑わってしまう。
「雲野大輔は子供騙しみたいなことはよせ、といったよ。それで吹っ切れた。もう、迷いはない。今更、善悪に心を砕く偽善はやめた。そんなものは直ぐ変わる、誰もこだわったりしないさ。漸くわか

ったんだ、おれにも怖いものなんてないよ！」勇気の歯切れがいいのは、余分なものを振り落したからだと、さやかは思った。
「では、十二日午後三時、名月ホテルで！」海人がさやかを押し退けて言った。

33　お祭りが好き！　処、名月ホテル

雲野は三時間前にホテルについた。しらふではとても弁天のジョージに太刀打ち出来そうにない。ラウンジで、水割りを何杯か重ねた。何としても結婚式を中止させなければ……。
若葉とジョージは雲野の留守中に、無断で業者をいれて改築工事をさせ、改築なった部屋には新婚家具まで送り込んでいたのに……。雲野がいざ連絡を取ろうとなると、故意かと疑いたくなるほど、二人の消息が掴めない、現住所もメールアドレスも、電話番号さえ分らなかった。ホテルや建築業者や運送会社など心当たりを必死で探し廻り、総て徒労に帰した今、結婚式当日に望みをつなぐしか、雲野に策はなかったのだ。三田則子の死後、思い出すのが怖くて、家に帰らずホテル暮らしをしてい

たからといって、兄妹の絆がこれほど希薄だったとは……。
仏滅で名月ホテルの結婚式場は、人影もまばら、見回しても若葉の姿もジョージの姿も見当たらなかった。控え室や宴会場を覗いてみる。雲野は振り出しに戻るように、又も玄関ロビーに出た。
ロビーでは、ヤクザらしい黒服の男達が、いくつものグループをつくっていた。胸のバッジ、そうだ、思い出したぞ、結城夫人の葬儀で、北洋不動産の用心棒たちが付けていたものと同じだ。白川鮎子を追い出した男達だ。結婚式とは場違いなこの異様な集団。四十代半ばと見える優男が、子分を引き連れてロビーに乗り込んできた。これが組長か？　凡そ組長にふさわしくない柔和な風貌をしている。雲野には、それがかえって恐ろしかった。頭を下げて従っている者達の面構えはどうだ！
一刻を争う事態に、雲野が花嫁の控え室に駆け込むと、ウエディングドレスに身を包んだ若葉が、世話をしてくれる身内も無く、一人ぼっちで薄幸そうに立っていた。
挙式を前にして、やっと自分の誤りに気づいたのか？　雲野は妹の肩に手を置き周囲に素早い視線を走らせた。
「ロビーはヤクザの溜まり場になっているぞ！　おまえが何者と結婚しようとしているのか、わかっただろう！　早く奴らに気付かれないように脱け出すんだ！　車は裏口に回してある」雲野は早口になった。若葉の眼が異常に大きくなる。
「お兄さんが何と言おうと、わたし達はわたし達よ」この機になっても、若葉は兄に刃向かう気だ。

「そうはいかない。勇気が死んだことになってから、まだ幾らも経っていないじゃないか。良心も痛まずに結婚できるのか？　勇気が言っていたが、おまえが暴力団と組んで、勇気を倒産に追い込んだというのは本当か？　この結婚に至るまで、すべては仕組まれていたのか？　だとしたら、弁天のジョージはおまえを入籍したら、次には……」

若葉の声が被さる。

「彼は確かにヤクザかもしれない。でも悪でも悪の美意識を持っているわ。お兄さんは何よ。自信も信条もない。成り行き任せの拾い物をしようだなんて！　今更、勇気の味方に回るの、いさぎよくなりなさいよ！　お兄さんの自己嫌悪のとばっちりを、わたしに浴びせられてはたまらないわ。……彼を弟にすれば、お兄さんほどの悪党なら尊敬の的になれるかもよ！」

雲野は若葉に悪党呼ばわりされ、出足を挫かれてしまう。

「ジョージはいずれ、おまえを殺す気だ。気をつけろ！」声がかすれた。これだけはいって置かなければ、この一言が妹を救うかもしれないのだ。

若葉がけらけらと甲高い笑い声を上げた。

「嘘じゃないぞ、覚えておく……」そこまで言った時、花嫁のベールを捧げ持った美容師が二人入ってきて、雲野の前を遮った。叫ぼうとしたが怯えたように、口は結ばれたまま動かない。

ホテルのロビーから廊下、廊下から階段、足をがくがくさせながら探し回る。どこにもジョージの

姿はない。時間がなくなる、焦ってくる、雲野は途方にくれ、ロビーの椅子に倒れ込んだ。どこまで、いらだちと疑心暗鬼の日々が続くのか？　殺されるまで……？

若葉と結婚すれば次には僕を殺す。それがジョージのスケジュールだ。その証拠に、気が付けば、わが家にはもはや僕の住む場所はなくなっていた。僕のいない新婚生活があそこでスタートしようとしているのだ。もしかしたら、紫山会の事務所もかねていたりして……。組織の力を以ってすれば、僕など一ひねりだ。早ければ今晩かもしれない？

メモ帳を千切った。胸の中の鼠が、一斉に天を仰いで泣き声を上げた。気づくのが遅すぎるんだよ。

「僕は弁天のジョージに殺されます！！　七月十二日　雲野大輔」二つに折ると警察署御中と書いた。

メモを畳み白い花の活けてある花瓶の下に押し込んだ。しかし、殺されなければお笑い草だな……。雲野は身震いして、花瓶の下からメモを取り出し、皺を伸ばし、又も思い直して畳み、今度こそテーブルの中央に飾られている、大きな盛花の籠の下に押し込んだ。少しだけはみ出させないと……。

客観的に見て、僕は殺されるほどの悪をしたのだろうか？　若葉を幸福にしてやりたかった。それに嘘はない。僕が実権を握って、結城商事の社員は今、夢を持つことが出来ているじゃないか。ケイは策略を弄し過ぎ、心ならずも、僕名義の巨額な金を残した。あれを駆使できれば……。

社長を勇気にすり替えたのは、ことの成り行きとはいえ確かに僕の罪だ、後悔している。出来ることなら、勇気をこの世に呼び戻してやりたい、そこから人生をやり直したかった。そうなったら、若

葉の憑き物もおちるだろう。が、その時間はもうない。
ロビーを飛び回っていた黄色いドレスが、蝶のように雲野の前で羽を畳んだ。なんとパーッと明るいのだろう。目の中で黄色のシャボン玉が弾ける。若葉のやつ、もう少し素直だったら、こんなドレスをプレゼントしたのに……。
黄色いドレスの女が雲野に会釈した。髪にまで黄色のメッシュが入っている。
夏木さやか！　雲野は飛び上がった。もう会えないと思っていたんだよ。
「おお、おおー、無事だったか！　逃げてきたの？　よかったな！　もう、どんなに心配したことか……おーおー、僕のものなんだ……何故……勇気と……」言葉が先を競って混線していた。「それにしてもどうして、こんな所に？」
さやかは顔を傾けて、嬉しそうに口を尖らせる。
「社長が披露宴に出席したいとおっしゃったんです」また社長か、可哀想にまだ社長のニセ者に騙され続けているのだ。　僕がこの娘を護ってやらなければ……。
「誰がそう言ったって？」
「結城海人です」動く口元からピンク色の口内が覗く。誰もいなかったら……。
酔いが回ってきていた。
「ええ、だから、交渉して披露宴の席を取って戴いたんです。きっと社長は雲野さんのお隣りです」

「まさか、そんな！」雲野は一笑に付して、あわてて言い直した。「いや、そんな事もあるかもしれないが……」ニセ者の社長がアメリカから帰国して、いよいよ正体を現わすのか？　亡霊が現われて、何かの復讐をするのだろうか？

まあいい、雲野は大きく息をついだ。

「それより……僕と……」この女に未来を賭けようと思う。それに比べたら、みんな些細なことに思えてくる。今日こうして逢えたのは、神の意思だ！

「僕とつきつき……」焦っていた。

「結婚式って、何か変なの。結婚もだけど、そうお思いになりません？」冷水を浴びせて、さやかは肩をすくめ、くるりと後ろ向きになった。

雲野に理性が戻ってくる。

「ちょっと待て？　きみは結城社長を知っていない筈じゃないか？」

雲野は素早く、さやかの前に回り込んだ。さやかは眼を瞬いている。ケイの嫉妬から、あの時どうしてさやかを護ってやることが出来なかったのか。ロボットのように、ケイの言いなりになって、それが悔やまれた。多分、ケイは日協連の若者と組んで、この会社を骨の髄まで食い尽くそうと企らんでいたのだ！

さやかと面と向かうと、またも雲野はぐらついてしまう。この娘は人間ばなれした、独特の雰囲気

を持ち合わせている。こんな表情で果して嘘を吐けるものだろうか？　意識的だとは僕にはどうしても考えられない。この儚い感じは何処からくる？

喉が渇いていた。なぜこんなところで社長の亡霊に出遭うことになるんだ。

さやかは手を振ると靴音も立てずに行ってしまった。雲野はまたも簡単に、さやかを手放してしまったことが悔やまれた。僕は一番大切な時に、何時も手抜きをする癖があるんだよ。

雲野は漸くヤクザ仲間の中からジョージを探し当てた。弁天のジョージは幾分伸びた髪を棕櫚の葉のようにセットし、タキシード姿で、首や袖口から、派手にフリルをはみ出させていた。

どう思ったのか、ジョージは几帳面に雲野を仲間に紹介して回った。誰が僕を殺すことになるのか、警戒しなければ……。みんな殺しの腕前は凄そうに見えた。それが何だ、こっちが先手を打てばいい。

雲野は人目を避け、ジョージをホテルの中庭に連れ出した。とにかく結婚式を、入籍を取り止めさせなければ……。

「蒸発していた若葉の夫、南原勇気が現われたんだ。挙式は無理だよ！　僕は妹に保険金は保険会社に返還させる。だから、今日の結婚式は取り止めにしてくれないか」

「何を馬鹿な！　お兄さん、気を確かに持って下さいよ。この結婚式には、組長さんまで出席されているんです。その意味が解っているのかなあ？　北洋不動産がついていなくても、心配することはないさ。何者が現われたって、紫山会の仲間がかたをつけてくれる。ま、大船に乗ったつもりで、お兄

さんもおれ達を祝って下さい！　組で結婚式をして貰えるなんて、破格のことなんです！」
「僕になにを祝えって？　おかしいじゃないか。なんで北洋不動産が出てくるんだ。黒川に雇われてやっているのか？　勇気の倒産まで遡るのか？　ええっ！　破格だって？　何が目当てだ？」雲野はジョージに食らい付いた。何もかも気に入らなかった。
「ほら、お兄さんが殺したと思った、黒川の娘婿の結城海人が出席するってことだから、あの世の話相手でもしたらいいさ！」ジョージが冗談めかして皮肉った。水割りが利いて来たのか視界が左右に激しくぶれる。
雲野は次の瞬間、ジョージの変に白白とした頬に平手打ちを食らわせていた。手がコンニャクのようで、効き目がない。殺される前に殺す。残忍な怒りで、雲野はもう一度手を振り上げた。

気付いたとき、自分が何処にいるのかわからなかった。頭痛がしたが、何で痛むのか思い出せない。あっけに取られたような表情の男が三人、雲野を取り囲んでいた。彼等は目の前で交互に手を振ってから、雲野の手首を掴んで引き起こした。
「歩けるか？　頭痛が来たら、あんたの女に鎮痛剤を渡してあるから、貰って飲みな。目出度い席だから、このまま家に帰るってわけにもいくまいて……」図太そうな四角顔の男が雲野を先導していく。
血圧が低いか高いかしているのだろう、雲野に半身不随になりそうな心もとなさが来る。一瞬、頭

全体を貫く激痛が走った。後頭部に手をやると、指先に血がついた。やられたのだ。大分長い間失神していたらしい。

結婚式が終ったのか、みんな披露宴会場の方にぞろぞろ歩いていく。スキンヘッドの男。パンチパーマ、短髪が続く。盛んにふざけ合ったり、大袈裟な身振りで挨拶している水商売らしい女たち。みんなジョージの関係者ばかりだ。こんなことなら勇気の方が、妹婿としてはましだったな。妙に勇気が懐かしくなった。

雲野は医務室で簡単な手当をしてもらい、誰よりも遅く披露宴の席についた。雲野の隣りの席に夏木さやかが済ましていた。彼女の前の名札は、結城海人。社長の一族だったのか？　何が何だかわからないが、ニセ者の社長が出席するよりは……そう、男性の何者に着席されるよりは有難い。この娘が何者であったにしても、たかが小娘に過ぎない。もしかしたら、今度こそプロポーズの機会が訪れるかもしれないのだ。

親族を代表しての謝辞など用意していなかったのに、どういう加減か、奇蹟的に、陽気で、生き生きとした言葉を口にしているようだった。そんな気がした。

「……これは愛する妹と、僕の未来の花嫁に捧げる夢です！」さやかは一人いつまでも拍手をしていた。「何故拍手をするんだ？」

「知らないわ、社長が拍手をしたがってるのよ」

雲野の耳の周りで透明人間の社長が、翼をひろげて羽搏いた。突然、脳が収縮し、痛みが雲野の頭蓋骨を突き抜けた。グァーンと余震が続き、おさまると、ズキンズキンと痛みだした。目の前が霞み、時々意識が途切れる。

さやかが薬を取り出した。そうだ。四角顔のヤクザが、鎮痛剤をあんたの女に渡したといっていた……。あんたの女か！

次に気付くと、水の入ったグラスの縁に粉がついていた。雲野は一気に飲み干し、頭を抱えて痛みの消えるのを待った。

ジョージを平手打ちにしたとき、後頭部で何かが爆発した。ジョージの一味にやられたのかもしれない。鎮痛剤を与えるところをみると、まだ殺すには早いと思っているらしい。暫くすると痛みがやわらいだ、同時に何かが頭に閃く。

「社長の席にきみが坐っているのはどうしてなんだ？」

「結城海人さんに頼まれたんです」

またか！　何故嘘を……。雲野はもう一度グラスを口に運んだ。新郎新婦の方には決して目を向けない。

さやかはナプキンで口を拭くと、テーブルの上を指さした。

「社長ったら、サングラスを忘れていかれたんです」さやかが席を立った。

披露宴はヤクザと水商売の女達が腕を組んだりして、変な歌をがなり立てていた。なんかパチンコ屋みたいだな。これじゃ、組の慰労会じゃないか。

雲野の痛みはけろりとおさまっていた。此処に坐っていなければならない呪縛をとかれ、サングラスを手にとって歩き出した。足元にあった紙袋に躓いた。おっとっとっと、何だ危ないじゃないか？

サングラスは確かに社長のものだ。シンプルなデザインだが宝石が入っている。あんなのが欲しいと、ゴルフ場で社員同志囁き合ったものだ。

雲野がエレベーターに直行しようと歩いていくと、さやかがホテルの客室の方から現われた。黄色いドレスは、よく見ればさやかが得意そうに、通勤に着ていたものだ。酔いで何重にもぶれて、豪華なドレスに見えていたのか？　それとも、着替えたのか？　何処へいくのか見届けたい。まさかジョージとぐるなのでは……。

エレベーターホールまで来ると、さやかはくるりと後を振り向いた。雲野を見つけると、素早く戻ってきて肩を並べた。見た目よりかなり背が高い。結婚式の引き出物の入っている紙袋を大事そうにぶら下げていた。

「社長に用がおありなんですか？」

「いや……、社長は、何故、こんなに腰を落着けず、見え隠れしているんです？」見え隠れ？　雲野の頭の芯がぼんやりしてきた。社長が生き返った？　自分でおかしい、おかしいと思う。

「社長なら、ここに来る筈がないんだ！」雲野はいい切った。さやかはじっと雲野をみて首を振った。
「死んでいるのは社長じゃないわ」
「どういうことだ？」雲野はよろよろし、さやかにそっと支えられた。
「もう直ぐいらっしゃる筈よ」
「社長が生きていると誰がいった？」
「社長は生きています！」さやかはきっぱりといって、下りていくエレベーターを指差した。社長らしい後姿がみえた。たしかに社長だ、だが子連れじゃないか？
　直通のエレベーターが上がってくる。
「ご覧になったでしょう！　我慢ならないわ。結城海人が死んでいるなどと言うなんて、何を根拠にそういいきれるのか？」さやかは雲野の手からサングラスを取り上げた。
　雲野はお化けの出てくるのを待つようにクックッと笑った。頭の中もおかしくて、弛みきって心地よくなった。解ってきたぞ！
「きみは誰かに頼まれて、バッグの中に社長を隠しているんだ！」
「……」さやかは心もち蒼くなって黙っている。
「やはりそうか、そして小出しに社長を出して、みんなを震え上がらせる」いいぞ、その調子だ、もう少しだ。

「なぜ、震え上がるの？」さやかは痛いところを突いてくる。
「なぜか……そうだな、きみにいいものを上げよう。白川和馬から社長へのプレゼントだ」
雲野はポケットの中から瓶を取り出し、さやかの手に押し付けた。さやかは、あわてて腕で払った。小さな瓶が赤い絨毯の上をころころ転がっていく。
何となく眠くなっていた。鎮痛剤には催眠効果のあるものもあるからな。昨晩、若葉の結婚をなんとか妨害する方法がないかと、まんじりともしないで夜を明かした為か？　僕を殺す筈の弁天のジョージは、まだ宴の真っ只中だ。組の主催する結婚式なんて、鬼気迫るもんだな。終ると直ぐハネムーンに旅立つといった。殺される迄にはまだ時間がある。その間に……。
今度こそ、この娘は誰を社長だと言い張るつもりなんだろう？　僕の関心を買う、それだけの為に、この娘は社長をつくり続ける。
見失っても、見失っても、こうして、また、さやかは僕の傍に擦り寄ってくる。誰もいなかったら、この腕で抱きしめてやりたかった。
さやかは引き出物の入った紙袋を緊張して持ち直した。直通のエレベーターが上がってくる。
彼女は腕時計を見てから、乗り込もうと集まった人々に何か囁いた。みんな隣のエレベーターに移動していった。さやかは僕と二人っきりで乗りたいのだ、幸せってこんなものかも知れないな。
さやかの手が雲野の肩にそっとふれた。雲野はさやかの左手を捕らえた。手は小刻みに震えている。

こんなに緊張して……。
「うぶなんだな。お嬢さんは！」暖かいものがこみ上げる。何故だか涙が頬を伝って落ちた。
昔の若葉といるように心和らいでいる。
「さあ、社長もご一緒よ。ほら、これは引き出物。　乗って！　そう、倒れないように壁面に掴まって！　そう！」
雲野の眼に社長は見えなかった。透明なエレベーターは、エレベーターの存在さえ不明にする。雲野は見えない壁にぴたりと貼りついた。
まだ外は明るく、地上では何人もの人が、エレベーターを見上げていた。
「さあ、おいで！」雲野は振り向きざま、ちょっと躓いて、眠りの虫を勢いよく踏み潰した。
轟音が耳を圧し、足下から爆発した。
ふーっと無重力状態のなか、雲野の眼に、手足と胴が、自分からゆっくりと離れていくのが見えた。

ホテルの前は、黒山の人だかりだ。人々はエレベーターを指さし口々に、わめきたてた。
「男の人が、蜘蛛みたいに張り付いたと思ったら、爆発したんだよ。頭と手足がばらばらになって、

吹っ飛んだ。それから火が吹いてさ、炎が四角になって、二階で停まったんだ。そしたら、もう一度爆発して、エレベーター全体が一気に破裂して、ふっ飛んでさあ、肉片がここまで落っこちてきたんだよ。ほら、あそこを見て、エレベーターに片足が引っかかっているでしょう！」

一足先に地上に降りていた南原勇気と才気が、さやかを見つけると、Vサインを送ってきた。

花壇に投げ出された雲野の頭が逆立ちしている。目を凝らすと、夥しい数の鼠が雲野から逃げ出していった。

「では行くよ、じゃあな！」

勇気が才気の眼に蓋をし、さやかのバッグを乱暴に奪い取ると、悲鳴をあげながら逃げ惑う家族連れの後を追って、駆け出して行った。

さやかは一人で歩き続けた。何時の間にか雨が降っていた。物の周りに、ほんのりと後光のようなものが見える。さやかは揺れながら歩き、ハイヒールを脱いだ。

先方には等間隔を保って、白い亡霊みたいなものが揺れ続ける。それにさやかは名前をつけることが出来た。海人が検閲をしていた……血液が頭に上り、昂揚した気分だ。

振り返ると、雲野の手と足が雨の中を追い駆けてくる。聞きたがっていた。彼は未だに事件の全容

がわかっていないのだ。
「黒川信哉！」海人が力を振り絞って指令を発した。やっぱり、彼は美味しいものを故意に残しておいたのだ。これは大物らしい。
さやかは微笑を浮かべて歩いた。刑事がところどころで見張っていたり、尾行をしている……。そう思えば、そう思えた。
盛り場でもないのに、ビルの窓から、光が吹き出して、夜になっても街は明るい。そうよ、お祭りだわ。水溜まりで雨水が跳ねて、レモン色の服に水玉模様ができた。
海人は雲野殺しの見事さにうっとりしていた。
あの男は貴方の体を盗んだのよ。その上、貴方の会社を乗っ取ろうとしたわ。ケイの口車に乗って、こともあろうに、わたしを解雇したのよ！

34　警察は、事情聴取に入った

体がとろけそうなほど眠い、光の輪がくるくる回っていた。昨日の残像、まだ酔っ払っているのだ

ろうか？
「貴女は結婚披露宴で、どうして結城社長の席に坐っていたんです？」
「何故って……」目を見開こうとしても、瞼が勝手に落ちてくる。
「解雇されても、されなくても、変じゃないか？」刑事の鋭い目がさやかを裸にする。
「でも、会社から借りていた傘……、ああ、雨傘です。返しに行ったらぁ……、雲野さんの妹さんが結婚されるってぇ……、話で持ちきりでぇ……、結婚相手の弁天のジョージとかっていう人……、いきなり重役になりたいだなんてぇ……、無茶なことを言ってるとかってぇ……、話が弾んでいました。それでぇ……、会社を出てぶらぶらしてたらぁ、社長にばったり……。でぇ、結婚式に是非出席したいとおっしゃったのでぇ……、早く来て幹事さんと交渉したんです。それが何かぁ？」さやかの間延びした会話が、聞く者をいら立たせる。
目を開けるんだ！　瞬きの合間、三人の刑事の輪郭がぼんやりと確認でき、うち二人は、会社に何度かきたことのある目付きの鋭い藤川刑事と、若くて長身の西田刑事だとわかってくる。
雲野大輔が死んだのなら、死んだと告げてくれたらいい。刑事がこんなに早く、マンションにまで乗り込んできて、さやかを偵察しょうとは……。
「何があったんですかぁ？　こんな時間に？」さやかは細目を開いて不服そうにいう。
「結城社長は、何故、披露宴に現われなかったんです？」

何故、何故、刑事は同じことばかり聞く。.

「刑事さん、名月ホテルにいらっしゃいました？　いらっしゃった方なら会われた筈です、結城社長は出席されました。早く帰られたんです。携帯電話で『席にサングラスを忘れてきた、預かっていて欲しい』って、わたしは忘れ物を取りにいったんです。サングラスを雲野さんもご覧になりましたけど……、ええ、お返し下さったかどうか？」

「では、その時、社長はどんな服装をしていました？」西田刑事が横から口を挟んだ。

「黒い背広に銀色のタイ。縞のズボンじゃなくてぇ、グレーだったかな……、忘れたわ」さやかは考えるだけ損だから、思い出したりしない。

「サングラスは、何時、何処で、社長に渡す手筈だったんです？」藤川刑事が話を自分の方に取り返した。

「何処でって？　わたしも困るのでえ、雲野さんに……でも雲野さん頭痛がきて、それは大変だったんですよ……」

「グラスの中に薬を入れたのは、あなたですか？」

「雲野さんが頭痛を訴えたら、薬を与えて欲しいとヤクザみたいな人に頼まれていたんです。ほんとです。聞いてみてください！」

「貴女は睡眠薬を副社長に飲ませ、エレベーターに押し込んだ。その後、街をふらふら歩いていると

ころを、たまたま警察に保護されたんだ。覚えていませんか？」藤川刑事はさやかを犯人と勘違いしていた、空気がピーンと張り詰めている。海人が身じろぎした。
「違います。第一、わたしに雲野さんを殺さなければならない程の動機なんかない。雲野さんは頭痛とお酒で変だったけど、社長と話が出来るって喜んでいらしたのに……」
「雲野さんが死んだって誰に聞いた？」藤川刑事が怖い声で聞き咎めた。何か矛盾が発生したのか？脳細胞が狂い捲くる。
「だけど、大騒ぎだったじゃないですか！　頭が転がっていたもの」海人が素早く態勢を立て直した。
「そうか？　あれを見たのか？　で、話を前に戻してだが、貴女は宴席で何を飲んだのかね？」
「わたしはワインを飲んだだけです。社長が手をつけていらっしゃらなくて、勿体無いもん。でも、あんなに飲んだのは初めてですけど、わたしのには薬なんて入れていません」何時、酔いが回ったのだろう、ぴたぴた叩かれた感触が頬に残っていた。
「酔っていたにしては、よく覚えているね。正直のところ、貴女と雲野さんはどんな関係だったんです？」藤川刑事の額の皺がうねった。
「向こうは、わたしをお好きだったのかも？　けど、わたしは……」
「迷惑だった？　貴女はエレベーターホールで、副社長を、酔っ払いだから向こうに乗った方がいいと、直行に乗ろうとした人達を遮った。……ということは少なくとも、引き出物の中に、爆発物が仕掛

けてあると、知っていたことになるな！」
「ええっ！　わたしが爆発物を持っていたんですか？　嘘！　ほんとに？　あの中に入っていたんですか？」さやかの脳がパニックを起こし、全身が支えようもない程痙攣する。一緒に乗っていたら……。　だってわたしが、そんなこと知ってる筈がないんだから。
さやかが深呼吸して立ち直ったところで藤川刑事は畳み込んだ。
「それで、雲野副社長は社長と出会ったんですか？」
「喧嘩でもされたのか、雲野さんは医務室で怪我の手当てをしていらっしたとかで、浮かぬ顔で遅くなって披露宴に出席されましたから……」
「やっぱり会えなかったんだな！」藤川刑事は首でもとったように、止めをさした。
「そこで、もう一度聞くが、社長は白いネクタイじゃなかったの？　タキシードじゃなかったのかね？」西田刑事がいう。さやかは黙っていた。
「他に、社長を見たという者もいるんだが、黒の上下を着ていたというんだ。ズボンは黒じゃなかったのかな？」
「嘘つき！」さやかは海人と顔を見合わせる。「黒じゃなかった。グレーだったわね」
「誰と話してるんだ？　いずれにしても曖昧だな」
「グレーです」さやかは決着をつけるように、きっぱりと言った。

「クビになったあなたに、何故社長は、出席を頼んだり、忘れ物を取っておくように頼んだりするのだろう。貴女が社長と思っている人物は別人だとは考えられないかな？　貴女はその男から時限爆弾を受け取った。そうだね？」突然思い当たる、わたしの持っていたのは、社長のもので、雲野の引き出物ではなかったのだ。

「わたし、雲野さんの忘れた、引き出物の入った袋を、エレベーター迄持って行って差し上げただけです。だって、幹事の方がこれは、雲野大輔さんの分ですとおっしゃって、雲野さんの椅子の傍に置かれたのを見ていましたから。それに、社長が余り人と会われないのは、何かこう、野心的なライフワークを完成する為なんだと思っていました」海人は難解な言い回しが好き。何とか辻褄は合ったのかも知れない。

「野心的というと……」

「死んでからも生きているように、自分を存在させる業績と、おっしゃったから、きっと、凄いことなんだと思います」

「死んで名を残すということかなぁ」西田刑事が鼻の頭を撫でた。

「名ではないわ。実です！」

「結城社長の専攻は何です？」

「そんなこと、わたしにお聞きになってもわかりません。刑事さんは結城社長が雲野さんを殺した、

と思ってらっしゃるんでしょう？」
「いや……貴女がなんらかの役割を！」
「薬なら何とか組のヤクザがわたしに頼んだんです。見当違いは酷い！　管理人はどうしているの。若い女性の眠っている部屋の中に、こんな狼みたいな男の人を何人も押し込むだなんて！」
ドア側にいた管理人の妻が間が悪そうに横を向いた。
「もう、嫌！」さやかは白い毛布を頭から被るとベッドに長々と横になった。
「事件の一報があって現場で聴き込み中、貴女が酔払って保護されたんだ。手ぶらで裸足だったし、もしものことがあってはとマンションまで……。まあ、心配はなさそうだな、それでは引き揚げるとするか！　どうぞ、お休みなさい。その代わり、眼覚めたら、すぐに署に来て頂きましょう！」藤川刑事は凄みの利いた声を残して出て行った。
刑事達の靴音の消えるのを待って、さやかはドアに飛びついてロックした。呼吸を忘れていた胸が鉄板みたいに硬くなっている。心臓がリズムを狂わせる。眠気は吹っ飛んでいた。
身構えながら、カーテンをそっと開ける、このマンションの入り口と駐車場が見える。真下は薔薇の垣根、煉瓦の石畳。見張っているとすれば、玄関の脇、駐車場の乗用車の中。
逃げるにしても、玄関ドアを通らずに脱け出すには……、見回しても、外壁に猫の歩けるほどの足掛かりもない。裏口から出るには、管理人室の前を通らなければ……。

カーテンを引き、洋服ダンスを開け、隠して置いた衣類を取り出した。大きなショルダーバッグとダッフルコートにパンツ二枚とセーターが二枚、それに下着、手帳と、財布。これが正真正銘わたしの所持品。

携帯電話、引出した現金、カード類、印鑑に小切手。残った数枚のトランプ、それに雲野から返されたサングラスまで。最近買ったバッグごと勇気が奪って行ってしまった。

それで救われてはいる。部屋の中を見回すと、サイドテーブルの上のスクラッチバッグが、しまりのない大口を開けていた。なかに運転免許証が入れてある。刑事があれを見なかった筈がない。

もう駄目！　海人に助けをよんでみる。騒ぐんじゃない、暫く時間が稼げるじゃないか。今はまだ早朝だ、さやかの身元を調べるには、それなりの時間がかかるさ。

マンションを借りる時、身分証明に提示したのだ。運転免許証を厚紙に挟んで底に入れ、ショルダーバッグの裏革の縫い目をふさいだ。底が厚くなった、くにゃくにゃのバッグよりは高級品に見える。見られてから隠しても後の祭りだが、残していくのも不安だった。

此処に来てから買ったものは、Tシャツとジーンズと下着の他は残すことにする。衣類や食器の整理が終ると、さやかは深呼吸をし、電話の受話器を胸に押し当て、暫く言葉を探していた。

「わたしです、絶体絶命なんです！　助けてください！　約束通り、結城海人を貴方にバトンタッ

チします！」声が掠れていた。
「そうか……、貴女だけに罪を背負わせたりはしない。いいか、早く逃げるんだ！　後は引き受けたから……。あそこに戻るんだ！　わかったね！」南原勇気の声がさやかにエネルギーを吹き込んだ。
「何をぐずぐずしている、逃げろ！　一時も早くだ！」
刑事達は暫くは戻ってこないだろう。海人は勇気に移転した。海人には殺人の動機がある。でもわたしには殺人をする動機は存在しない。疑われる理由などないのだ。でも、わたしは海人が追われている以上、逃げなければ……。
立ち上がっても、体の中身がぐらりぐらりと揺れ動いていて、釣り合いのとれない変な気分だ。　さやかはショルダーバッグを肩にかけた。
電話から、南原勇気の声がさやかを追いたてる。
「逃げろ！　いいか、何時かきっと会えるさ、だから逃げるんだ！」

「じゃあ、あそこにいるのは、贋者？」藤川刑事の眉が吊り上った。「夏木さやか、栃木県那須町生まれ、今日が誕生日で二十歳、仙台市の精神神経科病院に入院中？？……　いまの精神病院は開放病

棟で、患者は病院から勤めに出たりもしているんです。病院側で患者の実体が掴めていない可能性もある」藤川刑事が捨てばち気味に舌打ちをした。「とっ、てい、てっ、てっ！」

「いや、夏木さやかは入院してから、七ヵ月、その間、一度も外出していないそうだ……。本物の運転免許証を持っていたことからして、二人とさやかの関係は簡単に探れそうだ。西田は家族、縁者、知人、友人の線を、高橋は病院内だ。最近退院か、脱出し、行方不明になっている二十歳前後の女性はいないか当ってみろ！」勝呂警部が指示した。

「さっき仙台市警に電話して見たんですが、該当しそうな行方不明者は、警察に届け出たものの中にはないそうです」西田刑事が言った。

「ここまで来て、結城海人のアメリカから帰国後の手がかりがない。精神神経科病院と聴くと、あの娘に煙に巻かれたのではと思われる……。あの娘は誰の手先なんだ……、黒川か？　結城海人か？……、　彼の関係者で、生き残っているのは、黒川夫妻だけじゃないかな？」藤川刑事が自問するように呟いた。

「結城マリナの死も殺人か？　死後、結城海人はサンフランシスコに飛んだことになる。まさか黒川が愛娘を殺すとは考えられないが？」勝呂警部が首を振った。「あの娘は一体何者なんだ？」

35　普通の女の子は、指令なんて言わない！

『逃げろ！』南原勇気の声が耳のなかで増幅していた。さやかは注意深く、マンションの玄関ドアを押した。『何時か、きっと会えるさ、だから逃げるんだ！』

玄関の右手にパトカーを停めてあるのが見えた。背を向けると一目散に走った。ショルダーバッグが変なリズムで腰を打つ。わたしは何時も見ていただけ、父の死ぬのを見ていた昼のように、死は鏡の中のように遠い。

パトカーが擦り寄ってくる。

刑事がさやかの前方を塞いだ。

さやかは事情聴取の雨の中、かすかに微笑を浮かべ、じっと座っていた。

「本当の名前を言わないと、不利になることくらいは、分っているんだろう？　ええっ、誰なんだ、きみは？」

怒声は耳のなかの軟毛をなぎ倒し、脳の奥深くまで押し入って荒らし回ろうとしていた。

結城海人を南原勇気に托した以上、それは行動の中止を意味していた。

「わたし、わたし、何にもわからないんです。自分が何者なのか？」

今まで結城海人を詰め込んで、充実していた、わたしの空間を、ドアをやたらにギイギイ鳴らしながら、風が吹き抜けていく。
刑事達は苛立ちを抑え、黙り込んで、不思議なものをみるように、さやかを見つめている。
告白してもいい。こんなふうに、
「ひがし、みなみ。古城町一の二の三」
「今度は本当だろうね。嘘をついてもすぐばれるぞ！」藤川刑事が不機嫌な声でいった。
『嘘なんて、次から次へ、汲めども尽きない泉のように湧き出してくるものなのよ。それは楽しい魔法の世界！　やがてお前は、嘘を商売にすることができる！』祖母は出任せのお伽噺を聞かせながらいったものだ。『こうして、渚家の嘘つこきの血筋は、見事に花開き、脈々と引き継がれていくのよ！』
「きみの言ってる、社長の結城海人だが、この男かな？」西田刑事が壁のシャッターをあげた。小窓から隣の部屋が見え、白いズボンがいた。さやかは即座に否定する。
「全然違います」
「顔を上げて、よく見てから答えなさい」毒のある眼が、さやかを射すくめる。
「結城海人は行ってしまったんです、わたしをおいて……。全くの別人です」きっぱりいいながら、自分が小さくなって行くような気がした。
そこには弁天のジョージが白いタキシード姿で、椅子に所在なさそうに腰掛けていた。新婚旅行は

どうしたのだろう？　花嫁も足止めを食っているのかもしれない？
「きみは銀行で、結城海人のキャッシュカードを使った。カメラに記録があるから、嘘は通用しない。金を何に使ったのかね？」藤川刑事が皮肉な口調でいった。
「結城社長に頼まれましたから……。誰だって結城社長に頼まれれば、願いを叶えてあげたくなるに決まっています。盗んでいない証拠に、わたし大金なんて持っていません！　使ってもいません！　捨てたりもしていません！」さやかは、むきになって言った。
「結城社長との連絡手段は？」藤川刑事が珍しいものを見るように、さやかの顔を覗き込んだ。
「テレパシーとかぁ」さやかの語尾があがる。
「こら！　真面目にやるんだ！　きみから電話をしたことはあるのか？　電話番号は？　メールで連絡するのか？　メールアドレスは？　向こうから連絡があるだけなのか？　キャッシュカードは何処で手渡された？」
「道路か……公園？」
「銀行の近くのか？　で、金は何処で渡した？　携帯電話は持っていないのか？」
「それが、誰かに掏り取られて、何時の間にか無くなっていました。ということは、社長が受け取ったのだと思います」
「誰かって誰？　それで、どうして社長が受取ったことになるんだ？」

「分らないから、『誰か』って言っています」
「ああ、そうか、で、他に親しい人は？」
いなかった、現在も過去からさえも、結城海人の他に親しい人など捜しだせない。南原勇気の姿は浮んだが、さやかのなかで二人は写し絵のように重なってしまう。
「それもいないか？」藤川刑事は失望して笑った。
「若葉とジョージの結婚式の日、きみは誰から引き出物の袋を受け取ったんだ？　結城からか、ジョージからか？」
「雲野さんが親族代表で挨拶してらした時、結婚式の幹事だっていう女の人達が順番に配って回ったんです。だって、普通そうするんでしょう。結城海人様分とおっしゃって、渡して下さったんです。幹事の人に聞いて下さればわかると思います」
一昨日、勇気は才気と名月ホテルに宿泊した。引き出物はさやかが受け取り、勇気の部屋迄持って行って中身を、すり替えたのだ。
「ダイナマイトは、何処から手に入れたと、彼はいっていた？」さやかは下を向いている。
「きみは自分の預金を使い果たし、三万円程しか持っていないが、結城海人の分は何処へやったのかな？」
すべてを調べているらしい。海人の現金もキャッシュカードも、さやかの月給や予告手当てまで、

新品のバッグごと勇気に取り上げられてしまっていた。もはや、海人との繋がりを証拠立てるものなどない。夏木さやかの運転免許証は、彼女から借りたものだ、彼女はそれを覚えているだろうか？　彼女には何時も見舞いに来ていた、慈愛深い眼をしたご両親がいる。今頃は退院したに違いない。退院しても一週間と、家にいられなかったわたしとは違う。

「現場にいたこと、薬を飲ませたこと、時間を計って雲野副社長を引き出物ごと、エレベーターに押し込んだことを、自白するんだね！」藤川刑事が優しい声をだした。

「雲野さんはヤクザにやられて、わたし同情していたんです。誰からも指令なんか受けていません」無防備に口が滑った。

「なるほど、指令か？　きみは他の客がエレベーターに乗り込むのを阻止した。酔っ払いだなどといって、小細工までしたんだ。それも指令か？」

「雲野さんがへべれけに酔っ払っているように見えたから、みんな嫌がって逃げていったんです。わたしは何にもいっていません！　それにわたしが何かを知っていたとして、他の人たちを何故助けなければならないんです？」

「さあね？　きみは何時も指令を受けていたの？　普通の女の子は『指令』なんて言葉は使わないからね」藤川刑事はすべてを解き明かしたかのように活気づいた。

「……」もう海人からの指令は永久に来ないのだろうか？　さやかは首をうなだれ、黙るしかない。

「答えないの？　ところで、これは誰のものかな？」藤川刑事が話題を変え、ポケットから小さな薬瓶を取出しテーブルの上に置いた。雲野がプレゼントだといってさやかに手渡したものだ。
「何の薬かな。自分のものなら分るだろう？」
「それは、雲野さんが……」
「きみのポケットの中にあったんだ。これはニトログリセリン、心臓病の人が持ち歩くものだが……。心臓でも悪いのか？」
　さやかは、今、こうなってはじめて、雲野の意図がわかってきた。いざとなっても殺人犯にはなりたくはなかったのだ、きっと……。あの時、わたしは赤い絨毯の上に転がっている薬瓶をポケットに突っ込むと、各階止まりのエレベーターで下に降りた。
「それ、わたしのです。返して下さい！」さやかは両手を差し出した。顔つきが変わり、蒼ざめ、海老のように膝を抱え込んで腰を折った。
「大丈夫か！　医師を呼ぼうか？」
　さやかは首を振り続ける。ニトログリセリンが結城海人のものとわかれば、心臓病で死んだ死体が浮び、海人は死んでしまうのだ。南原勇気にたどり着くのに時間はかからない。
「暫く休憩にしよう！」藤川刑事もくたびれたらしい。壊れ物に触るように、軽くさやかの手をとると、薬瓶をそっと握らせてくれた。

さやかは薬を口に含み、背を丸めたままでいた。
あの天変地異が起ったような、大雪の日、海人はこんな風に背を丸めていた。海人はあの雪の中で、この瓶を必死に探し、遂に諦めたのではなかったか？
薬は少年が海人のポケットから、取り出して隠していた。　いたずらか、または嫌がらせの目的で……。その後で怖くなり、後悔したのだ。白川母子が、海人が生きているというと、あれほど狂喜したのは、罪から逃れられた喜びだったに違いない。
何故、結城海人はあの母子のことに関して、指令を発し損ねたのだろう？　もしかしたら、わたし自身のT町に対するこだわりが、海人の足を引っ張ったのかもしれない。
そのとき、視界を光のように横切っていく少年の姿が浮び上がった。心臓が弾け、過去に向かって飛び立って行く。
「男に逃げられて、気弱になっているのか？」藤川刑事の掬い上げるような目付き。
さやかにはその言葉の意味が飲み込めなかった。
「もしかしたら、結城海人は始めから、いなかったんじゃないのか？　きみこそ真犯人ではないのか？」
「……」さやかは唇で叫びを押し殺した。
「夏木さやかのいる病院の患者以外とは、考えられませんね。指令を受けているとなると、実行犯は

……」

西田刑事の手で、ショルダーバッグの中が掻き回されていた。

ばたばたと部屋に入って来た刑事が、藤川刑事の耳に口を寄せた。

「北洋不動産の社長が行方不明になったと？」

落着きをなくしている刑事達を背にして、さやかはつぶやく。

「だからそう言ったでしょう！　結城海人は生きていて、最期の大物に取り付いたのよ！」

「なんだって？　誰が？」若い刑事が詰め寄った。

「彼女に迫っても仕方ないさ。　黒川信哉が危ない！　全力で追いかけろ！　いずれにしても、もうすぐ、何もかもわかってくる！」

後から入ってきた勝呂警部が、さやかを連れて行くようにと合図を送った。

「黒川の運転手は、犯人は三十歳位の男だったと言っているんだ」

さやかは留置場に引き立てられながら、胸に大きな傷口が開いているのがわかった。赤い血が流れ出ていた。痛みは必ずやって来る。

『おまえは病室の中で暴れ回っているそうね、だから退院はまだだと先生はおっしゃるのよ』

十二月にならないと暖房の入らない病室は、暴れ回って暖をとるしか方法がなかったのに……。

『わたしが精神病院に入れたのが悪いと、おまえは恨んでいるけど、刑務所の方がましだと、本当に

思っているの？　いずれにしても、おまえは運がいいわ！　こうして、殺人罪や過失致死罪にも問われず、交通刑務所にも行かずに済んでいるんだから……』母はオレンジ色のスーツにオレンジ色のパンプス姿で、廊下を行く医師や看護師達が息を呑んだ。

『わたし結婚することにしたわ。彼、歯科医で、あの家で開業したいというのよ。おまえは禁治産者になっているから……』

わたしの意志で、思い出すのが嫌だと、しっかりと封印してきた過去。結城海人がいなくなって、過去のお化けが、これでもか、これでもかと、封印を破って飛び出してくる。

息苦しくなって、さやかは口に含んでいたニトログリセリンを飲み下した。もう、どうなったって知らない。

36　ジョーカーは、黒川信哉に！

雲野大輔殺人事件は、南原勇気の価値観を引っ繰り返した。目からうろこが落ちるとはこんなとき使うのかもしれない。口笛を吹くと、この世の中では子供から大人まで、明るくカラフルに殺人ごっ

こを楽しんでいた。
もともと殺人の楽しみを人間から奪ったのは誰だったのだろう。軒下に頭蓋骨を並べた記憶はないか？　熱に浮かされた頭に、青い風が吹き渡っていった。
おれは長い間、負け犬に安住してきた。今更、善良であって何になる。考えてみれば、歴史など人殺しで埋まっているんだ。現代だってそうさ、おかしな正義が公然と殺人を正当化していた。
後部座席には、クロロフォルムを嗅がされた北洋不動産社長、黒川信哉が静かに眼を閉じている。南原勇気は車を走らせていた。黒川の出社時間を見計らって、運転手には暫く眠って貰ったのだ。
夏の太陽が、並木の緑を潜り抜けては、陽気な顔で追い駆けてくる。
雲野大輔は雲野大輔として死んでしまった。　おれの名前がもう一つ消えたことになる。それでよかったさ。おれにはまだ、結城海人の名が残っている。
才気は雲野大輔の養子、雲野才気として残るのだ。正当な相続権をもって、おれはそれに満足していた。才気は祖父母のもとに返してある。思い残すことはない。
母には老人ホームの予約をした。あとは若葉の奪い取った保険金を剥奪すること。
おれはせっせと逃げて来た。大して悪いことをしたわけでもないのに、妻も世間もどんどん遠くなり、戸籍もなく、才気を南原勇気の籍に入れることすら出来なかった。
雲野の死に幻惑され、興奮している勇気は自分に向かって、アンコールの拍手をする。

「きみは誰だ！」正気に戻った黒川信哉の潰れた声。
勇気はゆっくりと首を回して黒川を睨んだ。
「おれは、結城海人！」
「ふざけるな！　何が目的だ。金か？」気を取り戻した直後で、ぼんやりしていそうなものなのに、絶体絶命になっても黒川は支配者面を崩さない。ミラーに映る唇のねじれ具合。
「金だと？　お前の考えそうなことだな。ヤクザと組んであちこちで土地や建物を巻き上げ、ぼろい儲けをしてきて、世の中はすべてが金だと思っているんだろうが！　紫山会はおまえの関係組織だ。おれの会社はやつらにやられたんだ。この口惜しさがわかるか？」
勇気は忘れていた憎しみを、夏木さやかのために精一杯ひき寄せる。
「馬鹿が！　今時、一流企業でそんなことが出来ると思っているのか！　ヤクザなどとは無縁だ！　海人はどこにいる？　どうせ、あの悪党に命令されたんだろう？　あれほどしてやったのに……」歯ぎしりが聞こえてくる。
「よう言うよ！　してやったのにだと、その言葉がどれほど人を傷つけるか、考えてみたことはないのか？　おまえは結局、海人よりも、資産が大事だったんだろうが！」
夏木さやかからバトンタッチされた結城海人が、勇気のなかで力を持ってきていた。
「奴から何を聞いているのか知らないが、一流企業の、社長になれる未来を捨ててまで、本当に独立

したいのなら、わたしを頼ることはなかったんだ。あいつは狂っている！　おまえも奴の命令を聞いたら命取りだぞ！　もうすぐ警察があらゆる道路を封鎖するだろう。車のナンバーもわかっている」
「何をとぼけているんだ。　車はとうに取り替えてあるさ！」
今頃、黒川社長宅のガレージで、急所を打たれて気絶していた運転手が、息を吹き返して騒ぎ立てている頃かもしれない。
「おまえが結城海人を、何故探さないのか解ってきたぞ！」勇気は思い切り、はったりをかませる。
「何が望みだ。奴と手を切るなら、おまえの要求を、すべて受け入れてやってもいい」
「ホッホー、総て受け入れてやる、とは寛大な！」
県境の山襞が迫って、視界は緑一色になった。インターチェンジから県道に入り、森林組合の山小屋の近くに車を停めた。
「結城海人が最近日本に戻って来たくらいのことは、税関で調査済みだ。隠れていても、いずれ探し出すさ。こともあろうにあいつは、身を隠す前日、わたしの首に手を掛けたんだ！　丁度迎えに奴の運転手が来てくれなかったら、今頃わたしはこの世にない。奴は気が狂っているんだ。あんな奴の手先になって何の得がある。考え直せ！　悪いようにはしない！　いいな！」信哉は勇気を甘く見てとったのか、自信に満ちて言い放った。
山あいの陽だまりで、小屋は眠気を誘うように温もっていた。

「そんなら、まあ、行くべきところに、行くんだな！」勇気が脅すと、黒川は恐怖で硬くなった膝をがくがくさせて車から四足で這い出した。恐怖にかられると人間は先祖がえりするのか？

「マリナを殺したのも……」黒川の声が途中で凍りついた。

勇気は山小屋の壁に掛けてあった、電動鋸を手にしていた。

黒川信哉の顎の下に電動鋸を当てる。顎が上がり鋸の刃は喉仏を超えて窪みに落ち込む。血しぶきが上がる、鮮血が飛び散り、身体ごと振動に振り回される。腰を沈め、両腕に力を込める。こんな具合に殺せるだろうか？

勇気は獲物を前にして、怖気づいた。山全体が振動していた。

僅かな心の隙を見て取ったのか、突然、這いつくばっていた黒川信哉が、勇気めがけて猛進して来る。この変わり身の早さ！　避ける間もなく、こともあろうに黒川は電動鋸にむしゃぶりついた。

「何をするんだ！」勇気は必死に黒川を振り解こうとした。

「馬鹿が！　お前ごときに負けてたまるか！」見ると、黒川の口角からシャボン玉のような小さな泡が、溢れ出していた。

勇気は、はっと息を呑んだ。途端、黒川信哉は勇気の腕から電動鋸を奪い取っていた。こんな老人に負けたことで、勇気は狂気を払い除けた。

「心配するなって！　持って見ただけじゃないか」

黒川信哉は電動鋸を抱え込むと、体勢をととのえ、勇気をめがけ、唸り声をあげて向かって来る。おれを本気で殺す気なんだ？　勇気が危機一髪、身をかわすと、黒川信哉は勢い余って石畳に足をとられ、バランスを崩して引っくり返った。助け起こそうとしたが、じっとしている。

「またまた！　起き上がれない真似をして、油断させるつもりだな！」勇気は二三歩危険から遠ざかるように後退した。二人の間を生温い風が流れていく。

「ふん、ちょっと転んだだけじゃないか？　なんと大袈裟な……」勇気の言葉に反応はない。

また風がきて、信哉の口元から、小さな泡粒が、青空に向かってシャボン玉のように飛びたっていった。

脳出血か？　脳梗塞か？　それとも石畳で後頭部を打ったか？

黒川信哉は死んでいた。もう二度と起き上がらない。

勇気は小屋の壁に掛けてある作業衣の脇に、電動鋸を掛けなおした。

信哉の死体を車に乗せ、作業衣に着替えさせると、身分を証明するものを作業衣のポケットに移し替えた。エンジンを入れ、ハンドルを切る。

これで黒川信哉の死は、結城商事連続殺人事件として処理されるだろう。結城海人は指名手配され、夏木さやかは開放される。彼女とは何時か会えるさ、だから逃げるんだ！

もう、おれは名前に、こだわったりはしない。名前など無限にあるのだ。

「夏木さやかの正体がわかりました。本名、渚遥子、宮城県仙台市T町出身、二年前、自宅前の道路で、車を停車して右のドアを開けたところ、父親がバイクで疾走してきて衝突、頭部を強打して死亡。殺人ではと騒がれ、精神神経科病院に一年ほど措置入院させられていました。退院後、同病院で作業療法助手として働いていましたが、現在行方不明。本物の夏木さやかは入院患者で、二日前退院していました。退院した患者一人一人調べ上げてやっとわかったんです」高橋刑事が報告した。

「僕も母親に会ってみましたが、再婚していて、彼女を受け入れる余地はなさそうでした。仙台市に結城商事の前進、結城貿易の一族は既になく、いまのところ、結城海人と渚遥子の繋がりは掴めていません」西田刑事が付け加えた。

「渚遥子が都内で、キャッシュカードをつかって、結城の預金を引き出した時点からすると、どうもこちらに出てきてからの関係と見えるが……」藤川刑事が首を捻る。

「家出したきっかけが、結城だったとみれば、結城のT町との関係を無視できませんよ」

「……なんだか、あの娘も可哀想な気がしてきました。車のドアを開けただけだったと言いますから……。あの娘が父親を殺したと言い立てたのは、母親だったそうで、最愛の夫が死んで混乱していた

とはいえ、半年後には再婚しているんですから。遥子が邪魔だったのではないか？　と言う人もありましたし、あれで娘を殺人罪から救ったのでは？　と言う人もいました。……しかし、近所で妙なことを耳に。あの娘が退院した後、近郷でバイクやオートバイが電柱やガードレールや、石垣に激突して死ぬ事故が多発したのは、あの娘の手口だったのではと……」

どの刑事の顔も現実感を失って、宙に浮いているように見えた。

「ほう、そういえば小西羊年は、そのやり口だな？」藤川刑事の目が光った。「実際のところ、あの娘は結城海人の身代りなのか？　キャッシュでも掴ませて、海人はとうの昔に出て行ったか？　結城海人が失踪した三月、海人の出国記録はない。その頃、仙台市近辺で、交通事故死がなかったかどうか？」

「で、さやか、いや……渚遥子の入院中の病名は？」勝呂警部が核心に切り込んだ。

「病名は、入院時、統合失調症。退院時は心身症。変な話とは思いましたが、その時の主治医がいうには、入院時は興奮、混迷状態が続き、幻視や幻聴もありましたが、何しろ診断治療を拒否して暴れ回り、処置なしだったと言うんです。それで、症状から統合失調症と！　その後は、長い間極度のうつ状態にあったといいます。しかし落ち着いてくると、多少の心身膠着状態にはあったものの、精神分析の結果、光と音に敏感な反応はあったが、いたってノーマルで、心身障害は勿論、人格障害も認められなかったというんです」高橋刑事が不安そうに周囲を見回した。「それで、一年も入院させられ

ていたんですから……」
「まともなのに、精神病を装っていたということか？　それで故意に診断治療を妨害していた？」藤川刑事が反応した。「で、作業療法の助手というのは、きちんと勤務していたのか？」
「作業といっても、ガーデニングや、造花、製本の指導。病院も要観察患者をただみたいな給料で使っていたんですよ。だからかどうか、出たり休んだり、気侭にしていたそうで、出なくなっても、気に止める者もいなかったってわけです」
高橋刑事が痛みを嗅ぎ分けたように、寄り眼になる。
「渚遥子は家でも職場でも、必要とされていなかったってわけだな！」藤川刑事が溜息をついた。
「結城海人、三十八歳、父は代々の貿易商で、東京に結城貿易本社を、実家のあった仙台市に支社を置いていた。中学生の時、父母を交通事故で同時に失う。アメリカ留学中にジャズピアニストの黒川マリナと知り合い結婚。帰国後、北洋不動産に入社、十年勤務して退社し、黒川信哉のバックアップで現在の結城商事を再建、業績も上々、前途洋々ってところかな……」勝呂警部が報告書を閉じた。
「結婚当時、海人の財産といっても、殆どが昔のままの貸地や家作だったらしい。彼の留学中に黒川はもと結城貿易本社の借家人を追い出し、北洋不動産ビルを建てたということだ。しかも、最近、社長不在中にもかかわらず、結城商事をビルから追い出した。結城海人は北洋不動産にいた間、事毎に黒川と対立していたらしい。業を煮やした黒川が、追い立てを始め、結城海人は土地の所有権を主張

して争っていた。彼には黒川信哉殺害の動機は充分だな」
「小西羊年の手口は渚遥子としても、結城海人のために、遥子が復讐するというのも、的外れのような気がする。それに、果してドアを開ける、たったそれだけのことで、そんなに簡単に人を殺すことが出来るのか？　ドアの巾位で、それを避けそこねて衝突する割合は？　そんな場合、運転者の死亡する割合はどうなっている？　そういった事故は年間どの程度あるんだ？　いずれにしても、そんな犯罪は命がけだな。……マリナ夫人が小西に何処まで本気だったかも、疑わしい。ダイナマイトや時限装置は遥子の手に余るし、現に、黒川の誘拐された時刻に、遥子は我々の目の前に、確かにいたんだ！　それより結城海人を犯人と考える方が、自然なんじゃないのか。黒川信哉を連れ去ったのは、結城海人だ！」勝呂警部がいい切った。
　藤川刑事は不服そうに顔を背ける。
「現実に、父親は車のドアに衝突して死んでいるんだ！　右側のドアを開ける場合の注意など、何処の教習所でだって安全第一に教えているさ。結城海人はなんらかの目的を持って仙台市に行き、そこで、病院の寮を脱け出した渚遥子と出会った。もしかしたら、秘書として雇ったのかもしれない。彼は小道具を使った攪乱戦法や、殺人を彼女に指令していた。いずれにしても、この連続殺人事件の鍵を握っているのは、依然として渚遥子だ！」藤川刑事は遥子に固執していた。
　机上の電話が鳴った。勝呂警部が受話器をとる。

「黒川の行方はまだ掴めないか？　なに？　雲野の妹、若葉の持物の中から出て来た？　時限装置に使った時計の枠組だと？　ジョージの組織だとすればダイナマイトの入手は簡単になるな？」
「はい、それに雲野の方ですが、結城商事の株券が、雲野の名儀で、大量に担保になっていました。はい、銀行です。その他にも彼名義の預金や外債のあることが判明しました」
「横領か？　何かほかには？」藤川刑事が電話を置きかけたとき、別の電話がなり響いた。
「わかりました！　城寺　優、ヤクザ仲間では弁天のジョージで通っていますが、彼と結婚した南原若葉の受け取った保険金は総額で、数億円だということです。前夫は三月八日行倒れで死亡、場所は、仙台市、どうです、臭ってきますね」
「その行き倒れについての情報を、徹底的に調べ上げろ！」藤川刑事が言った。
「金をめぐってジョージと雲野が争った？　しかし、黒川との線となると？」勝呂警部が逡巡した。
藤川刑事は雑音を避けるように立ち上がった。
「あの娘は心臓が悪いんだ、こうなっては、これ以上拘置する訳にはいくまい」
勝呂警部の声が藤川刑事の背中で跳返った。
「泳がせてみるか！」
勝呂警部は振り返った藤川刑事に向かって、宥めるようにいった。

37　故郷に帰る！　鮎子と和馬

「ママ！　海！」列車の窓に取りついていた幼い女の子が叫んだ。

平原を風が吹き渡る度に、しゅわ、しゅわと、稲の葉先がさざ波を立て、地平線まで白い波になって広がっていった。

何時の間にか、T駅に着いていた。もう、雪は降ってはいない。何を間違って、禁じられた領域に戻ったのか。街並みを外れると、片足を軸に回転してみた。子供の頃のように、地球は丸いと信じられる、地平線の山並みが遠い。

結城海人が倒れていた辺りから、市民公園にかけて、何もかも夢に変装してしまっていた。どうやって、もう一度夢に取りついたらいいのか？

海人がいなくなって話し掛ける相手もない。植え込まれた色とりどりの花々、日時計、噴水、小鳥の囀り。風のそよぎ。　ティッ、ティッ、唇が音をたてる。

野外音楽堂があって、ベンチに男がひとり寝そべっていた。風が吹くと、男の頭から胸まで被って

いる新聞紙がめくれ、『黒川信哉氏誘拐さる！』の見出しが躍る。
あれは黒川信哉よ。わたしには分っている。これは仕事完了のしるし。
結城海人は南原勇気の肉体を得て、命の尽きるまで生き続ける。そして、いつか、奇蹟が起って、わたしが彼と結婚出来る日がきっと来る！
昼の光が黒々と影を引っ張る。遥子の身体の中にも、影は痛みになって残っていた。
「これで×印は六つ」
風景の真中、大きな建物があって、遥子は生垣に沿って裏門まで、一気に駆け出していった。

「北洋不動産社長、黒川信哉氏、死体発見」のニュースは、浮浪者姿で発見された驚きを乗せて、十五日早朝の日本列島を駆け抜けていった。
捜査本部では、勝呂警部が黒川信哉の運転手と向き合っていた。
「僕が社長宅のガレージで、車の整備をしていた時です。あの男が近づいて来たのは。『豪勢な車ですね。何時にご出勤なんですか？』とかなんとか、さりげなく聞かれたような気がしますが。僕も一人で黙々と働くのも退屈でしたから、つい、いい気になってお喋りしてしまいました……品のいい好感

の持てる方でしたから……別に、ヘンだ等とは……。あの方が、結城海人さんかと聞かれても、僕はまだ入社して一ヵ月目でして、社長の娘婿に当られるなどとは、存じ上げておりませんでしたから……運転手は打たれた頭部を両手で庇うようにして、焦点の定まらない不信の目で周囲を見回した。

「これをよく見て下さい」勝呂警部は結城海人の写真を手渡して言った。

「油断でした。後からの一撃で、ものの見事に意識がなくなったんですから。……違うように見えますが。そうだ、分かりにくいのは、サングラスをかけていたからです。何と言ったかなあ、外国製ですよ」運転手がじれったそうに、目の辺りで指先をトンボとりのようにくるくる回す。

「これか？」勝呂警部が鼈甲色のサングラスを取り出した。

「ああ。これだあ！　これです！　何処にありました？」運転手がマジックの種明かしを求めて警部を見る。

「死体発見現場に、トランプのジョーカーと一緒に落ちていたんだ。どっちも結城の持物と判明した。ジョーカーは殺人事件の完結を意味しているのかもしれないな。結城海人のやりそうなことだ！」

勝呂警部が興味深げに言った。

「サングラスを取ったら、そうです、この人かもしれません。いやこの人です！」

サングラスに誘導されて、運転手は迷いを吹っ切るように背筋を伸ばした。

「結城海人の公開捜査だ！」

勝呂警部が怒鳴った。

黒川信也誘拐殺人事件捜査本部には日増しに、焦りの色が濃くなっていく。

結城海人の行方は、公開捜査にもかかわらず、依然分っていない。インターネットやファックスや、電話でよせられた膨大な情報の処理に忙殺されて、捜査員は疲労していた。

「どれも情報ばかりで、確たる証拠が掴めないな。それより、黒川の死体発見現場に落ちていたサングラスの縁にめり込んでいた、砂採取り場の砂は、結城海人が幸田アイの死に関係していた証拠だし、小西羊年の衝突の現場に落ちていた海人の万年筆、マリナ夫人の寝室の焼け跡から発見された、海人の手帳や同じトランプの燃えかす、黒川信哉の死体の発見された野外音楽堂にあった同種のトランプとサングラス。この一連の事件はむしろ証拠を残しすぎていないか？　犯人は知能犯だ、それくらいの工作はするさ。結城海人が生きていて、連続殺人をやっているかのように見せかけているんだ。これだけ経っても結城海人が行方不明ということは、やっぱり生きていないものと思われる」

藤川刑事が持論を蒸し返した。

「結城海人のアメリカから帰国後の情報が混乱している、それがおかしい。結城マリナの死後渡米し、

シスコで事故を起こしたというのも、果して結城海人だったのかどうか、疑わしいな？」
藤川刑事は勝呂警部に対抗するようにいった。
「黒川を誘拐したのは結城海人だ！　これは、運転手が証人になる！　マリナ夫人にケイや雲野も、そのうえ黒川まで亡くなったときては、死体を証明しようにもお手上げじゃないか。結城は会社の検診も受けていない，歯医者にもいったことがなかったと家政婦は言っているんだ。　これだけの人間が死に絶えてから、漸く連続殺人だと、あわてているなんざあ、警察の赤恥だな！」
勝呂警部が本音を吐いた。
「いいか、よそ見はするな！　最近になって黒川は北洋不動産から組織の排除通告を出している。誘拐された日、黒川の身辺警備が手薄だったのもそのせいだろう。病身の奥方が玄関の外までは送りにでない習慣を、海人なら当然知っていた筈だ。運転手も組織と無関係の新米に替えて間もない。これを知る立場にあったのも海人だ！　結城海人は生きている。迷うな！」
勝呂警部が藤川刑事を無視し、捜査員を鼓舞するように、腕を振り上げた。
「こっちは、仙台の病院でも当ってみるとするか。受け入れられない以上、足で稼ぐしか能がないからな！」
藤川刑事と高橋刑事が飛び出して行った。

38　親友、究極のマジック

回診から戻ってきた丸茂医師は、刑事に身振りで挨拶を送ると丁寧に手を洗った。
「患者のプライバシーについて、話す気はありませんよ」丸茂医師がいった。
「先生は結城海人という男の、居場所をご存知ありませんか？　高校時代、親友でいらっしゃったと伺いましたが……」医師の顔が一瞬曇った。
「彼のことなら、幼稚園の頃から知っていますよ。ですから、今度の事件については心を痛めています。彼が何かの罠にはめられたんじゃないかと……」
「結城海人は先生の個人的な患者だったようで、カルテは先生ご自身が、保管されていると聞きましたが……」
「カルテは持っていますよ。だが、誰に聞いてもいい、彼は人を殺せるような人間ではありません」丸茂医師は憤然と言った。
日本の医師は概して口が堅くて、ろくに病状も説明してくれないが、他人に対してはぺらぺら喋っ

てしまう手合いが多い。話したがっているな、と藤川刑事は読んだ。
「彼に重大な病気とかは、ありませんでしたか？」
「彼はたとえ、死病に取りつかれたとしても、殺人事件を目論んだりはしませんよ！」
「そうでしょう、いや、僕もそう考えています。もしかしたら、彼は死んでいるのではないかと……」
「彼が死んだ？　殺された？　殺されたんですか？　殺されたなんて！」丸茂医師は繰り返した。気落ちしたのか、すとんと撫で肩になった。
「で、先生のご協力が……」
「そういうことですか？　しかし、彼はシスコにいると聞きましたよ。殺されたと本当に分らないのに患者のプライバシーは話せません。その点がはっきりしないとどうも……」丸茂医師は長い沈黙の後で言った。
「じゃあ、先生は結城海人にニトログリセリンを与えられましたか？」高橋刑事が上目使いでいった。
「ええ、彼のことが心配だったので、もしもの時に飲むようにと与えておきました。彼の為というより、僕の安心の為だったんですが、まさか、そんなに早く死ぬとは！」丸茂医師が絶句した。
「いや、まだそう決定したわけではありませんよ」藤川刑事が、あわてて訂正した。
「先日、雲野さんという方が見えましたが、あの方は誰に？」
「ええっ、雲野が現われた？　この病院にですか？」藤川刑事が汗を拭った。

「雲野さんは入院患者の見舞いに見えたんです」
「患者とは誰です？」
「患者は少年ですが……。警察には脅えますよ、容体を悪化させるわけには参りませんから……」
「じゃあ、この女に、ニトログリセリンを出した覚えは？」藤川刑事は渚遥子の写真を見せながらいった。丸茂医師は首を振った。
「大体、あんな若い娘がニトログリセリンを持ち歩いているなんて、おかしいのに、まんまと引っかかってしまったなあ！　あの場を逃れる為には、格好の餌が転がり込んだわけだ。おれ達を手玉にとって喜んでいたんじゃないかな？」藤川刑事が高橋刑事を振り返っていった。
「あの女、ニトログリセリンを確かに、僕の目の前で飲みました、飲み込むのを確認しましたよ。演技だとしたら……」高橋刑事は丸茂医師を意識して口ごもった。
「結城海人が現われたのは何時だったか、何時頃だったか思い出して下さいませんか？」
「ああ、それならわかっています、三月八日でした。心臓治療はあちらが進んでいるからと、二人で、向こうのホームページをアクセスしてみたんです。後でパソコンの履歴をみたら三月八日でした。僕はアメリカに行ったとばかり思っていたんですが……」
「アメリカって西海岸ですか？」
「ええ、サンフランシスコです」

「それなら、示談金を送金するよう、ファックスが二三回来て、送金したと結城商事の庶務課長が言っていますが？」
「示談金か？　じゃあ、生きているんですよ。彼はあちらに長いことといましたからね、迷子になったりはしませんよ！」丸茂医師が嬉しそうな笑い声をあげた。
「いいお友達なんですね」藤川刑事が柔らかな声で言った。
「で、雲野が見舞ったという、患者の名前だけでも教えていただけませんか。決して病気に影響するような取り調べはしませんから」

39　ダイナマイトと少年

丸茂医師は思案した上で、再び白衣を羽織ると、藤川刑事らを伴って廊下に出た。
中庭に面した明るい病室のベッドに、パジャマ姿の少年が何も掛けずに、くの字に横たわっていた。
如何にも無気力にだらりとして、手には小さな手鏡を持っていた。

「和馬君、マミーはまだかな？」
不意の来客にびっくりした少年がベッドの上で飛び上がった。好奇心の溢れた眼が無遠慮に動く。
「刑事さんでしょう！　ね、刑事さん！　雲野さんを結城の小父様が殺したなんて、警察では、本当にそう思っているんですか？　とんでもないよ、小父様はそんなことはしない！　雲野さんが見舞ってくれた時なんか、僕、忘れ物を小父様に届けて欲しいって頼んだくらいだもの……。刑事さん、小父様が殺人犯みたいな取り上げ方をするマスコミに、真実を伝えるように言って下さい！」少年はこの時を待ちかねていたかのように抗議した。
「興奮しないで、横になった侭でいいんだよ」病室に入ってこようとした看護師を拒んで、丸茂医師は自分で和馬を支えて横臥させた。
「忘れ物ってなんだったのかな？」藤川刑事が優しく言った。
和馬はおどおどした心細そうな様子になる。
「雲野さんも殺されているんだよ、協力してくれないか。結城の小父様が殺したなんて言ってやしないさ」藤川刑事が身体を屈めて和馬の手を握りしめた。
「ダイナマイト！」和馬は唐突に言って、危険物を避けるように刑事の手を振り払った。
刑事二人は虚を突かれて震えあがる。
「何？　ダイナマイトを雲野に？」

「そうだよ」和馬は口を尖らせる。
その時、あわただしく、ドアを開けて入ってきた母親らしい女が、突如子供の前に立ちはだかった。
「刑事さんはお帰りになって！　これでは和馬が、ショック死してしまいます。ねえ、先生！」丸茂医師は刑事たちに目配せをした。廊下に出るよう促しているのだ。
「彼の希望で近々、彼の腎臓を和馬君に移植することになっていたんですが、その前にと、僕が奨めて健康診断を実施させましてね。結城海人が血液鑑定を行なったのは、この親子です。あの日、結城は白川鮎子に会う前に、僕にその書類を見せてくれたんです。彼と和馬君との血縁関係は認められないとの鑑定でした。健康診断では心臓の悪いのが発見されましたし、ここのところ、結城は災難続きだったんですよ。警察の力を持ってすれば、鑑定をした東京の病院でも、結果を見せてくれるでしょう」丸茂医師は確信ありげにいった。

「それにしても、ダイナマイトとは？」藤川刑事は仙台警察署に戻っても、頭を捻りつづけていた。
「じゃあ、ダイナマイトを結婚式場に運んだのも、エレベーターに持ち込んだのも雲野になるのか？結城海人に手渡す積りが、紫山会の奴らに頭を打たれた上に、酒を飲み、時間のずれに鈍感になって、こともあろうに、雲野自身が犠牲になってしまったって、わけかな？」

「そういうことですね。そうなら、渚遥子も濡れ衣ってことですか？」高橋刑事が頭を抱え込んだ。
「全く、狐に抓まれたような話だよ。これでは、俺達の推理は全て覆される！　勝呂警部をますます暴走させることになるな！」
「しかし、本部に報告しないって訳にも、いかないのでしょう？」高橋刑事が錐もみ状に震え上がり、両手で体を叩きながら身を竦めた。「そうなると、ダイナマイトを仕掛けたのは誰ってことになるんです？」
藤川刑事は肝心なところに手が届かないじれったさを持て余して、投げやりになる。
「そんな報告をするくらいなら、廃業する方がましだな！」

二人の刑事は勢力的に白川家の周辺を歩き回った。聞き込み捜査の結果、結城海人が白川家を時々訪れていたこと、和馬が結城をパパと呼んでいたことまでは掴んだが、何処からも、紫山会との繋がりは出てこなかった。
「少なくとも、結城海人が父親でないと分ったってことは、和馬にとって大変なショックだったに違いありませんよ。それに移植出来ないというのは、もっと衝撃だったかも？　白川鮎子は始めから結

城が和馬の父親だなんて思っていた筈ないんだから、和馬と結城の心を弄んで、心理ゲームを楽しんでいたのでは……」高橋刑事は鮎子との距離をとるように言った。
「何と言っても結城海人にとって、大変なショックだったろうな。それにしても……」藤川刑事が大きく息を吐き出した。脳天にダイナマイトが引っ掛っていた。
高橋刑事が、弁当を食べている藤川刑事の椅子の背に、手をかけて覗き込んだ。
「おれの白髪が増えたからって、変な角度から見るんじゃないぞ」藤川刑事が邪険にいう。
「自分も考えて見たんですけど、仮にも、ものは、ダイナマイトですよ。あの病弱な和馬が、結城が忘れていったからって、どうして持って追いかけたりしたんでしょう？　それに、結城海人はそんな危険で重大な物を、どうして忘れたりしたんでしょうか？」高橋刑事が腑に落ちないというように口を捻った。「ダイナマイトだと知らなかったのなら、ともかく、和馬は知っていたんですから？」
「親子心中でも、目論んでいたんじゃ、ないのかぁ？」藤川刑事が揶揄するようにいった。
「まさか？　本当にそんなこと信じてるんですか？」高橋刑事が大袈裟に両手を宙に開く。
「あの母親は曲者だよ、結城の子供だと嘘をついて信じさせ、海人に腎臓まで提供させようと企んだのだから……」藤川刑事が拳を握り締めた。「それに、あの少年は嘘をついてまで、結城を庇うつもりなのかもしれないな？　相手は少年だ、あの時母親に邪魔さえされなかったら聞き出せたのになあ！　でも、心配するな、君から言われなくても、もう一度白川和馬に会えるよう、駄目なら白川鮎子から

事情聴取できるように、丸茂医師に手配してもらっているから……」

藤川刑事は弁当を食べ終ると、大急ぎでお茶を流しこんだ。藤川刑事は病院玄関前の石段を2段置きに駈け上がり、高橋刑事は車用のスロープを一気に駆け登った。

待合室ロビーで待っていると、白川鮎子が幾分憔悴した風情で現われた。それが鮎子の美しさに内面的な深みや、毅然とした意思を感じさせる。

「今日、和馬はお会いできません。あの子、昨日は興奮してしまって、それは、大変だったんですから……。以前にもこんなことが、なかった訳ではありませんけど、ああ、あの時は、本当に危険だったんですよ！」

もしかしたら、鮎子は一睡もしないで和馬に付き添っていたのではと藤川刑事は思った。

「以前とは何時のことです？」

「異常気象で、三月だというのに、あの日、仙台平野は天が狂ったとしか思えないような大雪でした。和馬は寒さが鬼門なのに、あの大雪の中へ飛び出して行ったんですよ。でも、今回は大丈夫、多少興奮しただけですから……」鮎子は和馬の病気が持ち直した喜びを隠せないでいた。

「それは三月？　結城がお宅に忘れものをした日ですね」一瞬鮎子の顔色が変わった。

「ええ、それは……，昨日和馬が申し上げましたか？　結城が忘れ物をしたから覚えていたんです。と

いうより……」鮎子は何故か言葉を濁した。
「なぜ、貴女が持って行かずに、病気の和馬君が追いかけたんです？」
「だって、和馬が一人で隠したんですから、わたしは全く存じませんでしたもの！」
「和馬君、どこまで追い駆けて行ったと話していました？」
「和馬は追いつけませんでした。暫く追ったようですが、あの雪に足をとられて転んでしまって、苦しくなって引き返して来たんです。透析の前日でしたから……」
「忘れ物が、ダイナマイト？　随分不穏な物ですね？　ダイナマイトの重さは？　大きさは？」藤川刑事が腕を広げて見せた。力が入って巨人のように大きく見える。
「さあ、どうだったでしょう？」鮎子はじらすように、藤川刑事から高橋刑事にゆっくりと視線を移した。
「和馬は百科事典で調べたんです」
「何を？　DNA 鑑定のことですか？　ショックを受けたという意味かな？」藤川刑事が言葉を切って考え込んだ。
「丸茂先生がそんなことまで、ぺらぺら喋ったんですか？　あの先生、こちらの同意も得ずに血液など採取して、東京の病院迄鑑定に出したんですよ。失礼な！　刑事さん、こんなこと、許されることではありませんよね。告訴すべきでしょうか？　違法なんでしょう？」白川鮎子は憮然としていった。

「いや、それはともかく……」藤川刑事は焦っていた。
「あら、もしかして、刑事さんは、私を疑っていらっしゃるの？　それとも和馬を？」鮎子の眼が全開大になる。「嫌だあ、私たちに、雲野さんを殺す動機などある筈ないじゃありませんか！」
「いや、それはどうかな？」藤川刑事は高橋刑事と顔を見合わせた。
「ダイナマイトは爆発するでしょうが、ニトログリセリンで、雲野さんを殺せるんですか？」
「何のことです？」藤川刑事は混乱していた。鮎子はそれを楽しんでいるように見える。
「ニトログリセリンっておっしゃいましたか？」高橋刑事が聞きとがめる。
「ええ、ニトログリセリンです！」鮎子は優位を示そうとするように穏やかにいった。
「話をぽんぽん摩り替えないで下さい。今問題にしているのは、ダイナマイトの方なんですから……」高橋刑事が目の前のテーブルを叩いた。藤川刑事の手が高橋刑事の手を押さえ込んだ。
「ですから、申し上げておりますでしょう！　ニトログリセリンを辞書で引いたら、ダイナマイトと出て、和馬はそれはもう、びっくりしてしまいましたのよ！」白川鮎子は笑いながら、刑事達に与えた心理的ショックに止めを刺した。
「なあんだ！　ダイナマイトって、薬のことだったんですか！」藤川刑事が頭にやった手で髪を掻き毟り、高橋刑事を振り返って笑い出した。「全く、人騒がせな話だなあ！」
「あの鑑定結果なら、私の目の前で彼は燃やしてしまいましたわ。ああ、ダイナマイトそのものでし

たけど……」白川鮎子は悪びれもせずに微笑んで見せた。
「雲野大輔とは、どういうご関係なんです？」
「雲野さんとは、結城マリナさんの葬儀の時にお会いしただけです。黒川の手のものが、私を両側から抱えて、会場の外に放り出したんですよ。そのとき助けて下さって、ここまで、車で送って下さいました」白川鮎子は淡々と言ってのける。
「何故、黒川からそんな扱いを受けられたんです」藤川刑事が同情するようにいった。
「わたしと海人との仲は長いんですのよ。最も別れていた期間はあるのですけれど。和馬が病気になって、主治医の丸茂先生を紹介して下さったり、彼いろいろ力添えをしてくれました。それでしょうか、黒川が依頼したらしい調査員が近所を聞き回ったり、こちらに来ているのではないかと、かなり執拗な電話をマリナさんから頂いたりもしました。この間も、私は海人に逢いたいばかりに……、のこのこ葬儀に出て行ったんですよ。自業自得かもしれませんけど……。乱暴な……、あの人たちなら、どんな殺人だってやりかねませんわ！」鮎子は和馬を気にしているのか、病室の方を伺うと、表情を引き締め鋭い目になった。
「貴女が嘘をつき続けていたとなれば、彼も怒って別れ話になった。和馬君は話を聞いていた……」
藤川刑事は美人の前でふわつく気分を、しっかりと両腕に抱え込んだ。
「聞いてなんかいませんよ。いまでも父親だと信じていますもの」

「ということは、もう結城海人は絶対に和馬君の前に現われない、嘘をつき通せるってわけですか？」
「意味がわかりません？」鮎子は抗議するようにいった。
「心配になりませんでしたか。薬を隠すということは、ともすれば死んでくれるんじゃないかとの期待感があった、未必の故意の殺人になるとは？」
「殺すなんて、馬鹿な！　彼は生きていますから、子供の悪戯を笑って許してくれますわ」鮎子は明るく笑った。
「貴女が結城海人は生きているという、根拠を聞かせて欲しいな」
「ということは、彼、死んでいるんですかぁ？」鮎子の声が悲鳴になった。
「いや、そうと決まった訳ではありませんよ」藤川刑事がなだめにかかる。
「海人は逞しく、誰よりも存在感のある生き方をしていると、お電話下さった方があるんです。若い女の声で、秘書か何かで？　同棲しているとも、おっしゃっていましたが？」
「もしかしたら、渚遥子のことですか？」
「渚遥子っておっしゃるんですか？　その方のところを捜して下さい。彼がいるはずですから……」
鮎子は目を細め、希望を抱きしめるように言った。「ところで、渚遥子って？　どこかで聞いたことありますよ。何処でだったかしら？」鮎子は長考のあとで首を横に振った。
「又も、渚遥子だ！」高橋刑事がぼやいた。

立ち去ろうとする刑事の背に向かって、鮎子のりんとした声が追いかけてくる。
「結城に逢ったら伝えて下さい！　和馬には、もうすぐ、私の腎臓を移植してやることにしましたと！」

三月八日、仙台市にて発見され、南原勇気として葬られた行倒れ死体は、血液鑑定、心臓病の既往から、東京都港区N町二の二の二十一、結城商事社長、結城海人、三十八歳と確認された。
東京の病院から提出された血液鑑定書と、仙台市の県立病院のカルテが、行倒れ死体の解剖結果と照合され、藤川刑事の持論は立証され、結城海人は彼の死後起きた、結城商事関連殺人事件の犯人では、あり得ないことになった。
ここに至り捜査当局は、関連事件を統合し、改めて結城商事連続殺人事件捜査本部を立ち上げ、焦点は、南原勇気に移った。
「南原勇気の行方は杳として分からない。勇気は養子縁組の為、戸籍謄本を請求した段階で、自分自身の死を確認した筈だが、渚遥子と知り合ったとすれば、それ以後と思われる。若葉は遥子と才気が、雲野の家の前で出会った時には、間違いなく初対面だったと証言している。南原勇気には、結城海人、

結城マリナ、幸田アイ、小西羊年に対する、殺人動機は認められず、面識すらなかったものと推定される。結城海人と南原勇気の接点は雲野大輔だが、南原勇気が雲野はともかく、黒川信哉までどうして殺さなければならなかったのか、そこのところが、いま一つ分からないな？　例え紫山会に恨みがあったとしても、どうして今頃になって……。大体蒸発するような人間は、被害者になっても加害者にはならないものだが？」捜査会議が十分後に迫っているのに、捜査本部長の佐川捜査一課長は五里霧中だ。「この事態になっても、殺人の全てに、動機のある者と言えば、結城海人しかいないのだから……」捜査一課長は狼狽を隠そうともしない。

「不思議なのは、死んでいた筈の結城海人と同棲し、会社でも逢い、結婚式出席の手筈を整え、披露宴でも逢ったと言っている人物。しかもどの事件の際にも、アリバイが無いうえ、エレベーター殺人事件の時には直前まで被害者と現場にいた。ただし、黒川信哉誘拐事件の時には、我々の目の前に確かにいたがね？」藤川刑事が自嘲するように言った。

「こうなると、彼女が社長と呼んでいたのは、南原勇気の疑い濃厚ですね？　マンションで、同棲していたのも？」高橋刑事が藤川刑事に同意を求める。

「今のところ、マンションの部屋からは、彼の指紋は発見されていない。彼女の社長は彼女が言うように結城海人だな！　しかし、当然海人はいない。死んでいたんだから……」

「でも、部屋を出るとき、故意に指紋を消したのでは？　雲野の事件のすぐ後で見た時、彼女の部屋

の洋服ダンスには紳士もののスーツが四着、下着や靴下などもありました。新品も洗い晒しもありました。歯ブラシも男女二人分並んでいましたよ。食器類もみんなペアでした。スーツなんかお誂えの高級品で新品にも古い方にも、結城のネームが入っていました。おまけに下駄箱には、男物のイタリア製の靴もありましたよ！」西田刑事が泡を飛ばして意義を申し立てる。

「ネームは結城だったか？　畜生！　それに靴とは！　幽霊ではなかったか？」藤川刑事が頭を叩き、捜査会議を前に集まってきた捜査員たちが声を上げて笑った。

「気持が悪いなあ、死んだ後で知り合って同棲だなんて、どうなってんだか！　しかもマンションの管理人も住人も、確かに男を見たと言っている。最近も、はっきりと見たといっているんだ。写真を見せると揃って結城海人を選んだ」藤川刑事が自分の安物のジャケットをそっと椅子の背に掛けた。

「そうだ、花江さんと言ったかな？　結城家の足の悪い家政婦さん、あの人にスーツと靴を見て貰って来てくれないか。　それにマンションにあった歯ブラシをＤＮＡ鑑定に回してくれ、結城海人は否定され、南原勇気と出るかもしれない」佐川捜査一課長が勝呂警部の肩を叩いた。

大田警部補の前の電話が悲鳴をあげる。

「鑑識？　ええっ！　結城の帽子に渚遥子の髪の毛ですか？」

みんな驚きの顔を見合わせた。

「男装していたのか？」

「とも考えられるな。背があるから……」捜査本部に戦慄が走る。
「渚遥子が、病院の寮に戻ったのは確めてある。もう一度、事情聴取をしてくれ！　報告によれば、彼女はまだ南原勇気と逢ってはいない」捜査会議を前にして、勝呂警部が緊急の指示を出した。「刺激しないようにしろよ。今は寮にいる。入院すると面倒なことになるからな！」
「そんなことを言うのなら、あの時、どうして泳がせるなどと！」藤川刑事が天を仰いだ。

40　顔には、目と口がひび割れていた

「現在の渚遥子は、お話出来るような状態にありません。いずれ落着き、治療を受け入れてくれるようになれば、現代医学からすれば、質問に応じることが出来るとは思いますが……」既に遅かったのだ、遥子は入院していた。主治医はやんわりと事情聴取を拒否した。
「殺人事件の捜査なんです、是非ご協力ねがいます」藤川刑事は低姿勢に出る。
「もうたっぷり、警察やマンションで、取り調べはされたのでしょう。そのショックが引き金になっ

て、病気を悪化させたんです、そう思われます。今のところ、診察も治療も拒否していますから、時を待つしか方法はありません」主治医は断固として患者を守る気だ。
「まさか？　すぐこの間は、いろいろ話してくれましたが？」
「まともでしたか？」主治医は藤川刑事の心を覗くように言った。
「ええ、多少変わってはいましたが、少なくとも事情聴取が出来ないほどの状態じゃなかった」
「そうですか、しかし、現状では何の答えも戻っては来ない。分りますね、そういうことです」
「だって、先生は、遥子からマンションや警察での捜査状況を聴取されたのでしょう？　そう、おっしゃったじゃないですか？　違うんですか？　先生は渚遥子を、精神障害だと診断されたってわけですか？」藤川刑事が食ってかかる。
「そうです。切れ切れの応答の中から推し量ってみました。統合失調症の典型的な症状が現われています。寮で蹲っているのを掃除婦に発見されたのですが、何日そうしていたのか誰ににも分っていません。憔悴し、対人恐怖と妄想、幻覚、幻聴に悩まされているんですよ。その原因は多分に、あなた方にもあるのでは？」
主治医は警察を非難していた。
「しかし、前回の入院では結局、心身症と診断されたんでしたね。彼女は精神疾患のふりをしているんです。だから、治療を拒否しているんでしょう！　無差別に殺害した疑いが濃厚なんですから……

何とか会わせて下さいませんか」
　医師は首を振った。
「前回の診断でしたら、わたしには全く責任ありませんよ。しかし今回の診断には主治医として責任を持ちます！　逮捕状でもあるんですか？　それにおかしいのは、彼女は一体誰の指令を受けていたとおっしゃるんです？　何か確かな証拠でもあったんですか？　伺いたいですね」
「あります、嫌ある、物的証拠も……。彼女はまだ、結城海人の多額な現金や、カード類に印鑑などを持っている筈なんです」
「所持品は調べました。そのような物は一切出て来ませんでしたよ。彼女の私物の他には……。彼女は自分の金の出し入れについては、まえから手帳にかなり詳細にメモしています。小さい頃からの習慣はそう簡単には変えられないし、中産家庭で育った、たがが無意識に彼女を縛った筈です」
「しかし、彼女には虚言癖があるのでは？」藤川刑事が反発した。
「飛躍や夢を嘘と言うなら、そういう見方もあるかも知れませんが？　彼女は病気なんですから……」
　一歩も引こうとしない刑事たちを前にして、長考の末、医師は傍らの看護師に目で合図をした。
「いいでしょう！　そんなにお疑いなら、彼女の持物はまとめてありますから後でご覧になって下さい。その前に窓越しに、二三分でよかったら、彼女に会ってごらんなさい。看護師にご案内させますから……。それに、さっきの指令の話ですが、させられ体験！　それこそが立派な統合失調症なんで

すよ。彼女のように典型的な症状の現われるのは、最近では珍しいことです。もっと早い段階で、自分自身や、家庭や、学校や勤務先などで気付くことが多いんですよ」主治医の眼鏡が差し込んだ西日を反射させて、刑事の目を射た。

「あれです！」看護師が言った。

黄色に変色した絨毯、壁に向かって蹲っている女の後姿が見えた。背を丸め、顎を腿に押し当てて、じっとしている。よくみると手はかなり早い速度で動いていた。

「何をしてるんです？」

西田刑事が不審そうに看護師をみた。

「塗りたくってるんですよ！」

看護師が無表情でいった。

「何……」

藤川刑事の声が途切れる。

渚遥子が両手でこねくり回しているものの正体！

人の気配を感じとった遥子が、身じろぎし、立ち上がったと思うと、壁に両手でこねくり回していたものを狂ったように塗りつけ始めた。

刑事達は思わず鼻を押えて後ずさりした。

「遥子さん！」
看護師が声をかけた。はっとしたように、遥子が振り向いた。
驚いたことに、彼女には顔がなかった。
いや、よく見ると、汚物を塗りたくった顔に、稚拙な目鼻がひび割れていた。

41　遺産は、雲野才気に！

雲野大輔の遺体は荼毘にふされ、妹の若葉に引き取られた。遺産は浜田真吾の申請により、養子、雲野才気に引き継がれた。養子の存在を、若葉も、結城商事の庶務課長も知らなかったと言う。しかも住民票が大阪に移されていたのだ。大阪の現住所に雲野大輔のいた気配はない。
「才気を、雲野大輔は、エレベーター殺人事件の後で預けに来たんです！　本当です！」それでは雲野自身が雲野の死後、子供を預けに来たことになるじゃないか？　何を戯けたことを……。

勝呂警部と大田警部補は、排気ガスが潮と干し魚の臭いに変わる頃、鰻の寝床のような山と海に挟まれた魚師町に辿り着いた。浜田家はぐみ林に囲まれた砂地に、丈低く隠れるように建っていた。敷地の前には新築工事でも始まっているのか、場違いな建築基材が堆く積みあげられていた。

勝呂警部が名乗ると、夫婦は声を揃えて喚きだしたのだ。

「才気を、雲野大輔は、エレベーター殺人事件の後で預けに来たんです！　本当です！」

祖父母は四十代、まだまだ若く体力もある、これなら、才気の両親として届け出ても、不思議に思われなかったのも頷ける。まるでジュエットじゃないか。

雲野才気は勝呂警部と大田警部補を見上げていたが、突然、玄関から飛び出して行った。

「パパ！　パパー、何処？　パパ！　パパー！」才気の声が物悲しげに、だんだん小さくなった。

「なんか、どっかで、警察の方に、とんでもねえ勘違いがあったんじゃねえですかな？　雲野大輔が最期に来た時、才気に一生困らねえだけのものは残してやると、そりやあ、意気軒昂でした。俺達夫婦にも楽をさせてやるとも約束してくれたんです。あれほど元気だったのに、この家に来る前に死んでいたとは？」才気の祖父は絶句した。

「しかし、お孫さんは、遺産を相続出来たんでしょう？」大田警部補の眉と語尾が釣り上がる。

「まあ、それはそうだが……。俺達が遺産目当てに雲野を殺したわけではないんだ！　才気がお姉ちゃん、お姉ちゃんって言うもんで、雲野に女でもいたんじゃねえかと？　警部さん知りませんか？　娘

の紅子は死んでるんだから、遠慮はいらねえ、早く身を固めてくれれば安心できるんだがと、二人で話していた矢先に、こんなことに……」

漁から戻ったばかりだという才気の祖父、浜田真伍は、海焼けした褐色の肌で、しょぼしょぼした目とは対照的な、毛虫のように太い眉を荒々しい手でごしごしと擦った。漁師の手から眉に移動したのか、魚の鱗が一つ、差し込んだ西陽をうけて宝石みたいにきらめいている。

「彼がきたのは、十二日の、何時頃です？」勝呂警部が問いただした。

「夕方、七時か八時頃です」

「事件の前日、十一日の勘違いでしょう？　十一日の夕方の？」大田警部補が笑い出した。

「間違いねえ！　俺達はまだ呆ける程の歳ではねえ！」浜田真伍が気色ばんだ。「孫の才気が雲野の養子になって、やっと俺達も楽ができると、安堵したのも束の間、どうしてこうなるのかが理解出来ねえ？　才気が、こんなに早よう、パパと死別とはなあ、酷でえことです！　才気は『パパ、何時迎えに来てくれるの？』って毎日待ってるんですよ。今も探しに行った筈だ。血の繋がらねえ父親に、あれほど子供が懐くもんじゃねえ、俺達は本当の父親だと睨んでいるんだ！　雲野大輔は情の深い優しい人だ。あんな酷いやりかたで殺されただなんて、信じられん！　あの日の夕方には、才気を連れて、この家に確かに来たんだから！」浜田真伍は興奮し、証人である才気を探すつもりか、玄関から出ていくと、それが気掛かりだったように建築基材に抜け目のない視線を走らせた。

「雲野がこちらに来た日時に、間違いありませんか？」勝呂警部は祖母に向って問い直した。
「間違いありませんよ。確かにあの日の夕方見えられました。何ですか、東京で急ぎの仕事があるとかで、直ぐに帰られましたが、幽霊なんかじゃありませんでした。雲野さんは養子縁組で、戸籍上才気の父親になられたんですから、葬式には、わたしらが才気を連れて東京に駈けつけるのが筋だったんでしょうけど、連れて行って才気がこんがらがってもと、心配で、ここから動かずにいたんですよ。才気は未成年ですから、雲野さんの妹の若葉さんが、遺骨を引取って雲野家の墓地に葬るのは当然でしょう！　それなのに若葉さんは、才気を養子にするに当って、お兄さんから何の相談もなかったとかで、才気を泥棒呼ばわりされるんですよ！　わたしらとしては、本当に心外なんです」祖母のきぬは勝呂警部に訴えるようにいった。
「雲野は何度ここに？」
「三度です。養子の手続きに二度、事件のすぐ後に暫く預かって欲しいと一度。間違いなく同一人物でした。午後です、夕方です。……娘の紅子が三年前、赤ん坊を抱えて来ましてね、私生児にしたくないから、浜田の籍にいれて欲しいと泣きついたんです。初孫を抱いて見ると、それはそれは、天使のように可愛いい子でして、父なし子じゃ可哀そうになって、わたしらも紅子の要求に応じることに……。役場に届を出すときは、もう、恥ずかしくて恥ずかしくて、生きた心地もなかったです。そのころ紅子がどこで、どんな暮らしをしていたのか、全く知りませんでした。それが、紅子が病気で急

死し、暫くして、才気を養子にしたいと雲野さんが見えられて、それはもう、吃驚しましたし、ほっともしました。でも、わたしら、事件とは何の関係もありませんよ。だって、紅子はあの世なんですから……。何とか曲がりなりにも、暮らしていける眼鼻が出来たところです。警部さん、もう、これ以上、詮索は止して下さいませんか。世間体もありますから……」浜田夫妻にとって一番大切なのは、世間体なのかもしれない、狭い町だ、やっかみもあるだろうしな。勝呂警部は作戦を変更した。

才気は気を引こうと、玄関の引き戸を叩いて入って来る。洗い晒しで清潔そうだが、真昼のパジャマ姿とは……。この夫婦は子供を持て余しているのでは？

「お昼寝の時間なのかな？　ちょっと、小父さんとお話しようか！」勝呂警部は、雲野の写真をひらひらさせてから才気の目の前にかざした。才気はそこが決められた場所のように、勝呂警部の膝の上によじ登る。

「僕この人、知ってるよ！」得意そうに、才気の鼻の孔が大きくなった。

祖母は丸出しになっていた膝小僧を、スカートを引っ張って隠してから、才気を警部の膝の上から奪い取った。

「この子だってパパの顔くらいは知ってますよ！　少し成長が遅れてはいますが、心配いりません」

「坊やはパパとここに来たの？」

才気は顎を上げて祖母を見た。大人の顔色を伺う習慣が身についているのだ。

「暫く預かって欲しいと雲野さんに頼まれたんです。漁や朝市に出る時は一人にしておいても大丈夫とおっしゃいましたが、そんな可哀想なことは出来ませんから、わたしら、この子の為に、相談して二人とも仕事をやめることにしました！」

この夫婦は才気が雲野の遺産を相続したことで、仕事をやめ、家を新築しようとしているのだ。

「まだパパ、現れないが、パパのお名前言えるかな？」大田警部補が才気に微笑みかける。

「ウンノ、ダイシュケ」

「まだ現れないって、どういう意味です？　やっぱり雲野は生きているんですか？」

浜田真伍が聞きとがめた。

「変てこりんな話だな！」

勝呂警部は才気に笑いかける。

「坊や、お迎えに来るのは、このパパかな？」

今度は南原勇気の写真を大田が、才気の目の前に差し出した。才気は、写真から目を離せないでいる。小さい手が写真を奪い取った。

「ああ、はっはっは、は、この写真、パパに似ているか？　そうか、そうかあ！」

勝呂警部は大田警部補と顔を見合わせる。雲野の贋者は、間違いなく南原勇気だったのだ。

「雲野大輔が生きていたら、才気の相続した遺産は、どういうことに、なるんです――？」

才気の祖父母の戸惑った声が、またも綺麗にはもっている。
「どっちに転んでも、悩みは尽きないものらしいなあ！」
勝呂警部補は、遠ざかっていく雲野才気と浜田夫婦に手を振りながら、呟いた。

42　結城商事、連続殺人事件　捜査本部

「何があったとしても、あの娘は二十歳過ぎた成人、責任は、すべてあの娘にあります。私たちとは無関係です！」渚遥子の母親は事情聴取を拒否し、藤川刑事の鼻先で音を立てて玄関ドアを閉じた。
「ほうっ、いい度胸してるな！」藤川刑事は西田刑事を振返って肩を竦めた。「これが、あの娘の母親かぁ？　これもまた、一筋縄ではいきそうもないなあ」
玄関脇の別棟を改造したらしい歯科医院から、子供連れの若い女が出て来る。
「痛くなかったでしょう？　ここの先生はお上手なんだから」母親が覗き込むと、小学生らしい子供は歯列矯正中の歯をむきだしにして笑った。看板には審美歯科とある。この家で遥子はどんな立場に

あったのだろう？　藤川刑事は思い巡らしながら渚家の生け垣に沿ってゆっくりと歩いた。T町の市街地の南端、新興住宅地に面した渚家は、前と脇を道路が走り、すぐにでも改装できる別棟があって、在来線の駅からは五分弱。歯科医院の立地条件としては申し分なかったのかもしれない。

隣家の主婦は西田刑事の再訪に戸惑いの色を隠せないでいた。今度は一人ではなく、遥子の家を一周して来た、気難しそうな藤川刑事が後に立っているのだ。

「また、あの話ですか？　困ります！　別に確かな証拠があってお話した訳じゃないんですから……。勿論、出鱈目を言ったわけではありませんけど……。遥子ちゃんが退院した頃、バイクやオートバイ事故の起きた周辺で、遥子ちゃんの運転している車を見掛けたって言う人がいまして……。何だか不思議だったものですから、それとなく聞いて回ったんです。やはり、何人かが確かに見たっていうんですよ。だからって、車のドアに、お父さんの時のように激突したわけではありませんから、遥子ちゃんの乗っていた車は傷一つ負ってはいなかったんです。……だんだん上達していったんじゃないのかなあって。わたし達、ぞっとしたり、笑ったりしたんですよ。ええ、でも遥子ちゃんは可哀そう。あの娘を悪く言う気なんて、わたし等には、これっぽっちもないんですから……」

主婦の足元で、裏口から来る排水溝が、喉を締められたような呻き声を上げた。

「どうして彼女が可哀そうなんです？　母親が再婚したといいましたね、それで？」西田刑事が体を乗り出した。

「それもありますけど、あの時……あの悪戯っ子が、前を横切らなかったら、あんなことにはならなかったんですから……」
「それは、どういうことです？」藤川刑事は咎めるようにいった。
隣家の主婦は落着きをなくし、渚家の方を見て急いで身を隠した。
几帳面に刈り込まれた芝生の向こう、花壇で薔薇の手入れをしている遥子の母親の姿が見えていた。黄色のシャツにオレンジ色のパンツ姿だ。
主婦は口の前に指を一本立てると、玄関側に位置を変えた。
「あの時、遥子ちゃんもお母さんも、あまりのことに驚いて、状況を見落としてしまわれたんです。多分亡くなられたお父さんに聞かれたら、原因は、あの悪戯っ子を避けようとして、遥子ちゃんの車のドアに衝突してしまったのだと、おっしゃったと思いますけど……」
「ほんとですか？」藤川刑事が意気込んでいた分、空気の抜けた風船みたいに小さくなった。
「ええ、遥子ちゃんのお父さんは、地方新聞の敏腕記者でしたから、あの何とか言う、どでかい自慢のバイクで何時も飛び回っていらっしゃいました。あの日も取材中で、渚家の前の車道をかなりのスピードで走って来られました。わたしはあの時、お父さんの進行方向から、お隣とは反対側の舗道を歩いて来ていたんですから、遠くからでも、状況はしっかりとこの眼に焼き付いています」
「詳しく話してみて下さい」西田刑事が声を押さえて言った。

「少年は、わたしの歩いていた舗道の延長上に立っていました。お父さんのバイクは車道をわたしに向って走って来たんです。停車していた遥子ちゃんの車とは、かなり間隔をおいて進んで来ていました。それが、突然、少年が飛び出したものですから、お父さんは少年を避けようとして、左にカーブを切ったんです。その為に、遥子ちゃんの車に急接近し、慌てて、体勢を持ち直して、遥子ちゃんが丁度開けた右側ドアに激突して、飛び上がったんです」

「そのことを、警察に話されたんですか？」

「いいえ、わたしもその時は、お父さんが遥子ちゃんの開けた車のドアに、ぶつかって死んだことにショックをうけていましたから……。でも、ずっと後になって思い出したんです。その時には、もう、暴れる遥子ちゃんを近所の人たちが、がんじがらめにして精神科病院に送り込んだ後でしたから……」

藤川刑事は植木越しに遥子の母親に目を走らせた。母親は芝生の上に散った薔薇の花びらを蹲って、一枚、一枚拾い集めていた。刑事の目に病室で蹲っていた遥子の姿が重なる。

「少年は白川和馬、そうなんですね？」藤川刑事が断定するようにいった。

「ああ、わかっていらしたんですか。教会の隣りの……。あの時、和馬君、たしか、手に何か持っていたんですよ。鏡か何かだと思うんですけど、光が走ったように私には見えましたから。……ともすると、あれが、遥子ちゃんのお父さんの目をくらましたんだと思います。遥子ちゃんの車はお父さんのバイクと同じ方向を向いていましたが、ドアを開ける時、前後を確めたのなら、あの光は目に入っ

ていた筈です。お母さんには何度か話してみたんですけど、取り合って頂けませんでした。今頃こんなことを申し上げても、もう遅すぎますよね。……遥子ちゃん、あの事故のお蔭で、折角の大学合格も、初恋も、みんなパーになってしまって……。こうしていても、合格祝いにお父さんから新車を買ってもらい、初恋の大学生とドライブして、はしゃいでいた遥子ちゃんと、お母さんに気違い呼ばわりされて、連れて行かれる遥子ちゃんの姿がダブるんですよ。遥子ちゃんはお父さん子でしたから、何時も、お父さん！　お父さん！て、甘えるあの独特の声が、お隣りから聴こえていました。誰よりショックを受けたのは、遥子ちゃん自身の筈です」隣家の主婦は自分の心の動きを手探りするように言って、はじめて刑事の顔を見上げた。

「わたしが、もっと早く話していたら……？」

「さあ？」藤川刑事は話の間忘れていた息を、身を捩って一気に吐き出した。

「いい気なもんだな！」西田刑事が遥子の母親の方を顎でしゃくって言った。

「でもあの方、歯科医のご主人にぶたれるんですよ！　ほんと、毎日です。体よくこの家をあの歯科医に乗っ取られたんですよ！　遥子ちゃんを準禁治産者にして……。おかしいのはお母さんの方じゃないんですかね？　多分、歯科衛生士とご主人は怪しいんですよ。それなのに、唄なんか歌って！」

「渚さーん！　奥さーん！　ちょっと話して頂けませんかあ！」植え込み越しに、藤川刑事は遥子の母親に向って声を張り上げた。

「……母さん隠れた、かくれんぼ、……どこにも姿は見えません、……空に流れる白い雲」歌声が心なしか大きくなった。

隣家の主婦は刑事にむかって肩を竦めると、下水に浮いている薔薇の花びらを、箒の先で掬い上げた。

「警察医が渚遥子に面接し、精神障害のため、取り調べ不能と判断した。よって、捜査本部としても、打開策を講じなければならない。幹部と話し合った結果、これからの捜査の重点を、ジョージと若葉と紫山会の線に絞ることにした。いいな！」佐川捜査一課長が捜査員を見渡していった。

「精神障害と診断されたからって、逮捕できないわけないのでは？　犯人はそれを計算し、警察をなめているんです！　大体、この間病院に行った時だって、顔が見えないほど汚物を塗りたくっていたんですから、あの女はずるい！　病院では突然のことで、こっちも驚きっぱなしでしたから……。あれだって、塗りたくっていたものは、今にして思えば、大便ではなく、泥だったんじゃないかな？　臭いだってそう思ってしまったから、そう臭ったのかもしれない？」勝呂班の西田刑事が興奮してまくしたてた。「二三分と時間を限定されていたから、追及も出来なかったが、何だってそう思えば、そう思えてくるんだから！」

「そこだよ、犯人だと思ったら、そう見えてくるんだ！　とにかく、渚遥子だという物的証拠はない。

二三の状況証拠だけでは、公判を維持することなど、とても出来ない。すべて推測の域を出ていないじゃないか！」佐川捜査一課長が抑制の効いた声で、西田刑事を押さえ込んだ。
「彼女は今回の事件で六人殺したのかも知れない。それでも何も出来ないんですか？」藤川刑事が挑戦するようにいった。
「三田則子は自殺だから、四人なら分りますが、六人というのは誰のことです？　黒川も彼女なんですか？」大田警部補が食らいついた。
「それに、結城海人です！」
「あれは、病死でしょう？　白川親子に原因はあったとしても……」
「渚遥子は大雪の日、結城海人に巡り会い、着衣を剥ぎ、彼を野外音楽堂のステージから雪の中へ突き落とした。救急車の到着時の状況からみて、そうとしか考えられません。それから、彼の持物を使い、結城海人になり代わって復讐して行った。　殺意も、若い女の子の思いつきだから、差し迫った必然性は感じられない。渚遥子は自分の手帳を持っていました。病院で見せて貰ったんですが、そこには大きな×印が六個並んでいました。多分指令を受けた順に、記していったものと思われます。殺人鬼は殺すために殺すが、それを儀式化して、倒錯したなりに正当化するんです。彼女にとっては殺しを実行したのは結城海人であって、自分ではない。したがって、罪悪感はない。それを精神障害と片付けていたら、殺人者はみんな精神障害者ですよ。たまったもんじゃないな！」激情にかられた藤

川刑事は怒りに震える手で、ネクタイを首から荒々しく引き抜いた。
「しかし、その結城海人を殺したというのも、推定じゃないか？　自然の成り行きで下に落ちた。地球には重力が働いているんだ。現場にあったというトランプのハートのエースは、結城海人のマジックだろうが……。自分自身を蹴落せとは、幾らなんでも、指令したりはしないだろう？　救急車を呼んだことと矛盾してはいないか？　コソ泥目的の第三者によって、突き落された可能性だって否定できない。直接的な死因は、小西羊年は事故死、結城マリナは焼死、三田則子は自殺、幸田ケイは事故死、結城海人と黒川信哉は病死だ。雲野大輔殺人事件と黒川信哉誘拐殺人事件は、雲野の養子、雲野才気に会いに行って分かったんだが、南原勇気の可能性は高い。才気のいうおねえちゃんが遥子だとすれば、南原勇気は遥子と繋がっていたのかもしれない。しかし、黒川社長誘拐事件の時には、訊問中で、遥子はわれわれの目の前に確かにいたじゃないか！」勝呂警部は藤川刑事と、ことごとに対立した。「それより、社長の死体を、南原勇気に仕立てあげた雲野が、社長の生存を偽装して、渚遥子に、社長が会社に現われたなどと偽証させた可能性がある。エレベーター迄、雲野の貰った引き出物を持たせたのも、彼女が雲野の手先だったからだろう。僕の経験からして、あんな若い娘に、連続殺人を決行する体力も気力もない！」勝呂警部は自信に充ちて言い切った。
「南原勇気を捕えることさえ出来れば、結城商事連続殺人事件を解決できると思ってやってきたが……。やつはもともと蒸発していたんだ、隠れるのはお手のものさ！　黒川信哉の運転手は、結城海人

が犯人に間違いないという。……歯ブラシのDNE鑑定の結果も、こともあろうに結城海人のDNEとほぼ一致した。背広も靴も彼のものだと、結城家の家政婦が追認した。新品も寸法は寸分違わなかった。マンションの管理人も住人も、何度も、結城海人に出会ったと言い張って譲らない。遥子が男装していたのではと、矛先を向けては見たが、笑って否定されてしまった」藤川刑事は声を落とした。

「だとしたら、黒川を誘拐したのは誰なんです！　結城海人は生き返ったんですか？　行倒れ人の行政解剖など信用できないとでも？　行倒れのあった数日は大雪で、解剖する医師も手薄だったのでは？　それとも、やはり暴力団ですか？　それなら連続殺人事件は複数犯になるが？」大田警部補が怯え顔で藤川刑事を見た。

「いや、渚遥子が可憐な風情で、凶悪犯という姿をしていない分、怖くなりましてね。あの姿を思い浮かべると悪人は、こっちの方だと思えてきます。……しかし、そこが落とし穴だ！　病院の図書室で彼女は精神病関連の図書を読み漁っていた、貸し出された記録が図書室のパソコンに残されていました。あれを読破すれば真実が見えて来るかもしれない。しかし、捜査本部長の決断となれば、我々にはもう、手も足も出ません。残念だが、いずれ、彼女さえ生きていれば、必ず正体を現わす時がくる！　そう信じなければやっていけないな！」藤川刑事が身震いした。「結城海人の親友の丸茂医師が興味深いことを言っていましたよ。『海人は死に当って、どんな究極のマジックを使ったんだろう？』とね。結城海人は子供の頃、魔術団にはまっていたことがあったんだそうです。結城海人が、死んで

から連続殺人をしているのだとしたら、これこそ、本物の魔術じゃないですか！」
捜査本部全体が宙に浮んでいた。この機になっても魔法の絨毯に乗っかっているのだ。
「しかし、ここに来て迄、魔術ですますわけにはいかんでしょう！　渚遥子を、盗みで起訴することも出来ないんですか？」高橋刑事が不満を押さえ兼ねて言った。
「銀行のカメラには、確かに彼女の姿は写っていた。カードの暗証番号を知っていたんだ。生前、秘書として雇われ、結城から金を貰った可能性が高い。それに、赤木班の調査で分かったんだが、渚遥子はあの幸田ケイの落ちた砂採取り場の砂山で、穴に落ちて死にかけていた。砂利トラの運転手が彼女のボーイフレンドで、人工呼吸をして助けたと言う。遥子もケイと同じように、命を狙われていたのではないのか？　彼女も被害者だとすれば、事件の構図も変ってくる！」勝呂警部が他の班を意識して大声になった。
「ああ、それなら、病院の医師から裏もとってありますよ。幸田ケイは遥子のカルテに記入されていた日時の三週間後発見されているんです。だとしたら、事件の一週間前に、遥子は事故に遭って死に掛けていたことになります。ケイの殺された一週間前に殺されかかっていたんです。仮に時間のずれが無かったとしても、二人で争って落ちたのなら、その時点でケイも発見されていた筈だと思われますが？」赤木警部補が当惑したように口を挟んだ。
佐川捜査一課長の右手が捜査員の暴走を押さえ込むように、掌を見せて前に突き出された。

「そこまでだ！　その位言ったら、気はすんだだろう。いいか、重要なのは、『僕は、弁天のジョージに殺されます！』というメモを雲野大輔が残していること。安西班の調査で、事件前、ジョージが若葉の名で、雲野大輔に多額の保険をかけていた事実も判明した。金は紫山会から出ていたんだ。疑いを避けるためには、入籍前に保険に入れて置く必要があった。若葉の荷物の中から時限装置に使った時計の枠が出て来た。雲野に飲ませた薬は組織のヤクザが遥子に持たせたものだ。遥子が当日、結婚式の幹事から、結城社長と雲野分の引き出物の入った袋を受取ったのは事実だ、これは確認した。受取った段階で、雲野分に爆薬が仕掛けられていたのだ。ジョージ側に物的証拠、状況証拠はある！」

佐川捜査一課長は、行詰った捜査の活路を求めるように言った。「北洋不動産から排除された紫山会の、黒川に対する恨みは深い。それに、ジョージと若葉の結婚式とは隠れ蓑、実体は黒川から排除された組織の総決起大会だったんだ。これで、共謀による犯行の動機は明らかだ。捜査本部としては渚遥子の妄想だけでことを終らせる気はさらさらないよ！　これからは勝呂班も紫山会に投入し、捜査本部挙げて、ジョージ、若葉、紫山会の線を洗い直すことにする。いいな！　次の展開が無い以上、もう、渚遥子でうろうろするな！」

捜査員は班長から指示を受けると、組織と戦う緊張感からか、顔を引き締め、それぞれの方向へ足早に散って行った。

43　エピローグ

二ヵ月経っても、渚遥子は治療を拒否し、病状は不安定のまま医師の管理下に置かれていた。南原勇気は依然として行方不明だ。

追及に行詰ったすえ、捜査本部は、結城商事連続殺人事件と切り離して、雲野大輔殺人傷害事件で、紫山会の城寺優を含む三名を、殺人傷害及び幇助で告訴した。違ったとしても、この期に組織犯罪を叩く価値はある。

捜査本部のメンツをかけた大捜査の結果、拾い物のように、組織の地下火薬工場が発見され、事件は思わぬ方向に動き出して行った

川嶋みどりは、閉店後を借り切った喫茶店内を見回した。ここに鈴木よう子がいないのが残念な気

がした。わたしも別の方法で！　と、最後の日に鈴木よう子は言った。彼女は正義の申し子、何時か電話をくれるに違いない、わたし達は戦友なんだもの！

「日協連の大流通センターで、短い間でしたが、パートとして働いた私と友人の鈴木よう子は、再起を期した皆さんに、言葉巧みに詐欺を働いた彼等を、どうしても見過ごすことが出来ませんでした！……」人生に裏切られ続けた人々の集まる会場の暗さを払拭するように、みどりは勢いよく立ち上がると、陽気な声で付け加えた。「皆さん、力を合わせて、奴等に一泡吹かせてやりましょうよ！」

「まあ、まあ、まあ」コーヒー茶碗をカチカチ鳴らし、煙草臭い息を吐きかけながら、被害者たちは川嶋みどりを手で制した。

「一寸の間、俺達を放っといて呉れませんか！　被害者は俺達なんだからさぁ！」

日協連、大流通センター詐欺事件の被害者達は、みどりの前で、果てしも無く堂々巡りを繰返した。

「告訴するにはするで、金がものを言うんだ。俺達には、もう、金も、体力も、余命さえも残っていない。高い弁護料、費やされる膨大な時間と、心労。考えただけでもお手上げだな！」

「その上、勝ったとしても、金が支払われるとは限らないんだから……」

「なら、泣き寝入りするのか？」

「詐欺師の思う壺じゃないか！　奴らはまたぞろ出てきて詐欺を繰返すんだ！」

「冷酷無比な女首領の化けの皮を引っぺがして、なんとしてでも報復してやる！　人間を信じてやま

ない俺達を、よくもまあ、手玉に取って呉れたもんだ！　一味の男達があの女を神様佛様みたいに持上げて見せたとはいえ、途方もない鼠算に、何故易々と引っ掛ってしまったのか、ザンキの思いだ！天地神明に誓って、このまま見過ごすことはしない！」

「だとしても、奴らが罰せられても、俺達には一文の得にもならないんじゃないかな？」

「ならどうする？」

「見栄はもういい。如何したらあの魔女から一円でも多く、金を奪えるかですよ！」

「そうだ、しかも急いで！」

大流通センター詐欺事件は、パートの川嶋みどりの働きかけで、被害者の会が結成され、会の告発により、最近になって男性幹部が二人逮捕された。しかし、彼等の口は堅く、いまだに女首領、木村今日子は地下に潜伏したまま掴まっていない。

幹部の代人である弁護士は、示談に持っていこうと被害者側と交渉を始めていた。裁判の決着まで長くかかっては、被害者にとっても耐え切れないとの見方が、詐欺師側を力づけていた。しかし木村今日子からの連絡はなく、示談金のめどは未だにたっていない。

若葉は季節はずれの菜の花で、雲野家の小さな墓を一杯にした。若葉の他に雲野大輔の死を悼む者など一人もいない。結城商事の実権は佐々に移行していた。

兄は死んだ、殺されたのだ、それだけははっきりしている。若葉は本当の独りぼっちになった。暗い墓の中、蜘蛛の巣を払い、震える手で、母の骨壷と並べて兄の骨壷を置いた。

お経は知らない。しきたりなどどうでもよかった。菜の花畑に、入り日薄れ……。眼を閉じると若葉の歌声は、故郷の菜の花畑まで震えながら広がっていった。

あの日、長い間妻妾同居してきた我家で、父が愛人の方をとり、本妻と本妻の子、若葉達は家から追い出されたのだ。燃えるような入り日に向って、当ても無く歩く母と兄と若葉の、長い長い影法師が、後から陽気について来ていた。それが嬉しくて、幼い若葉がスキップすると、影法師は踊りながら地平線まで伸びていった。

兄は最後の最後まで、若葉を幸福にしようと必死だった！　それなのに若葉はジョージに荷担して、兄の必死の忠告を嘲笑したのだ。泣きたかったが、涙も涸れたのか出てこない。

弁天のジョージが、兄殺しの時限装置に使った時計の枠を、こともあろうに、若葉の荷物の中に隠していた事実を警察から知らされた時の驚きを、若葉は今も噛みしめていた。おまけに雲野大輔に唖然とするような多額の保険を、若葉を受取り人として掛けていたのだ。後日疑われないためには、入籍しない前に手を打つ必要があったのだろう。幸いなことに籍はまだ南原のままだ。

自分の不始末から、組織犯罪の餌食になって兄を死なせ、保険金詐欺が表沙汰になり、自分も送検されるとは……。

その上、幸田ケイの死によって、大金をものにした兄の遺産を引き継ぐという、たった一つの望みさえ、無残にも断ち切られたのだ。才気が兄の養子になっていたなんて！　舌打ちしても後の祭り。

若葉は勇気から、ものの見事に報復されたのだ。

若葉の歌声に、雑音のように低く纏いついてくるのは、声変わりした頃の紛れも無い兄の歌声だ。

夕闇が、若葉を包み込み、過去に向って際限もなく流れて行く。

希望　！！

ある日また、希望が、遥子の胸に取り付いた。

靄のかかっている朝、ありふれたTシャツにジーンズ、踵の低いサンダル姿、ショルダーバッグを肩に掛けて遥子は外に出た。

靄の中、大きな建物が薄っすらと見え、先方で人影が動いた。誰かが呼んでいるのだ。遥子は足音

も立てずに、その人影をつけて行った。

完